

川柳塔

昭和六十二年三月十五日印刷
昭和六十二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七一十九号



日川協加盟

No. 719

四月号

麻生路郎二十三回忌 麻生葎乃七回忌
中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

日 時 昭和62年7月5日(日)

会 場 高野山 普賢院 TEL 07365 (6) 2131

高野山駅前からバス(大門行又は奥の院前行)

「千手院橋」下車すぐ

◆法 要 (法要に参加される方は前日からお泊り下さい)

◆川柳大会

お 話	金剛峯寺第四百六世座主	森 寛 紹 師
兼 題	「水 草」	山 内 静 水 選
	「福寿草」	高 橋 操 子 選
	「金 魚」	野 村 太茂津 選
	「 壘 」	小松原 爽 介 選
	「大 空」	去来川 巨 城 選
	「書 斎」	磯 野 いさむ 選
	「二 階」	西 尾 栞 選

各題2句 締切1時(投句拝辞)

会 費 3,000円

前日観光(奥の院・大門など)4日午後1時高野山駅前集合

宿泊 普賢院 7,000円(川柳塔社宛ハガキで予約して下さい)

◎大会出席並びに宿泊を希望される方は5月末日までに川柳塔社宛お申し込み下さい

◎会場までの所要時間は南海電鉄ナンバ駅から約2時間です

主 催 川 柳 塔 社

鈴の鳴る道

西尾 葉

去る三月四日西武百貨店の八階の会場で、不慮の事故で手足の自由を失い、僅かに動く口に筆を銜えて詩画を描きつづけている星野富弘さんの「詩画展」を見に行った。綺麗に描かれた花の絵に、短い詩が書き添えてあった。

花の名前を知らない
そのことが

今朝はばかに嬉しい
花だって たぶん
自分に付けられている
名前を

知らないで咲いている

蟻よその草が
木に見えるか

その石ころが岩に見えるか

蟻よ

私は何に見える

鏡に映る顔を

見ながら 思った

もう悪口をいうのは

やめよう

私の口から出たことばを

いちばん近くで

聞くのは

私の耳なのだから

いのちが一番大切だと

思っていたころ

生きるのが苦しかった

いのちより大切なものが

あると知った日

生きているのが

嬉しかった

風は見えない

だけど木に吹けば

緑の風になり

花に吹けば

花の風になる

今私を過ぎていった

風はどんな風になったのだろう

夕方うちへ帰ると

かあちゃんがいった

椿の木に登って

あそんだんべ

そして

坊主頭についていた

椿の黄色い花粉を

ふいてくれた

こんな素直な詩を読んだ夜は眠れない。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

書き足してかきたして子に遠く住む

園山 よし子

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

鈴の鳴る道……………

西尾 葉……………(1)

沖の暗いのに白帆が見える……………

野村太茂津……………(2)

川柳塔(同人吟)……………

西尾 葉選……………(4)

自選集……………

東野 大八……………(28)

■川柳太平記(107) 川柳の群像 山路閑古……………

東野 大八……………(32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十丁)……………

黒川紫香選……………(34)

水煙抄……………

黒川紫香選……………(36)

秀句鑑賞

同人吟……………

玉置 重人……………(31)

愛染帖……………

水煙抄……………

土居 耕花……………(57)

〈女性コーナー〉 茴香の花……………

橋高薫風選……………(54)

■同人アンケート 私が川柳を始めた理由と契機……………

小出智子選……………(58)

沖の暗いのに白帆が見える

あれは紀の国みかん船

野村 太茂津

青い海、木の国、美しい海岸美の自然に恵まれた我が郷土は、古代海上交通の要衝で、古くから文化が開け幾多の文化人を輩出してきた土地柄です。活力ある県勢、観光紀州路浮上、文化向上を目指して、積極的に施策を進めています。

一方では心ない人に、列島の盲腸だとか、近畿のオマケとか揶揄されています。

そこで、古くから名高い人々や名所を宣伝の目玉に使います。高野山弘法大師、徳川五十五万五千石の城、華岡青洲、真田幸村、武蔵坊弁慶、近くは佐藤春夫、有吉佐和子……

わが敬愛する紀国屋文左衛門もその一人。いろいろ文献資料を要約してみると、江戸中期の豪商、姓は五十嵐。八丁堀の材木商、幕府の御用商人で、儲けた金を潔く豪快に使って遊んだ。紀文大尽。寛文八年(一六六八)生誕地は、紀州熊野、和歌浦、加太、有田郡別所、或は海草郡下津町とまちまちで、確証は

里 小路・林 荒介・田中 叶・内海幸生・小沢幸泉

大路美幸・神谷凡九郎・神平狂虎・田中正坊

岩田美代追悼吟行句会	田形美緒	(63)
川口弘生先生の想い出	吐田公一	(64)
さよなら弘生先生	本間満津子	(65)
私たちを見守って下さい	神夏磯道子	(65)
弘生先生の手紙	前川千賀子	(66)
初歩教室	阿萬萬的	(68)
「旗」	高田博泉選	(70)
一路集「顔」	山本規不風選	(70)
「芯」	浜本義美選	(71)
柳界展望		(72)
本社三月句会		(74)
各地柳壇(佳句地10選/中原諷人)		(78)

■ 4月各地句会案内 91

■ 編集後記 93

座右の句

子に孫に叱られ炬燵の暖かし

(虹城)

私の句

平凡に老いて素朴な自負の石

桑原掬水

ありません。

幼名は文平、文吉、長じて文左衛門、俳号を「千山」と称した。

和歌山県史編さん委員長・安藤精一教授は「歴史は現在と過去との対話である。問題意識をもって史料に問いかけると、明確な答がかえってくる。問いかけ方によって答は異ってくる。歴史は書きかえられる……」から始めて、紀国屋文左衛門を説いている。

一七五〇年前後、諸文集に、上野寛永寺根本中堂を寄進した、とあるが、紀州には何一つとして寄附していない。文化元年(一八〇四)山東京伝にも、材木商、大金を使った。「黄金水大尽益」(一八五五―一八六六年)にも、肝心の「紀州」が出てこない。文政五年(一八二二)「うかれ草」(流行歌)に、冒頭の「端唄」が出てくる。

「千山」の上方吟行でも、なぜか大阪乞食宮奈良大和等で詠んだ句があつても、紀州での作品は見当たらないという。歴史家は史実を踏まえて述べているのですが、郷土を愛する者にとっては、紀国屋文左衛門は、紀州和歌山の人として、今に生きて名を売ってほしい。香り高いみかんの花蕾は今、白くふくらんでいます。五月には咲き初め、段々鼻を、たちばなの香りで包みこみます。さあどうぞ紀州路へ!



西尾 葉選

米子市 石垣花子

私にもまだ描き足らぬ女の絵
又一つ私をしげる紐が解け
生きざまを私は少し書き直す
望郷の手紙がダムに浮いている
薬人形マリオネットに少し妬げ
日記帳泪壺にはしてならぬ

八尾市 高杉鬼遊

うっかりと好きだと言った四月馬鹿
父母の歳はるかに越して誕生日
銭に背を向けてときどき振りかえり
人死んで何んで気になる保険金
人の首ストンと落とす鉄の冷え
大臣とおんなじように嘘をつき

岡山県 土居耕花

野苺よお前は知らぬ事ばかり

冬眠の蛙のぞいて円高か
繋がれて恐れ入ったか吊し柿
露の芽よおばはん達が待つてるぞ
オッサンのした豆腐には臍がある
パチンコを出ると悲しい顔になる

竹原市 小島蘭幸

明日を思うて金より銀の方を取る
パチンコに負けて帰ると妻がいる
几帳面小さい男ではあるよ
温泉ゆらゆら自由が続くのは怖い
毒舌家少うし耳が遠くなり
句集届いて雨が静かに降っている

堺市 高橋千万子

御意見は合点ゆかぬイヤリング
アクセサリーすかん男に引っかかり
遠まわしずるいと思う手に出合い

代筆の手紙に恋が乗り移る

すぐ返す気の五日たち十日たち
つり橋の向うで好きな人が呼ぶ

松原市 谷垣史好

牛乳箱の汚れを誰も気にとめぬ

地図を畳めば中東は薄い霧

玉手箱あければN T Tの株

たかが女と口が裂けても言えませぬ

腐っても鯛とおっとりしておれず(新日鉄合理化)

鉄冷えや男は軽くなるばかり

下関市 石川侃流洞

耳掃除すると聞こえるいい話

高齢化閻魔は暇でいるそう

北は吹雪日本も広いなと思う

街へ来てカラス火種を掘りたがる

薄墨に暮れて海峡ロマン抱く

党と別たか子の話聞きに行く

桜井市 岩本雀踊子

心の隅に一匹鬼を飼っている

ぐずり雨長屋の愚痴がもれて来る

雪消えた峠を越えた夢売屋

サムライの血をひいていた辞表かく

職探し疲れた男に昼の月

心豊かに仏飯を盛っている

弘前市 波多野五楽庵

極楽の前で割り符が見つかからぬ

恐ろしや妻の手配の待つ酒場

やすらぎの音に聞こえる鬼胡桃

試着室値段がいつも折り合わぬ

格調の高い酒飲みだつてある

買い物に誘う二月の紫外線

岡山県 嘉数兆代賀

むつかしい言葉は知らぬ芹なすな

フライパン嘘を上手に裏返す

朝の鏡に素顔を写す負け惜しみ

腰は曲つてもおんなの身だしなみ

死神よそう簡単にうなずけぬ

ラストシーン花に埋れて眠りたし

平田市 久家代仕男

黒塚に私の影が奪われる

影法師お前だけでも泣くまいぞ

はしゃいで帰りひとりの飯を炊く

おでん屋を帰ればおでん鍋が待ち

法灯に冬の木立のもの思い

童顔のむかしのままで禿げなはり

島根県 堀江正朗

相づちを打つ顔見えぬ胸の中

眼底にしだれ桜はまだ残り

白い杖なりに人生譜を奏で

巢作りの雀生きてよかつたね

盲人の下着きちんと替えさせ

眼の不満耳の不満も胸で埋め

倉敷市 野田 素身郎

小康を得てまず株式欄を読み
一年生部員は雪掻きから始め

晩酌がもすこしほしい寒の入り

飲んで歌って踊って出れば雪模様

面接が終つてキュンと腹が空き

雪落ちるたび目覚める山の宿

和歌山市 西山 幸

種袋春来たりなば来たりなば

太陽がいつばいイブたちアダムたち

頑なに背を向けている書棚の書

貧しさをからかう春の試着室

間の抜けたせりふだんだん恐くなる

苦界から祈りをこめて雛流す

玉野市 小谷 仙山

点と線結んで愛をたしかめる

必勝を願う相手も鶴折っている

死んでしまつたら正解は出るだろう

梅折つて床の間に玄関に

人間くさい人間神をおそれない

猫の子をひぎに老後というくらし

兵庫県 遠山 可住

うまい具合に国鉄辞めて三年目

わたくしは百円ですよお賽銭

何型か知らんが風邪に討死にし

最後の一本くわえタバコを買いに行く

おふくろの味が炭火へよみがえり

貧乏と仲よく生きることに決め

大阪市 西出 楓楽

やさしさの陰にやましさ見え隠れ

ご近所の陪審員は手きびしい

自分がこわくて妥協点を消す

弱点がかわいい人にさせている

湯豆腐が好きと淋しいことを言う

柚切れば乾いた詩情満ちてくる

島根県 堀江 芳子

見つめてる指輪と今日を大切に

したたかに握りしめてる夫の鬚

鯛焼きもとうさんも好き桜土手

こだわりもなく再会の手を温め

さりげなく罪着るものがいて和む

嘘をつく笑顔にかえす笑顔もち 大阪市 津守 柳伸

激辛に馴染めぬ父の自閉症

石鹼の香りにむせる淡い春

寝付かれず羊千匹飼いならす

壮絶な火の粉くぐってきたミンク

相性の吉に油断が少しある

沈丁花匂うと揺れる走馬燈

近江八幡市 前川 千賀子

悼 弘生先生(二句)

ほろ苦いチヨコとなりけるバレンタイン

約束を破る形で星流る

渡り鳥昏い湖のみ見て帰り

再職の途や文学のゼロ地帯

紅梅の紅より淡く恋ごころ

ナルシズム電話カードを贈るのも

和歌山市 松原寿子

優しい鞭きびしい鞭よ君が好き

毬のようにいつもの場所へ跳ねてゆく

糸車くるくる武器のない女

炎えるもの白い呼吸のなかにある

遠廻りしよう優しい風となら

水面の蒼さへ嘘は通じない

寢屋川市 柴田英壬子

鳴呼弘生先生

ハンサムに撮った写真を含羞まれ

挽回を期して一旦倒産す

ワイングラス深いいたでを負っている

満腹感まるで知らない百合の花

ハモニカの旋律菜の花匂い出す

山河あり日本の春のよい唱歌

伊丹市 榎谷寿馬

孫七人ただそれだけというドラマ

墓地だけはせめてキャッシュで話す

金婚へローンの妻が付いてくる

消しゴムが少し堅くて寒に入る

七十や愛はローンで買えぬかも

八尾市 宮西弥生

少年のところに大きく母が住む

三月の女のウソのやわらかし

姉妹盃交わす仏の日

男も女も出合いを待つて定期券

鉢植えを集めて誰かを待つている

京都市 都倉求芽

熱い茶へつまらないこと言うを止め

狒犬と一緒にさせたい雪しぐれ

販売機肩書なんぞは認めない

針持つと母息づかい整いぬ

鉢の梅少し豊かな四畳半

京都市 松川杜的

投稿はしないがパズル解いてみる

かき餅を焼くカンテキを買ってくる

勲八と遺影をでんと祖母の部屋

町内に一軒きいどん(きつね井)の旨い店

鮮明な夢幼き日の事ばかり

京都市 山本規不風

展望台花の話を弾ませる

新しい住居が欲しいのはおんな

シンテレラの伽倻に父の長電話

恍惚の恋愛中という散歩

余生見ゆ老母へ暗剣殺も突き破る

倉敷市 小野克枝

明日がどうあろうと爪は切っておく

考えを逆さに向けて運を待つ
美しく泣いておんなを前に出す

結局は他人と思う坂の道

武器の無い女に音のある暮し

米子市

林 瑞 枝

水中花瓶の丸さに溶けてゆく
蟹すきの鍋で情話を煮てみよう

遠い日の青春を枕に呼んでみる
あつたかく叱る介護の掌が温い

今日というページに夫婦の面を置く

岡山市

川 端 柳 子

灯を消して心の虫干しなどいかが
寒椿ひっそりなりそめから語り

盛り場で女が虹を描く手相
使いすてカイロでつないでいる命

米子市

政 岡 日 枝 子

小さな刺がなんでこんなに痛むのか
三面鏡本当のことを言っている

若いから嘘は言わない方がいい
突然に消えたあなたの微笑よ

柳井市

弘 津 柳 慶

こうなれば虎の尻尾も踏みつける
忠ならんとすれば孝ならずアカンべー

八円の端数をつけて大安売

岸和田市

福 浦 勝 晴

一級がずらり並んだ選挙事務
三ヶ日父は静かに朝の酒

呉 市 林 野 甦 光

一望の草靡かせて佳人住む
春風に目尻の皺は見せまいぞ

ブライドがあるので粘るのはよそつ
勇ましい音で出てゆく宿の下駄

神罰と言ひ張る友の春炬燵
どうしても妻とは合わせぬ節廻し

登山靴磨くことない大ホテル
数学も女も嫌い割切れず

千円札角があるのがはずかしい
同封の為替に義理を果たさせる

大阪市 西 森 花 村

とつおいつ家路を辿る冬の月
宇宙無限のちは一つ椿落つ

癌などと癌でないから言えるのサ
クロイツェルソナタ聴いてる鰻どんぶり

桜咲く丘で謀反を考える

信頼に答えられない日の焦り
倅せの中で倅せ見失う

アメリカの基地金網の長いこと(沖縄の旅)
姫百合の塔であらたに涙する

琉球語一つ覚えて旅終る

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

(" ")

西宮市 林 はつ絵

ざわめきへ平らに秤置いてみる
風向きに靴を変えたりしない父
終着駅花占いもやめました
皺だけが増えた少女の顔になる
個人ブレー句読点だけ大切に

富田林市 藤田泰子

過去のこと喋りたがらぬ揚羽蝶
母さんが使うと鉄良く切れる
空っぽの缶は大きな音をたて
無為無策白にもこのごろ飽いている
嵌め殺しという窓がありマイホーム

富田林市 田形美緒

春一番辛い過去など忘れましょ
ゆっくりと注文つけるにしんそば
畳替え古女房は健在で

傷テープばかり巻いてる薬指
過去帳に知らない叔父が居たそうな

松原市 玉置重人

ロボットが買う自販機の缶ビール
休肝日すすめる医者赤い鼻
老夫婦デートは天神さんの梅
N T T くじが当たったフルコース
沈丁花春がそこまで来た香り

米子市 林 荒介

満月よ大樹の翳で瘦せるなよ

台本を伏せて約束たしかめる
雪の夜の遠い景色を胸に描く
わたくしの影を他人が踏んでいる
お迎えが来るまで主語を温める

豊中市 安藤 寿美子

逃げきって少し淋しくなってくる
迷って出て冬のコギブリ仕止められ
暖冬に少しあわてた沈丁花
野良猫の恋に小馬鹿にされている
死ぬ時は何か奇蹟をおこしたや

大阪市 黒田 真砂

雪霏々と素直になれぬ日の悲し
菜食にだんだん馴れて老いの膳
想い出をしまった箱が見当らぬ
恥多い余生なれども夢がある
明日からの暮しに欲しい春の地図

島根県 小砂 白汀

カーニバル前夜仮面をとりちがえ
初恋を風のように未亡人
赤と黒どちらも本音ボールペン
沈丁の香慕うて雨が来る
パン屑をもらい野性を忘れかけ

鳥取県 川崎 秋女

ミイチョロピー みんな個性をもってます
哀しい日猫の言葉も聞いてやる
核家族でないぞ三匹猫がいる

おしゃべりな猫とひとりの昼を食う
三月になればと猫に言い聞かす

大阪市 本間 満津子

いつからか兄弟喧嘩しなくなり
それはそれとしてご飯は喰べなけりや
水仙に酔い友情に酔う寒見舞
鬼は外苦笑している鬼瓦
病む人を思えば春の陽のどか過ぎ

大阪市 神夏磯 道子

ひな祭り家中の顔円くなる
逃げ込める部屋が温いので困る

この人に病気の愚痴があつたとは
秘密など隠すことない兎小屋
水仙が咲くのを待っている炬燵

和歌山市 福本 英子

チアガールのリズムで届く春の風
一点を取られてからのシートベルト
きつめの足袋で真昼を逢いに出る
口堅い女がこぼした独り言
立春の声に慌てる洗い髪

和歌山市 堀端 三男

名勝図絵ここにもあつた大師井戸
朝市にまだ生きていた竿秤
負けて勝つ処世がやつとわかりかけ
昨日からの愚痴が溜っている茶の間
諍いはこたつの中へ持ち込まぬ

和歌山市 牛尾 緑良
天辺へ着くと梯子が邪魔になる
ポケットベルこんな絆で足る会社
燃えた日のドラマを消すと妻になる
増税の政治へ入れた票でなし
故郷が暮れる木守柿が暮れる

和歌山市 神平 狂虎
硯一面想いは海を越えてゆく
木石や遠い汽笛を聴きながら
春の旅 色鉛筆を揃えよう
苦しさも見せずに生きるポリバケツ
淋しくはないかと星と立ち話

東大阪市 森下 愛論
元旦の鯛一匹でうらおもて
初大師スラれて来るも何かの縁
酒ぐせを知ってる板前さからわす
誰とでも打ちとけ呑み屋で損をする
学資難スべってくれてアリガトウ

松江市 恒松 叮紅
一合であしたに夢がある無職
じわじわと三百票のつけがくる
神様も罪親も子も音痴
父権暴落して男性化粧品
雑踏の中で寂しい父の背な

松江市 柳楽 鶴丸
寒さにも季節忘れぬ猫柳

あせつてもリズムなかなか戻らない
心得てる妻からめてから攻めて来る
股のぞき川柳人と俳人と

娘も重症バレンタイン症候群

松江市

舟木 与根一

北帰行白鳥の湖水温む

陽炎や空地じりじり値が上がり

百姓に豊作貧乏という仕組み

豊作貧乏大根は花ざかり

お隣と有刺鉄線の仲になり

倉敷市

稲田 豊作

八十路尚鑿鑿夢の二つ三つ

逢う人に聞いて欲しげな嫁の出来

信念を通して回るひとり独楽

人情の掛け橋があり世を渡る

不憫です重い財布を知らぬ妻

島根県

西村 早苗

糖尿を小瓶ビールは噛んでのむ

それなりの理由があつて酔い切れず

宍道湖に恋のボートが一つ浮く

薄化粧女房にうれしい事がある

人の眼をなせかけたがるサングラス

島根県

榊原 秀子

強がりかとても嫌いな冬木立

梅の花ほめればつづく空の青

袋小路猫は上手にぬけてきた

字が下手で書けないからとくる電話
歌えないから宴会きらいです

島根県

梅 みどり

さりげなく気になる施設の事にふれ

飽食のみかんにあきて冬苳

ドラマ見る茶の間主役へ変身し

思いきり歌えば六十路も花ざかり

洗ひ髪素直にとかす柘植のくし

島根県

錦 織文子

すばらしいこの平凡をみつめおり

新床の畳へ明日を抱いて寝る

信じていいのでしょかど鬼あざみ

いい年をしてとビール酌いでやり

三拍子の雨を聞いている鳩時計

岡山県

時 末 一 灯

冬木立嘘をついたら花が咲き

歩道橋誰も近道とはいわず

戦中派すつこけながら走る道

脇見して古巣へもどるのも男

予備校の悲喜交々に桜みち

熊本市

有 働 芳 仙

春爛漫家族の地図も塗り変り

女性コーナーできて男の狭い地図

バレンタイン入歯へチヨコのほろ苦さ

民族の移動桜の泣き笑い

散り際は今よと桜散って見せ

高槻市 辻 白溪子

ファンからの花束名前が入れてない
花道の芸へ拍手が追って来る

夕焼へ融けこみコスモス過疎に咲く
庭石の位置ほめ客の話好き

倉吉市 奥谷弘朗

友達で居たいと内気なプロポーズ
ドン底を耐えた男の底力

力には力と信じている頑固
正直に神を信じて生きるだけ

焦点のぼけた議論でなおもつれ
素顔なら人の情がよく解り

ママが描く地図を飛び出せない息子
過保護でも口孝行はしてくる

方言の味が地酒の喉に溶け
叱られてしまえば丸い月が出る

終章を飾る涙は溜めてある

「愛してるから叱る」傲慢が鼻につき
数珠かけて京の坊主は楯をつき

在位六十年囲炉裏の火も消えて
クレインの影星の一つを吊るのかも

五色の虹で足らへりおらが春

千羽目の鶴とあなたを信じます

米子市 小西雄々

大阪市 天正千梢

兵庫県 辻文平

秘密など持たず朝日と語り合う
集合に遅れ運よく生き残り
御詠歌に声を揃えて燃えている
左遷地というまいこころ蕎麦どころ

美祿市 安平次 弘道

ショーウインドと花屋先取りする季節
妬心めらめらつららが怖いある殺意
モグラ叩き手加減しないのは女
虚勢張る哀しき夜のサングラス
墨濃ゆくすつて女に喪が明ける

鳥取市 両川洋々

たかが噂に僕もおびえる傷を持つ
夢一つ夫婦は落ちる汗で描く
デスマスクおだやか癌と知らぬまま
ポックリ死にたいなどと悪妻虫が良い
渡り鳥不況列島見た吐息

大阪市 江城修史

人情の陽溜りが欲し渴く街
妻が居て子が居て古希の坂を行く
幾山河越えて楯となる妻よ
風化する夢の一つを胸に抱く
セールの果たせぬノルマへ風の私語

唐津市 久保正敏

音程は狂っていないチンドン屋
背信が明るい不倫となるドラマ
逢引も句会も多忙の中に組む

一隅を照らす役目のそれでよし
懸想する女に歳を勞られ

唐津市 仁部 四郎

入学の日の太陽のまんまるさ

上役に背いた夜の長い風呂

横文字に強い課長で二児の母

田圃路こんなに広い春の月

借越に私も死刑肯定論

奈良市 宮口 笛生

多忙さのやりくり自治会長つとめ

安楽死そんなはずうずうしいことを

世渡りの下手な男の大きな手

同窓会ハナハトマメマス忘れてず

ごまかしは効いても身体ついて来ず

諫早市 原田メイシユン

六〇年起伏を越えて来て安堵

六〇年やと夫婦の歩幅合う

好きにせよなどと手綱は引いており

仁王さん何に気に入らん目玉むき

ビニールがあるから季節狂わせる

藤井寺市 吉岡 美房

美代子さん逝く(二句)

ことわりもせずに先逝く冬の鶴

還らない人の句読めば雪となる

雪とけて恋の歩幅を小さくする

野仏が真っ先に聴く春の音

宝石と妖しい夜に妥協する

名古屋市 越村 枯梢

フルムーン頼みの株は下げつづけ

やば用と言って出かける珈琲館

街角の女易者の泣き黒子

老衰の二字であっさりけりがつき

軍手干すマネーゲームを聞きながら

今治市 矢野 佳雲

傷に塩すりこむようなめぐり会い

ニワトリは鶏舎アパートには人が

不倫というテレビ見ている昼下り

趣味として盃集めしてる下戸

父さんは甘いと母が妬けている

松原市 佐藤 藤子

青春の蹟きがあり今日がある

当然の結果あわてることはない

朝の靴ひからせ妻を主張する

身に覚えがあるのでみんな笑っている

狒犬さん世間はとんと疎ましい

寝屋川市 稲葉 冬葉

かあさんが笑うと皆んなよく食べる

福笹に浮気封じのお札つり

超越に少し油断の裏鬼門

眉が細くて越えられぬ坂がある

分身の痛みが辛い百度石

寝屋川市 江口 度

あれ以来消息のない冬木立
雪だるま焦れても雲は動かない
春の足音確かに聞いた寒の鯉
立春や蝶の夢見る花の種子
女心よ一たす一が二にならぬ

尼崎市 春城 武庫坊

朔風が男の胸をたぎらせる
大正の顔がぼちぼち間引かれる
冬木立出ると本音がよく聞こえ
会者定離有情無情の駅の風
駅を出て自分の顔を確かめる

尼崎市 春城 年代

いろいろあつて六法全書傍に置く
平常心当てにならないときがある
同居離婚をつきつけられている男
男子校になった母校のブロック塀
会えば別れの人の世にある発車ベル

八尾市 宮崎 シマ子

事かまえて母を花見に誘い出す
保育所の可愛い花よピンクと黄
路の臺冬の誤解がとけぬまま
手枷足枷息子大人の仲間入

波に乗り浄土についた流しびな

倉吉市 渡辺 独歩

故実には做わず身勝手古稀を往く
地方選敢無い桜もあろうもの

楢山は日本離れて「日本村」
文化庁よりも作家の飯がよい
株式会社神戸もエイズだけに負け

大和高田市 岸本 豊平次

畝傍山日の丸に吹く御代の風
繋がれて犬はおあすけから覚え
病窓に働く街が眩しすぎ
家継がぬ次男で嫁が先に来た
弟のいたずらがある内裏雛

神戸市 山口 美穂

昨年を詫びつつ雛を飾りつけ
節分やいい鬼も居るから鬼も内
先ず値段老母は気になる冬苺
暖冬とあいさつ風邪の声でする
老母の記憶は訂正きかぬ紀元節

西宮市 西口 いわゑ

見栄張ったわたしを影が笑つてる
水仙が咲いた朝から病癒え
この町に馴れて駅まで近くなり
涅槃図へガイドの指の細かりし
公園の椅子でやさしい風と会う

高槻市 竹内 花代子

気遣って補聴器持参で来た見舞
声の出るあくびが聴える襖越
後始末済んだ頃に老母が食べ終り
あの人この友頼まれてる選挙

宅配を預り田舎のおすそ分け

宝塚市 丸山 よし津

冬枯れの林で赤い実を拾う

ソプラノで合唱花屋のシクラメン

コンニャクの歯ごたえ嬉し冬の宿

見え見えのお世辞言ってる身の寒さ

母が居て程よい小鉢木の芽あえ

出雲市 吉岡 きみえ

有頂天になってしもやけかゆくなる

またヒップ二糧のびて春炬燵

長いものに巻かれる俗語かみしめる

ふところ手抜けないわけがひとつある

覆水盆に返らずわたしの失語症

寝屋川市 平松 かすみ

つつがなく夫婦茶碗が並べられ

頑張って値切ってみたがLJで

五割引き袖もボタンもちゃんと付き

一丁の豆腐へかぶるヘルメット

湯豆腐へ京阪電車乗り継いで

寝屋川市 堀江 光子

古都税の寺にも雪の清らかに

北帰行国境のない鶴の群

逢えぬかも知れぬどうしのいずれ又

別れて冬の噴水に佇む日

別れする今宵は歌のない酒を

茨木市 井上 森生

気まぐれな愛の行方は北の唄

五十歳もつと見たくて飲みたくて

コーヒーがうまいやる気の朝だから

青雲の弓さわやかに京の寺

蠶きは隠せぬものよ蔭の臺

西宮市 奥田 みつ子

かくれんぼ薬の匂いと陽の匂い

駅ごとのローマ字を読む兄妹

姑の足今年も花見出来そうなの

白梅の化身のような姑の自負

秘密少し洩れてきそうな春の宵

出雲市 原 独仙

平和なり鼻毛を抜いて事件記者

八十歳以上隣保の中に僕

年金が孫可愛がり叱られた

お世辞とは知りつつ後を振り向いて

東京都 増田 次章

銀行で不意に遺言すすめられ

どたん場で逃げた上司を責められず

保険セールスがけろつと死期に触れ

銭が人変えた話を今日も聞き

今治市 越智 一水

湯豆腐でほどほど酔うも才なるか

ひとときを浄土と思う日向ぼこ

上向いて男は涙など見せず

うつむいて自分の顔をカバーする

竹原市 森井菁居

土壇場で気負うピエロになりさがる

試行錯誤いつか答が出るだろう

新人類のハートも擱んでゐる演歌

それなりに愉しい男の市場籠

浜田市 佐々木裕

今日もまたやっさもっさで明日に生き

売り物のエクボやつれた捨て台詞

ブランドを着ても履いてる靴に泥

人の目にどう映ろうと俺の妻

浜田市 中川幸一

月曜に日曜を恋い落ちこぼれ

ストープの薬缶の蒸気自己主張

いつ迄も死なぬ気で買う長期債

票田のための予算は追加させ

東大阪市 斉藤三十四

風呂場では浪速盃唄えます

さからわぬ主義で流れについてゆく

一本気損な性とは知りながら

コンピューターに心の底を見すかされ

羽曳野市 榎本吐来

靴ちびることを悟った頑固者

沈黙を平気で耐えるのは女

二級酒に切り替えてからついた運

弘前市 田中叶

あいの子の小犬おかしな名をもらい

エレベーターの横でガンだと知らされる

裏ビデオ本当は見たことがある

国労の先頭を行くカタツムリ

大阪市 長谷川春蘭

温泉に満足したのか妻は発ち

子供持つ親になっても子は子供

サービス過剰いやなイメージ残すまじ

商売用仮面の笑顔持ちあわせ

豊中市 田中正坊

耳鳴りは私だけのシンフォニー

言うだけは言わせておいた落し穴

無為の日がまた暮れてゆく沈丁花

地下鉄の駅に北口南口

仙台市 川村映輝

審議拒否誰がための国会か

倅せの過去を抱いてる不倅せ

均等法何と女の多いこと

無駄のないくらし大きく深呼吸

鳥取市 両川洋々

ああ神も無力か父が癌で逝く

ロボットへ念力などは分かるまい

平和ボケしたのが核を持ちたがり

新人類の母体は試験管らしい

鳥取市 森田熊生

妻僕を信じて弁当箱洗う

弁当にうめぼしがある日の安堵
人として父として履く靴がちび

宇部市 平田実男

長男結婚

嫁自慢したい心を押さえかね

ぼけ防止ですよとバチンコ屋へ出かけ
信用と言ふ財産を子へ譲り

算術の下手なお医者でよく流行り

大田市 藤田軒太楼

肩書が減つて男を小さくする

残されて無口で向う古い二人
春めいた青空トンビ輪をひろげ

平凡な幸せ孫が起しに来

西条市 片上明水

酔眼ではかり仰いですまぬ月

隠れ場所多い都会が肌に合う
まっすくな道へ出てから減る味方

川渡る口笛が見え水ぬるむ

倉敷市 藤井春日

手みやげに京の香りのさくら餅

想い出も豊かな老いとなりしもの
鈴の音四国路既に眼を醒まし

独り酌む酒しみじみと過去のこと

高知県 赤川菊野

何時までも冬の絵ばかり画いている

時の人家に帰れば粗大ゴミ
さりげない親切だから身にしみる
門限もひとりで決めて孤りの灯

出雲市 園山多賀子

兄の忌に言葉飾らぬ甘茶蔓

切磋琢磨心の友が欲しい刻
昭和元禄中流意識に溺れてる
春の絵を一枚貰う隣人愛

症候群不倫の背筋凍らせる

ぶつつんかな近頃僕のもの忘れ
細胞の一コが謀反考える

あの時の一票に首しめられる

強がりと承知で妻のいい返事
初釜の待合室は衣裳展

団欒の炬燵が語る祖父の恋
今は駄目何を言うても糠に釘

春を見に妻の手を借る車椅子

一献を呈す花信の頼りなる
美しい武器です蝶の長い舌

座禅組む足に不精の爪がのび

唐津市 浜本久仁於

卯の年に意気込む千支の四番打者

如月や廟江鎮の物語り

唐津市 浜本義美

唐津市 浜本義美

唐津市 浜本義美

唐津市 浜本義美

円高に切られた首が売れ残り
語らえば肩の重荷が軽くなり

唐津市

山口 高明

養父母と知った夕暮れ樹を下りぬ

独房の座禪余計に眠られず

髭剃ってみたが婦警も覗かない

独房の孤独ゴキブリ可愛がり

和歌山市

若宮 武雄

仁王さんの意地をくすぐる春の風

気に喰わん記事だからこそしかと読む

観音さまに五十回忌の母の影

老醜は木石ならば無きものを

和歌山市

内芝 登志代

倅せな絆母乳がたんとしてる

手作りは無学の祖母が優等生

カーテンのおしゃれへそよく春の風

もひとりの私が賢い事を言う

和歌山市

福井 桂香

そのままの君を見つけた同窓会

ガラス張りの寿し屋で二人落ちつけず

角筋を開けて小言を受けている

安定多数何をやってもよいものか

米子市

青戸 田鶴

許しても胸の奥にはつもる雪

だれかれに話してみたいいい話

ブラックを好みコーヒー通だとさ

波の青春には春の語らいが

米子市 田中 亜弥

チンドン屋迎えて策をねりなおす

今もなお恋という字にあこがれる

大根をぐつぐつ煮こむ縁です

新人類は夢買いごとが大好きで

米子市 菅井 とも子

一株をめぐって話題まだ続く

雪の無い冬でもぐらも眠れない

ブラックコーヒにかえて乗り切る曲り角

願いごと一つに絞り月詣

米子市 寺沢 みどり

天国へ明かす心算りのひとり言

子の權に一步おくれる屋形船

船底の創は知らないままの旅

一升の米研ぐ今の倅せよ

米子市 澤田 千春

曲り角笑い話に逢えそうで

いい旅の話温泉に咲くはつば年

飾り窓みむきもしない風とゆく

コーヒーと沈んだ国で見た夕陽

米子市 光井 玲子

正直に書けた手紙を気にしている

わら灰の温もり母の膝に似て

今日からの生きる味つけうすくする

おとぼけも愛敬まるく住んでいる

大阪市 河井庸 佑
かくすればかくなることとすら読めず
騒ぎ過ぎ周りの反感かつただけ

権利だけ言うて責任横へ置く
他所の花赤く見えるのに負ける

大阪市 北 勝 美

病妻に未だまだ遠い春風

売上税騒ぎをよそに梅の花

事故おきて同じ言葉を繰り返す
色と艶熟れたいちこの官能美

四月馬鹿地球ぐるみの芝居好き

大阪市 藤 田 頂 留 子

春の名でみすごしておく恋の使者

自動ドアせっかくやけど又にする

異常気象自然も手抜きおぼえたな

大阪市 大塚 節 子

片方を落した手袋好きな色

ささやきの小路春待つ鹿もゆく

赤提灯寒うてゆかずぬくうても

さよならで主婦に戻ったクラス会

大阪市 吐 田 公 一

難問を持ち込む三年目の夫婦

NTT株が当ってから金策

妻も子も主の趣味に狩り出され

旗揚げへ妬みの花輪一つくる

大阪市 塩 田 新 一 郎

掃除機に福豆福を吸いとられ
寒の入り我が家は大阪夏の陣
売上税鯨とはまちの使い分け
葱買うて北風の道帰ろうか

大阪市 古 川 美 津 枝

花の下視線は楽しABC

満開へまけてまへんで五目寿し

受話器おく思案はすまいちぎれ雲

明太子とても話の好きな酒

岸和田市 島 崎 富 志 子

めずらしい積雪ちっちゃい雪だるま

むこ殿を相手にうれしそうな酒

ブロック塀我が物顔の猫通る

たのしみの農園鍬が重くなる

岸和田市 古 野 ひ で

可も不可もない人生で古稀がくる

なせばなる命の限り忘れまじ

雑踏の流れも楽し人にふれ

その時の為の薬を忘れかけ

鳥取県 林 露 杖

裸木の各々の彩山笑う

逆縁の忌に鶯の初音きく

健やかな老い喜びと佗しさ

老いひとり置いて時間が過ぎていく

復縁を迫る男が兇器持つ
鳥取県 森 田 布 堂

売り上げ税あとには引けぬ意地と意地
火の島も住めば都という心
晩酌もほどほどにして古稀近し

岸和田市 清野 こう

夫のこと(三句)

入院の労り見知らぬ人と解け
祝福を全身に受け退院日
だんまりで老い向き合っている炬燵
一枚を脱いで畑打つ冬日和

鳥取県 森山 盛桜

鞭打って過去をホントの過去にする
指みんな人差し指になりたがる
折りたたみ椅子に座って落ちつかぬ
なさぬ仲それでも松は美しい

鳥取県 新家 完司

百歳になっても杉はまだ子供
木の橋を渡ると梅の匂う村
宝くじに賭けてみるとは寂しいね
流れ弾にあたったことは内緒だよ

神戸市 仲 どんたく

流水の溶けて流刑の窓の春
披露宴と葬儀で凡人ほめられる
針の孔まぐれで通る齡の嵩
かまくらの明りにリングの頬がある

姫路市 人見 翠記

約束を破る言葉は風邪心地

バス停で会釈する人の数がふえ
細雪という優雅を見上げたり
干柿の甘さ友の情けの甘さかな

箕面市 坪田 紅葉

老い楽し責任なしの日が暮れる
法事すみ急に亡夫が近くなり
片づかぬ部屋にも春か桜草
頭かず揃った今夜は湯豆腐で

羽曳野市 佐野 白水

老妻の長湯へ声かけ確かめる
梅は隣桜は我が家褒め合って
老人会六十代が先に逝き
アメリカの大豆でアメリカの鬼追わん

羽曳野市 中村 優

紺スーツ晴れの門出へ桜咲く
減税をからくり人形解いて見せ
幻想の夢から醒めた紙吹雪
北浜の指が円高もて遊び

河内長野市 井上 喜酔

実年のやもめが恋しい妻の墓
フルコースもうあきらめたダイエツト
さけられぬ戦へ湯豆腐煮え詰る
眠らせて置こう伝説心地よく

羽昨市 三宅 ろ亭

卓上の壺山茶花の独り言
壟断の記事へ一太刀浴びせねば

塵取りと簪へ留守居物を言う
茶にしよう一人仕事のひとり言

尼崎市 奥山 美智子

ほとぼりのさめた鏡をふいている
返り花自分は自分ひとはひと

自動ドアのようにはならぬ心です

天井に明日の視点が置いてある

寝屋川市 岸野 あやめ

酒屋には男やもめがすぐわかり

おばはんも酔えば女の愚痴を言う

盗まれてニセとわかった歌仙の絵

子は宝子は鏡とルビー婚

富田林市 片岡 智恵子

添え文の甘さに酔うて揺れるバラ

脳みそがピンクに染まる恋ごころ

肌を刺す風へ輪島の蒸しアワビ

化野に仏の待ちし宵ざくら(故美代さんの写経吟行)

岡山市 小林 妻子

木偶なぞに負けたりはせぬ手の温み

田圃よりゴルフの方へ実を入れて

生きてやる一度は散った命なら

湯加減をほめて卒寿の母達者

兵庫県 脇田 米朝

つんば棧敷に置かれて聾よくきこえ

よいとまけ愚痴な話は放つて置く

熟年になって炎えてる唐がらし

それなりの角と丸味はもっている

弘前市 斉藤 操平

裸木は雄叫び画布は押し黙る

先物の火傷(やけど)写楽の顔になる

お札所で鱗一枚ずつ落とす

耳栓をして雑踏の影に溶け

寝屋川市 宮尾 あいき

せかされて夕陽陸橋に引っかかり

蜘蛛の巣に顔突っ込んだかくれんぼ

菜の花を摘んで枯らした小さい罪

倉吉市 渡辺 菩句

お雑煮が済むものぐさ太郎さん

火星水星には棲めぬおさむい話

こがらしがくるりとこころがわりする

倉吉市 野中 御前

受話器から冬の雷鳴りだした

口惜しくてバカバカバカと鍋みがく

七人の敵より寒い核家族

福岡県 横地 雅風

老生五枚溜った皆勤証

働いた体だ八十路の鍬捨てぬ

そうめんの郷でつるべを綜紹で汲み

大阪市 山根 いつを

ほめられに行くのめいませ警察署

うせものを口ばっかりで探してる

おくやみをつい間違えた結納屋

大阪市 中西 兼治郎

妻の腕主人の鼻を高くする
盃の中に浮気の虫もいる

姫路市 大原 葉香

子を五人育てた母の子守歌
ハイキング屑も腹のへった歌
借りに来た友うどんで別れけり

大阪市 北山 悟郎

今日も又三面記事に血が匂う
天気図も前線が出来病んでいる
結局は生命も金でけりがつき

姫路市 丁坪 サワ子

戦友会腹の底から出る話
一匹狼なりきるのには牙が無い
金貨持ちそれから金貨持ちあぐね

大阪市 板東 倫子

子育てが済んで方向見失う
年輪の誇りへばけの花が咲く
忠孝の文字見当らぬいじめの世

姫路市 松浦 輝月

死ぬまでに要る金額を胸算用
宝くじ外れ無聊に立ち還る
呆けるなら盛大に呆けてやるつもり

大阪市 坂本 仙吉郎

相談は出さずじまいに里の母
ペアルックスキーへ弾むセーター編む
何となく辻褃合せ年の功

姫路市 中塚 遊峰

暖冬で梅の見頃も過ぎ去りぬ
ようやくに雪溶け水の洗堰
鉄冷えにNTT株だけ熱気あり

大阪市 渡部 さと美

裏切り子餓鬼大将の方へつき
たこ壺は黙って花器になりすまし
愚痴言うて最後自慢で友帰る

島根県 石田 清泉

それなりに翔んでいるんですパート
明確な答をくれぬ花ぐもり
春だから春の芝居を演じよう

大阪市 鍛原 千里

二枚舌もう許さないだるまの日
巡査部長飲酒運転もいたします
同窓会会いたくないのが一人いる

島根県 藤原 鈴江

いとしきかなかなかなの玉手箱
雨しとど花は彩増す恋をする
時々は自分に拍手をしよう

大阪市 寺井 東雲

雑草の苦しみ知らぬバラの花
七十の恋は流れに浮かぶ月
けんけんをしながら春の橋渡る

こきざみに震える足はトイレ待ち

島根県 北川民子

レットルを剥がれた壇にも意地があり
ハラハラと山茶花友の一周忌
喪服着たままでカラスよ泣くでない

島根県 松本文子

冬の虹やつと無欲になれた幸
偽善者のままでエンマに逢いにいく
ごまかしが効かぬ十指の爪みがく

島根県 松本はるみ

初恋は舌に溶けゆくオブラート
猫柳冷たい雨にさからえず
焼きあがるパンを待ってるカメレオン

島根県 岸本輝水

戯れがどうやら還暦まで続き
食管の目のとどかない群すずめ
押入れて考えついた孫の知恵

出雲市 板垣夢酔

カラスまで春に誘われ過疎を捨て
あの娘がと見せた茶席の淑やかさ
低利息赤虫元金喰いはじめ

出雲市 石倉芙佐子

いらいらが日毎に募るVサイン
北山は雪かと電話優しすぎ
白酒に五人囃子も酔うている

出雲市 園山よし子

暖冬異変身近な女の不倫聞く

NTT当つただけの子の便り
灯が点くと家々円満らしき窓

出雲市 小玉満江

冬休みママの小言が多過ぎる
魔がさしただけで済ませぬ後始末
自問自答何んにも出来ない日曜日

出雲市 小白金房子

ふきの薹十二単で顔を出す
雪とけて墓前で遠い沙汰話し
嫁姑なごむ一夜の花かるた

出雲市 竹治ちかし

母の背を抜いて柱の傷も消え
見るだけの金貨で新しい年迎え
しぐさまだ子供で親の背を越える

鳥取県 金川満春

車買う値引き交渉妻にさせ
寒中の海難ニュース身につまる
寝です謝る事も覚えさす

鳥取県 土橋螢

サボテンの花が黙って咲いていた
一夫一婦のはじめからやりなおし
村という名のスナックでめぐり逢い

鳥取県 松下たつみ

均等法に二人の時計が狂い出し
生活のリズム職安から貰う
耐え抜いた虹は親子で春に見る

鳥取県 羽津川 公乃

ご先祖の知恵今更に歴史館
野薊の媚を持たない自尊心
女が喋る男が喋る酒になり

和歌山市 山川 克子

買う方が安くつくけど親心
男には妻程恐いものがない
能率の悪い男のビール腹

和歌山市 後藤 正子

コントで埋める温い手紙と午後の雨
とんでもない事に巻き込む昼の月
約束をするから涙のあとが付く

岡山市 井上 柳五郎

無理すなとキヤタツのゆれに制せられ
散髪も歯医者の子も眼はつむり
四十年似た者夫婦のテクニク

岡山市 行吉 照路

悪友のグーチョキパーの一人病む
悪友に地獄の入口教えられ
曲がり道妻子と走る縄電車

岡山県 直原 七面山

言の端に僕は彼女の知性を見
新婚に気を使いつつ朝寝をし
あれからは共に見て見ぬ振りをして

岡山県 岩道 博友

マイカーを購うて仕事に夢があり

言い過ぎを詫びず上座で呆けている
会陽見る寒風の席銭の席

岡山県 荻野 鮫虎狼

離職して無病息災の日が続き
パソコンの話へ祖父の無関心
十二月芝居は腹を切りたがり

岡山県 二宗 吟平

追加とも言えず端数は役がもち
雪帽をかぶるとうちの犬が吠え
人生を達観してか大いびき

岡山県 山本 玉恵

耐えて来た事には触れず鶴を折る
影法師ここからひとりにして置いて
みぞおちのあたりで返事が渦を巻く

米子市 金山 夕子

紅蜀葵中途半端な風はない
会いたくて気軽く出席できました
雪あかり遊び心の冬木立

米子市 茂理 高代

三日月と欠けた私の長話
あの方の組でありたしかごめの輪
焼芋が好きで女で気を許す

和泉市 西岡 洛醉

フルムーン宿の下駄まで妻はしゃぎ
組板と生きてる妻のいとおしく
神仏を拝む背筋に嘘が無い

笠岡市 松本忠三

サーピスの一環大小とりませて
退職の妻の見る目が違つてき
真実は一つ灰色なんて無い

貝塚市 行天千代

年越しの豆食べ切れぬ齡を取り
雪の上山茶花落ちて美を添える
数学の無い大学を選っている

吹田市 茂見よ志子

春愁の鏡にうつる別な顔
春霞歩幅のリズム狂いだす
深爪の痛みに悔いる春の土

松原市 小池しげお

妻の留守時計きつちり廻らない
門限へ立喰いうどん熱すぎる
雪まつり背中のカイロ暑すぎる

八尾市 山下みつる

相談がしたいと娘そわそわし
初弘法敬老証の波に会う
移転先決まらぬ先に家が売れ

芦屋市 竹中綾珠

休日の河原親が遊ぶ子が遊ぶ
タグボート汽船を追つて水を売る
暖冬異変ニッコリ笑えば大根くれ

大阪府 坂口公子

明星が天に小穴を開けました

口笛が大きい春のちぎれ雲
初不動一円玉をはかせます

和歌山県 天満三千代

クラス会いたずらした事された事
一面にしなびた顔のレタス畑
喝采へ黒子の力信じてる

和歌山県 寺田裕美

メンデルの法則忘れた種もある
餅米が静かに沈む寒の水
スズメの涙もらう手続きひまが要り

富田林市 松本今日子

メロン切る談話の中に過去がある
阿呆馬鹿と何んで私を妻にした
顎埋め誰を待つやら銀狐

富田林市 新開千代女

孫が来て腰の痛みも忘れ居り
木枯しが吹けばフアイトがもえて来る
貴婦人になつたつもりで黒を着る

静岡市 渥美弧秀

詩と楽のスクラムも良し古希の坂
老い楽し詩と音楽に風も春
言訳が裏目となつてはね返り

静岡市 渥美弧秀

大仏の胎内にて雨宿り
相槌を打つて愚痴まで聞いてやり
まだ勝てる余力残して明日を待つ

静岡市 永倉僕川

兵庫県
アルバムの庭はおむつが干してある
年金の暮しへ保証頼まれる
夫婦茶碗妻に大きい方をやる

兵庫県
ライバルが回転トビラで落ち着かず
年金の足の軽さや霜柱
写経する思いは一つ時雨寺

町田市
日本をのしる英語訳す年
新機種がローンの残りより安い
イヤリングせず黒板に化学式

東大阪市
正月もパンが恋しくなる世代
坂一つこえた自信にわく力
盛装がゆっくり歩く御町内

七尾市
紅白の餅を背負って里の母
実力の社会も蔭で動く金
臼で搗く寒餅の味里の味

豊中市
祝杯もやけ酒もまた歌になる
頼られて怒っていても親は親
大自然海は知らない補償金

交野市
初詣古い暮らしがまだ残り

中田白季

様々なうさぎ居るもの年賀状
考えてやっぱり黙っている姑

境港市
細木歳栄

藤後実男

円デフレされど桜は咲きはじめ
大往生遂げて椿の土に落つ
嫁姑モンロー主義で平和です

岸和田市
芳地狸村

竹内紫鏑

父さんの鬼に向って豆をまく
歩くこと日課にしてる健康法
国会が寝ても暮し起きている

羽曳野市
田中隆二

崎山美子

一日が長いと思う妻の留守
貸借りのない友だから長続き
二ん月の風が多喜二の忌を知らせ

枚方市
二宮山久

松高秀峰

あこのころの野心がほしい昨日今日
石投げて波紋知りたい時もある
潮時を知ってか知らぬか友の酔い

堺市
柿花紀美女

上田登志実

家族皆じつと見守る餅つき機
年ごとに月日の速く梅花散る
寒の星やるしかないと受験の子

高槻市
川島諷云児

山本テルミ

職引いて婦唱夫随を覚悟する
学歴に触れてはならぬ二度の職
檜山の地図を集めて順を待つ

ここだけの話の好きな群雀
悔いと恥積み重ねつつ喜寿迎う

神戸市 山片紀雄

面倒を避けて本音のコップ酒

西宮市 瀬尾六郎太

雪吊りの景も亦佳し兼六園

亭主元気で云々よくぞ言い

法隆寺鐘が鳴るなり百八つ

唐津市 桑原掬水

大臣賞芸術性を失わせ

秋田犬世界共通語で吠える

ほっておけ孫には親の乳が有る

弘前市 斉藤 荔

貝割菜に土の話はよしましよ

教室に見られぬスキーのうまい顔

林檎噛む音がだんだん春になる

土佐市 中田朱坊

税務署の手紙年金追いかける

春一番ビニールハウスの悲鳴きく

再会の場所目印のない都

大阪市 町田達子

贅沢な孤独ストレス溜めている

草むらのラジオが遠い日を歌う

和泉市 岡井やすお

ストなけりやないで苦勞の経営者

ポケットベル突如鳴り出す麻雀屋

戸惑って妻恋坂で蹴った石
晩年の自由は南無の杵の中

川西市 松本 ただし

牛墓を見つけた岬の石一つ

花に水やるにも言葉かける老妻

飲兵衛は三日前から祝い酒

寒風に切り干し揺れる佗び住まい

負け犬の夫呼んでる台所

父一人子一人座る朝の膳

やるしかない芯強きニューリーダー女史

姑もとし嫂へ依怙地な芯も折れ

はずかしい過去が多くて無口にし

大渦のしずまるまでを待ちましよう

給料の振込み女客が増え

出番待つ巫女入念に磨く鈴

冬の旅垂む心を捨ててくる

茶わんを割ったただそれだけのことでした

ひっそりと咲いても華麗な寒牡丹

嫁が買う椿油は里の思慕

川西市 筒井 朴 竜

唐津市 高知県 小澤 幸 泉

豊中市 奥田 満 女

加賀市 細呂木 魯 木

鳥取県 さえき や え

姫路市 釣 遊 光

遊 光

自選集

本田恵二郎

傘寿の背を枯野の風が来て叩く
バスボートのいらぬ旅の気楽さよ
一番履きよい靴で行く夫婦旅
笑くば千両もらいのかかることしきり
無関心みたいな顔で地獄耳

兎島与呂志

今更に何をか言わん生き残り
寝まくらにジャンケンだけの生き残り
その夜は既当番生き残り
うそみたい弱い兵隊生き残り
六十五歳もう戦争は忘れよう

工藤甲吉

地球公平金不公平回るにも
無常迅速救急車霊柩車
頑固一徹も安心立命か
白梅と紅梅呵呷にも似たり
旧暦は何日かなと月見上ぐ

大矢十郎

鉄は国家なりと口説いた国だった
低音で笑うて円高で儲け
マイカーでクラブ振る世を思わざり
通帳を握って妻の口答え
これ捨てよあれも捨てよと娘来て

野村太茂津

嬰鑠と雪の高野を説く米寿
一笑一若高野で学ぶこと多し
謙信信玄無言で語ってくる何か
生きるとはかくも見事な高野杉
挫折知らぬか青年僧の目は清か

長野文庫

朝寝せよと陽もゆつくりと顔を出し
一年の幸先祝うような雪
長男を叱って響き考える
本当の親かいなあと芸の通
にげ道を拵えておくなさげ道

山内静水

総理のたまわく怖いこと怖いこと
人前でまだ称名が称えない
妻がいて朝夕三度茶碗もて
突つ立ったままではおれぬ手をつかれ
みんな笑つてるのに笑わないのがひとり

藤井明朗

暖冬へさくらも眠い目をさます
凧の糸もつれてならぬ家族の和
子のしつけ親にもほしいエチケット
実年の愛さわやかに目が笑う
知る権利にも常識の欠けている

水粉千翁

刺抜けて心に積もるささめ雪
春の吐息を聞きもらすまじ雪しきり
一握の雪のあたたかさに語る
やぶこやし雪に熟れてる実が笑い
蹴り口も雪の高さに湯のかおり

米澤 暁明

行くところ東西南北みな恵方
置き手紙草書の文字が下らない
未来図の地球ピンポン玉になる
特権にしてもお化粧長すぎる
見逃していたよ水辺の小さい花

高橋操子

ふれもせて互いにさぐり合う世界
ふれ合えば心一つになる世界
新人類珍人類にならぬよう
大安へ気になる事はしておこう
スイートピー部屋一面を春にする

八木千代

あまだれを庇の手紙だとおもう
斧はひとふりで木肌に傷がない
風の辻わかれことばも霧にして
土人形の肌は今でも火が匂う
残菊も心ぐるしく咲いている

小出智子

よだれかけお地藏さまに恩があり
バグマンのような帽子も被ずしまい
ピストルで片付く映画見て帰り
予定には入っていない花便り
桜咲く健忘症のままもよし

月原宵明

百万ドルの夜景に二次会置いて来た
この村の神話伝える炉が燃える
ティッシュひとつ貰う程度の預金帳
脇掛けがもうない相談役の椅子
美しいマグマと思う他人の目

金井文秋

心臓を速歩で試す回復度

頻尿に若き日恋し寒の冷え

血圧計週に一度はせわになり

健康度確認のため歩く距離

神経痛歩ける足の邪魔をする

尼 緑之助

雪折れの水仙白く春急ぐ

もう来たか春一番は政治にも

弁護士と代議士おやおや同じ背な

春ぞ来る哀愁列車水子地蔵

何処向いて翔んでいるのか新人類

藤村 女

巢立つ娘に贈る言葉をよっている

鳩を追う孫を8ミリ追っかける

手の指が器用に動く手話の娘等

主義主張はつきりしてる孫愛す

何も彼もすぐ手のとどく部屋に住み

正本水客

氷魚懸命に生きて美しき

鏡開き今年も歯痒い人という

イントロだけで人生を分った気

耳にたこが出来ると既に許してる

弱点を握られていてよく喋る

千歩さんの絵個展を見る

絵ごころはないが楽しく見る画廊

春だとき近所の梅へ犬を連れ

父が居て母が居た頃来た茶店

借りとくと奢って貰うコーヒ代

孫に嫁貰う話で墓に座す

黒川紫香

市川鈴魚

出世からこぼれ堅いとだけ言われ

春の浮かれで小さな事はこだわらぬ

羽づくろい渚の鳥も春は好き

宮仕え健気に物を言いすぎる

花の便りと嫁ぐ娘がいて落ちつけず

橘高薫風

一日の長が同期の桜にも

葦に花沖航くエリザベス二世号

思慮深き一本それは折れた葦

孫泣いてわが子育て記甦り

大相撲昔のことは言わぬこと

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

玉置重人

運勢の白に油断をせぬように

津守柳伸

心掛け次第でバラ色にも灰色にもなるから
白ほど怖い色はない。まして運勢ともなれば
尚更のことである。最近一皮むけた研鑽ぶり
が窺える作者にふさわしい巻頭の句に脱帽。

公民館の初の仕事はお葬式

谷垣史好

作者独得の鮮やかな切口に微苦笑を禁じ得
ないが、ものは考えようで天寿を全うしたも
のであれば、これに勝るこけら落としはない。
一番高い山が少年待っている

遠山可住

こういう山に応える少年が少なくなつたと
感じるのは大人の悪い癖で、少年はそれなり
に希望を持っていると信じたいものだ。

人の世や裏ばなしには裏があり

西出楓楽

裏の裏まで考えねばならぬとはとくに人

の世は住みにくいと、百年も前から千円札の
文豪も喝破している。が此の句の裏は疑うこ
との苦手な作者の性善説であらう。

三ヶ日いひのしか蝶も飽きてきた

稲葉冬葉

恙なく平凡な小市民の正月ぶりが中七以下
へ流れる川柳眼が言いつくして面白い。

内需拡大コートは長く袖ながく

小池しげお

若者のグブグブ服もこの意味では国策?に
沿っているのかも知れない。諷刺が鋭い。

身の上は似たり寄ったり吹き溜り

若宮武雄

一見逆境をかこっているかに見えるが作者
の句意はその反対でここには気のおけぬ人々
のぬくい情が溢れている。下五が利いている。

歩き疲れてにがい水の味おぼえ

天正千梢

こういう経験をかさねて酸いも甘いも判つ
てくるもので、この水の味は決して忘れるこ
とはないであらう。

時々はうれい夢も見る枕

黒田真砂

平凡だが不足のない暮らしぶりが平易な句
に含まれている。すなおな句。

とびだしてみればとなりへ来た歳暮

崎山美子

誰しもあるあほらしい経験だが、句に仕上
つてみるとおもしろい。

立話だんだん実が入り熱が入り

辻白溪子

よくある風景で、なんぼでもある川柳の材
料の調理味つけはかくあるべし。

追儼豆アメリカ産と知らぬ鬼

渡辺独歩

伝統の行事もアメリカ産のおかけとは情け
ない。実情を鬼が知つたら農政の欠陥ですと
笑つて済ます訳にもゆかない。痛烈な皮肉句。

これという足跡もなく今日暮れる

岩井本藤

庶民の感懐がさらりと流れているが、この
いう毎日の積みかさねが知らぬまに大きな足
跡になってゆく。味のある句でリズム感がよ
い。

友達のは夢を教えない

政岡日枝子

僕に託して人間の心理を巧みに揶揄して面
白い。がこの友達はジョークの判る気のおけ
ない友であらう。

まあまあ年だと思ふ餅が搗け

小林妻子

上ばかり見てたら欲に溺れてしまいます。
下五にこの年の満足感が浮き彫りされている。
豊作の国に住んでパン暮し

直原七面山

破調句に挑戦されている作者だが、正調句
もさすが年季の入った風刺がきいている。

も一人の自分を忘れてはいかん

山川克子

家族の他に私を叱ってくれるも一人の私が
いるのでどうにかここまで歩かれたのです。
この句、叱責調で生きてきた。

川柳の群像

山路閑古

東野 大八

山路閑古。本名萩原時夫。明治33年10月13

日静岡県生れ。三高・東大理学部化学科卒。

東京高等商船講師。日本医大子科教授。共立

女子大教授。俳句を高浜虚子に学び淡々亭閑

古。川柳を阪井久良伎門に入り一水庵桃花の

柳俳号所持者だったが、連俳にも関心を深め

鳴立庵十九世庵主を名乗った。

戦後、山路閑古で定着した筆名は、芭蕉の

「山路来て何やら床し董草」と「憂き我を淋

しがらせよ閑古鳥」から採ったもので、当初

「山路閑古鳥」だったが、カタカナで或日呼

ばれてガツカリしてチョウを除いたという。

昭和14年大村沙華・九十府・山沢英雄ら数

名が古川柳研究会を創立。「古川柳研究」が

機関誌。しばらくして吉田精一・浜田義一郎

比企蟬人・杉本柳汀等の大学教授達に伍して

閑古も加わったがこれを期に彼は俄然古川柳

に魅せられ熱中しはじめる。しかし、昭和19

年戦局の進展と会員等の応召相つぎ「古川柳

研究」は通巻49号で休刊。

戦後、雑誌「古川柳研究」がなかなか復刊

できないでいるとき、閑古は独力でいち早く

昭和22年4月に「日本古川柳学会」という大

きな名の会を作つて、個人雑誌「古川柳」を

出している。これには読者文芸も募集してい

るが、俳句は山口青邨と富安風生、川柳は麻

生路郎、川上三太郎という顔ぶれであった。

また表紙は杉浦非水画伯の色画で、活版印刷

という豪華版である。しかし紙不足のヤミ市

時代もあつて三年で挫折した。

山路閑古の道楽は、古川柳と別に私本謄写文学？が有名である。顔真卿の筆法と称し、架蔵にも「茨の垣」前後篇。「賢愚経」「貝寄せ」その他がある。初版の「枯葉衝」の巻末にいわく

「浜田桐舎君、小庵に謄写版を寄贈せらる。即ちこれを記念して一冊を作る。書を読むは楽しく、書を編むは更に楽しく、自ら作るは更に楽しく。ここをもつて牢固としてわが半生の痼疾となる。笑つべきかな。作者識」

時に昭和22年6月閑古のガリ版文学はここにはじまるというわけ。その著書は「戦災記」史話評論集「史篇四類」等に、自作の未摘花流の艶本もあつたらしい。吉田精一悼文に

「閑古氏の著作は活字になつたものより、自筆自刻の謄写刷りの方に奇々妙々なものがあった。この種の著作は、氏を現代畸人伝中の一席を占むるに十分な資格を与えた」

閑古は昭和52年4月10日没。享年七六。春山閑古居士。石曾根民郎主宰の「川柳しなの」は「山路閑古追悼」号を出している。閑古をめぐる学友知己や一般川柳人数多の追悼記を綜合編集したなかなかの豪華本であった。

「氏は謄写版刷りの自筆自刻の文学？を同好の知友に頒けて、たしか娘さんの婚資を得

たとの噂を聞いた。(略) 閑古氏は、その俳号のように淡々として面白い人であった。その川柳の解釈にはくせがあり、かつて一しょに柳多留拾遺の論講をこころみたま時、かなり方角ちがいで、好んでバレ句がかった意味にとり、また俳諧をくつつけて解する。

氏の川柳や俳諧のうんちくのは、岩波書店の「古川柳」や、筑摩書房の「古川柳名句選」によつて知られるが、後者の後半は「俳諧手引草」で、俳諧のつけ方や、歌仙の実例の解釈である。実はこの部分はあらずもがなで、今日の俳諧解釈の水準からは、二の町三の町の出来栄である。それで通ると思つたところに、氏のこの道の(研究者としては……)しろりとくささがあった。川柳にかけても、戦災にあわれて、柳書や研究書をなくされてからは、大分勝手な「ダロウ解」が多くなつたようだ。(吉田精一)

「戦前から戦中にかけて「山樞」という雑誌を出しておられ、独自の文章を載せ、古川柳の研究も掲げておられた。巻末の「淡々日録」は毎号楽しみだつた。その延長ともいへべき戦後の「散歩」(ガリ版)は、一八五号まで出たが、外国雑誌の故紙利用のシャレたもの。

「川柳歳時記」や「吾妻鏡史話」を出され

たときが未見。書架にあるのは「木葉髪記」「川柳随筆きのうきょう」「仲人の贈物」などで、最後の本は雑々庵の別号。昔グリフィスの映画に出ていたリリアン・ギツシュが青春の憧れの人だつたからだ。(オカ一口ウ)

「古川柳、随筆、日記、俳句、俳諧と八面六臂の御活躍なので、筆名も数あるなかで傑作なのは、鉄筋アパートの四階にお住みのもあるのを書棚で隠し、そのまま亭号とするには憚れるので、アメリカ俗語の *cant* をもじつて観雲亭と命名された。」(青木迷朗)

「(昭29〜31年にかけて)矢つぎばやに沢山執筆して下さつた。ふりかえつてみると「川柳しなの」には書き易くまたそれだけの読者のいることを踏まえての気負いがあつたのではないかと思ふ。口はばつたいことではあるが、そのした読者層を目の前にした筆勢の快よさがあつたにちがいない。世に問うた本をひもとくと、すぐ目につくのが自作の俳句が書いてあることであつた。私には

たつきにも芸にもならぬ祭笛
野遊びの君は一日女王かな

さらびやかなおなごを幻想させてもくれた。(略) ラジオ放送で閑古さんも川柳選者とし

て出演されたが、三太郎さん、雀郎さんとはちがつた匂いがやや俳諧風に出ていたことを覚えてゐる。

研究、句作、随筆とは異なる埒外な風流を描く筆法は、余技としてまた聞えがあつた。その一本、私の知つてゐる判事に前もつて見せたが頭をかしげられ、つい印刷にはためらつて陽の目を見なかつた。どこかで活字化したかどつかは知らないが、別に「僧房夢」という秘稿があるという。閑古さんはそうした遊びごころを隠さなかつた。(石曾根民郎)

和田天民子文博は、昭和13年10月柳三門の「川柳倶楽部」を改組し「俳詩」とし「迷路に彷徨する俳句の誤びようを正し、野卑低級視せられたる川柳の旧殻を解放し、真に俳諧の正道たる本領を發揮せんとするのが俳詩である」との川柳呼称の改称を宣言した際、猛烈なる反対阻止運動を各川柳誌で呼びかけたのは山路閑古だつた。戦局の推移と各川柳人の反対の集中砲火に同誌は二年後に廃刊した。

★次回「岡田 甫」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十一)

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

509 南朝ハ蕪てたはねた武者も出し

本多||南朝は大和国吉野賀名先にあつた朝廷
蕪は蕪武者の略。後醍醐天皇の勅を奏じて拳
兵した楠木正成が、千早城で北条軍を防いだ
折の奇計の一。

南朝の蕪ハ智恵からずぐり出し

一〇二32
九9100
わら武者の作は南北時代なり

八木||「俄雨わらでたはねたおとこ出来」(竈
三19)。「蕪で束ねても男は男」、どんなに見す
ばらしくても男には男の価値があるの意。こ
の成語を踏まえていよ。

多田||贊。八木さん指摘謝

510 夏と秋利足のつかぬ金をかし

本多||「利足のつかぬ金」は金屏風を言ふ。
句意は、金を貸せば利息が入るのだが、金
は金でも祭の金屏風となると、利息を取るわ
けにはいけない。のは当然である。中七がい
かにも川柳らしい洒落である。

多田||贊。

511 ひながくの明り吹けす南風

本多||蜜雪の功のうち、雪明りで勉学した孫
康を詠んだ句。

春の訪れを告げる南風が吹くと、貧学の明
りである雪を溶かしてしまふ。孫康にとつて
はなんともうらめしい春風となるわけである。

孫康が燈し吹キ消ス春南 九八50
とある。

多田||贊。
ともし灯を孫康歛てかき立る 一四七17

512 桜より鉄菊娘ねたる也

本多||「鉄菊」は紋所の名。この紋は沢村家
のもので、本句作句時代は立役三代目沢村宗
十郎である。

主題句は、沢村田之助蟲貞の娘で、花見よ

りは田之助が見たいと娘がしきりにねだる、
というのである。

奥ハ花お部やハ曾我のねだり言ト

多田〓賛。

一三五

513 見たり見せたりで壱両拾匁

本多〓芝居での見合を詠んだ句。「壱両拾匁」は銀六十匁が一両に相当するから、銀七十匁となる。内格子、大夫棧敷といわれた上棧敷の棧敷代は三十五匁であったから、棧敷二面で七十匁になる。

仲人を介し、両家談合の上芝居での見合いと決り、早速棧敷を二面とる。「あの対面の棧敷の方ですよ」とこちらが見れば、あちらもまたこちらへ視線を走らせるので、互いに見たり見せたり、ということになる。

八木〓賛。「見たり」に舞台の方も、の意。

舞台も見たり、見合の相手に自分の姿も見せたり、又見合の相手も見たり……で七十匁。南〓礎賛。「見たり見せたり」は見合を示す語で、勿論観劇ですから舞台を見るでしょうが、本句の「見たり」は関係ないと思います。

多田〓賛。

514 鬼ハ留守かとせんたくに綱ハ聞キ

本多〓頼光と四天王の大江山鬼退治をよんだ句。頼光以下の一行は大江山の登り道の二瀬川で血のついた衣を洗う洗濯女に出会い、この女の案内で面々はめざす酒頼童子の山奥へ向い、見事退治したという逸話。

主題句は、俚諺「鬼の留守に洗濯」を利かせただけの句作。

先たくへ鬼は留守かと四天王 九一七
せんたくで留守かと思ふ四天王 四〇八

多田〓賛。この洗濯女はさらわれたお姫様？

515 瓜田ンよりふらちとうふへくづが入り

本多〓「瓜田」は俚諺「瓜田に履を納れず」。ただし句意不明。豆腐を水増しするため、くづを入れる？

八木〓水増しか。

多田〓わからず。

516 牛の力で熊坂ハ料られる

本多〓「牛」は牛若丸。「熊坂」は大盗熊坂長範。出典は謡曲「熊坂」。鞍馬を出た義経が金売吉次につれられ奥州へ下る途中、美濃国で大盗熊坂長範ほか十三人を斬ったとする

話としてよく知られている。

句意は、吉次の横荷の黄金を奪おうと熊坂長範は手下をつれ、夜襲をかけたところ、十六の小冠者牛若丸にまんまと討たれてしまったというのである。牛一熊は縁語仕立て。

牛若が居ぬと熊坂大仕事

六二五

天狗すけ太刀に熊坂気がつかず

九二六

八木〓賛。「割鶏罵閑牛刀」の効かせが少しあろうか。

南〓八木説賛。「牛の力」は写真版全集「牛の刀」で「力」は誤り。

多田〓八木説賛。

517 あなたハ丑の御としかと吉次聞キ

本多〓先句同様、金売吉次と牛若丸。

牛若丸と名付けられたのは、丑の年の生まれだからであろう、と思った吉次が、牛若丸に「あなたは丑年のお生まれですか」と尋ねたというだけの句。

大屋〓賛。「義経記」によると、このとき牛

若十六歳。平治の乱のとき牛若は当歳とあるから、己卯の年生れ。牛若は小柄で色白だったというから、二つくらい若く見えたかも知れない。二年前の保元二年は丁丑。

多田〓賛。



黒川紫香選

広島市 流 奈美子

名古屋市 藤井高子

一行のやさしさに風ぐ子の便り
他愛ない話に夫婦のリズムあり
胸衿を開けば同じ悩みごと
パソコンに綾とり糸が忘れられ
笑顔で聞いてしつべ返しを狙ってる

富山市 舟渡杏花

片足だけライトを浴びる端役です
奇を衒うことなく軍手の穴がふえ
気に入らぬ箸もあろうに箸枕
地獄絵へ描き添えておくクモの糸
皿廻しへ挑戦さらが底をつき

竹原市 信本博子

糸切ったマリオネットが動けない
ストレスを入れた手紙を出しました
うぐいすに頼みましようか相聞歌
触れるのがこわいガラスの美しさ
退院を待ち続けてた置時計

それは確かな精気よ葱坊主の拳
母さんの指はレモンの香りする
主義主張猿に取られた猿まわし
もみ手の中に何時か本音が擦り切れる
兎小屋風は世代をわけて抜け

佐賀県 寺中三枝子

一日一善ポケットに温い話など
デイスカウント毛皮におんな群れている
鏡よ鏡ひとり芝居の紅が燃え
変身へ赤い更紗を購ってくる
幸運の女神引き止め策を練る

尼崎市 田中晴子

もう無理のできぬ歩幅で虹を追う
税務署が春の開幕告げにくる
感情線もつれて遠い人になる
茶柱に重い空気がふとほぐれ
セールのチャイムとわかる座りだこ

出雲市 久谷 まこと

春一番心のとびら閉め忘れ

春風に浮かれすぎてるスピーカー

人柄を包んだ服がよく似合う

コネ少し気後れもあるユニホーム

ゆっくりと噛みしめてみる社の空気

八尾市 高杉 千歩

居眠りに誘われ伏せる春の辞書

鉛筆をまとめて削る花あかり

鍋底を磨くいい知恵浮かぶまで

同じ齡よその夫とうまが合い

職安の椅子で下手な字をならべ

岡山県 清水 悠貴女

尺取虫の歩幅で越せぬ風の橋

沈む陽へもう争わぬおかめの面

齒車の合わぬ日花の種を蒔く

手に受ける小雨ボツリと春の音

春に咲く花のおしゃべり聞きに行こ

大阪市 清水 康 恵

母の背な淋しがらせてばかりいる

きく耳は持たぬ若さでつつ走る

近道をしたがる子供のスニーカー

均等法おんなの椅子がいくつある

均等法男の敵が増えただけ

藤井寺市 赤木 和子

情念がゆらゆら袂から洩れる

おとつとわたしが掘った落し穴

決着をつけねばならぬゴング鳴る

銀行でもらった釣りは確かめぬ

熊本市 宇野 昭代

名も知らぬ花がきれいな無人駅

裏口へ来て良心に蓋をする

夕食は何かつまんで済む一人

ちえの輪が解けぬ女の細い指

お揃いの服から個性がこぼれ出す

熊本市 大川 幸子

追うだけの楽しさでいいゆとり持つ

背を向けた分だけ強い風あたり

ダイエツト等とぜいたくすぎる娑婆

春一番うれしい音で戸を叩く

いじめられながら生きている野草

熊本市 永田 俊子

その裏を読んで解いてもつれ糸

折れ蓮がいたわり合っている寒さ

春風に心張り棒がゆるみ出す

脚立にもなりましょ上に届くなら

肥後守使って昔を語り合う

久留米市 鶴久 百万両

回り道をした人生を無にできぬ

けもの道へ遁げた女はもう追わぬ
男坂をいっきに駆けて鬱になる

止り木に死ぬまで遊ぶ鳩を飼う
十字架を背負う男に肩を貸す

西宮市 紀市郁栄

長いこと風のあたたかさを知らぬ
ままならぬからだですぐに腹を立て
妻を怒鳴って独り淋しくなるばかり
日記を書くか小康の晴れた日に
車椅子で久方振りに陽の匂い

高槻市 河瀬芳子

捕われの身でありし日よ亡夫の愛
この足は好んでいろは坂ばかり
靴音を宥めて冬の美術館
つんつんとハウス忌愴な葱坊主

失いしものしみじみと冬の底

長岡京市 木本如洲

まつすぐに生きると海は情け持つ
ふるさとに母は老いても紙を漉く
コップ酒ここの暖簾に借りがあ
この路地で生き抜いて来た父の筆
間の抜けたジョークが秋の坂にある

寝屋川市 太田藍子

新しい波へゆつくり乗る老舗
新しい町が出来ます田んぼ道
ふんふんとテレフォンカードが切れるまで
初節句の主役が横で眠ってる
初対面でなつかしそうにする女

寒い朝誰彼なしに声をかけ

小机に開いたままの日記あり

前に立つ人がしきりに咳をする
大川の影絵になって魚を釣り
含羞んだ娘が赤蕪などすすめ

和歌山市 桜井千秀

労りを犬にまかせて日々多忙
自序伝の何処へ打とうか句読点
続編へきれいな夢を蓄える

冥想で暫し焦りを冷やしとく
春うららこれが一張羅で御座候

高槻市 笠嶋惠美子

神仏がこちらを向いている安堵
蘭が咲きポインセチアは忘れられ
白鳥よまた逢う日まで昆陽の池
許されぬ夢を見ているカスミ草
女人高野を振り返る時軽くなる

米子市 足立由美子

美しく老いたいプラン春にたて
もうすっかり春の顔した風と会う
福寿草春のときめきくれました
蛇口から確かな春の音を聞く
太陽の下なら心素直です

塾へ行く合間陣取りかくれんぼ
堺市 桜沢あかり

守口市 森川まさお

もち味は和紙と洋紙の違いなり
廃止線雪雪雪が降りつもる

絵馬堂に梅の香りが満ちてくる
心ブラでもぐら叩きを見て帰り

唐津市 相葉 あき

豆球も又それなりのシヨートする

何んとなく凄む女の黒眼鏡

旗を振る事もなくなり一人居る

福耳でない私のイヤリング

桜井市 前山 美恵子

子育ての途中でねじを巻き直す

うきうきとしてもいられぬ花粉症

芸能レポーターすっぱんの様な仕事ぶり

チンパイ賢くなれと子に呪文

大阪市 上田 柳 影

老いらくの恋とは言わず切手貼る

戦友会死に損なつた顔ばかり

血液型は知らず大病まだ知らず

洗濯機まわらぬ朝は病んでいる

今治市 野村 京子

深爪へ女の性が又疼き

外は雪コーヒがさめた待ちぼうけ

髪梳いて女の夢は空回り

木枯しの舞う夜土鍋がよく煮える

東子市 小山 悠 泉

接点がゆるんで軋む父の貨車

恩人へ花は絶やさぬ花手桶
恋せよと風が私をそそのかす
終章の幕引く役は妻と決め

鳥取県 土橋 はるお

携帯ラジオが手提袋で鳴っている

更生の道に一本木を植える

うちの猫も国際交渉したらしい

指先のない手袋が編みあがる

京都市 松川 芳子

嘘がもうばれているから早寝する

首無し地藏悲しい歴史持っている

均等法神様はまだ御存知ない

山門を閉し思案のままの僧

広島県 田村 新造

雪像が解けるぞもつと寒くなれ

流永の割れる音から春が来る

造船の島には寒い風が吹き

出雲路で和紙漉く水の冷たさよ

鳥取県 太田 幸枝

三猿のくらしの中で惚けてます

売りことば聞かないふりをして女

海荒れて焼酎びんが転んでる

男下駄です用心棒になってます

吹田市 井上 照子

合わせ鏡八十の母少し笑む

かき上げた髪にうかがう娘の所帯

義理チヨコとことわらなくもわかつてる
友帰り新語辞典ひいてみる

尼崎市 丹下 玉子

旅の詩を小箱にためて娘が嫁ぐ
手からこぼれる砂は一途に人を恋う
挫折した心を見る昼の月
祈りかな亡嫁をしのんで日が過ぎる

西宮市 松本 一郎

ハミングは音痴の父の休息日
ほつぺたで二歳の孫が主張する
旧友と酌めばよかつた過去ばかり
秘書の持つ手帖に社長操られ

堺市 宮本 かりん

浅知恵をあたためなおす昼下り
お相伴してまんに引き込まれ
力こぶ小さくなつた父の背な
不況風妻の力が頼もしい

熊本市 黒田 緑

物言わぬ完璧主義が隅に居る
謀叛気も若い覇気なら見逃がそう
八朔の香はなつかしい国訛り
潔癖は玉虫色を遠く見る

寝屋川市 宮崎 菜月

空想へ耽る泉をいまわり
青春譜ふり向けば小さな喫茶店
京干菓子恋の甘さへ溶けてゆく

父の忌に湖東三山訪れる

岡山県 矢内 寿恵子

ボランティア一と日を母と呼ばれたり
カード操る疑り深い顔になる
梅林の誘いシヨールに首を埋め
古日記白い頁にある記憶

京都府 木村 たけし

道しるべ毒蛇が出ると貼つてある
湯豆腐が障子に溶ける藪の雨
仕事から離れた酒はよい仲間
気まぐれな客を降して無人駅

いわき市 新井 泰子

夫とゆく任地の風を共に吸う
生き辞引と言われ出世に縁がない
近道を知つて楽しみ半減し
解説者自説通りに事成らず

尼崎市 森安 夢之助

雑草も春の足音聞いている
酔いどれを送り屈けて飲み直す
手袋の指が破れて日が暮れる
胃ぐすりと漫画の本は離さない

尼崎市 山田 保蔵

初参り内緒のたのみたのみます
行こか戻ろか思案の果ての水鏡
命がけて惚れた女房とケンカする
狂うのはメザマシだけにして欲しい

あの手紙もう届いてるころだけど
茨木市 堀 良 江

前走る車を抜いてみたくなる
胎動を告げる娘母の目になって
バッグからおむつざらりと若いママ
熊本県 高 野 宵 草

ニールックやがて縄帯はやるかも
立候補するから笑顔つくります
こそばゆいお世辞が財布の紐をとき
カタカナの中で日本語が乱れ
佐賀市 江 口 万 亀 子

牡蠣フライレモンと相性良いらしい
節分の大豆をひよこもてあまし
縄電車皆んなよい子に乗せました
口喧嘩いつも兄ちゃん叱られる
静岡市 杉 山 や す

重宝をする時ばかり呼び出され
背負われて孫に軽いと笑われる
孫達が揃えてくれた旅支度
写真よりなお美しい冬の富士
守口市 結 城 君 子

裸木の直立つづく寒さかな
うどん屋のお代は妻の財布から
口下手をおぎなう様に手が動き
関東煮煮上るまでの投句箋
貝塚市 池 田 寿 美 子

春風に間抜けたジョークが載って来る
電話ではすらすら言えるタイムミング
薬にもローンにも浸らずうさぎ小屋
若草山点火の役目に消防団
旭川市 朝 倉 大 柏

流水に早口になる国訛り
割り切った顔で小さい方を取り
ひよつとこの面で流れの中にいる
肩書きが消えて肩幅までちぢみ
米子市 小 村 て い 子

憎むのは止そう今から酒買いに
言訳は苦手で深呼吸をする
丁寧な言葉を交わし冷めている
美しく老いる火種をあためる
倉敷市 田 辺 灸 六

老いの手が痒いところへ届かない
サラ金の督促首輪締めてくる
なけなしの懐のぞく冬の月
催促の手紙は少し強く書き
鳥取県 黒 田 く に 子

塩昆布亡母の記憶へふと触れる
小便小僧お前も晴着ないくらし
食うて寝て牛はゆつくり欠伸する
藁屋根がひそひそ昔話する
熊本市 北 川 一 進

公用と私用硯の使いわけ
熊本市 北 川 一 進

お喋りが真ん中になる昼休み
ワープロがきてから変つて来る学科
なれそめはラッシュで踏んだ靴だった

兵庫県 東 浦 砥 代

良い嫁で口孝行をしてくれる
やりくりを炒める母のフライパン
ささやかな記念にペアで買う部屋着
あきらめの涙女を強くする

尼崎市 的 場 十四郎

からませて小指約束聞いている
屋根瓦ときには散歩したくなり
寒月を窓に写して消す灯り
春の雨傘もあふれるパチンコ屋

尼崎市 鈴 木 良 征

ボーイフレンド出来たと顔に書いてある
問い詰められて真赤になっているリング
ぬるま湯の中に居るのが味方です
のんびりとしてたらあかん陽が昏れる

滋賀県 安 田 志 津

着ぶくれて悲鳴をあげる脱衣かご
冬木立かすかすかに春の彩
喪の庭にも春かけあして露のとう
脇役の自信こぼれるかすみ草

静岡市 澤 田 き ん

お早ようで嫁のせわしい一時間
正座して心の傷へする反省

出来るなら一休和尚に学びたい
ライバルがみな駆け足で行く不安

愛媛県 八 塚 三五島

夫のある女は踵から歩く
何もかも知ってすべてを見失う
よろこびの溢れる声が濡れている
大吉のみくじは家で読み直す

京都市 小 林 英 子

黒鳥は孤愁を秘めた女に似る
一碗に春の彩盛るふきのとう
朝の窓露もしとどな冬日記
白鳥のくちばし指に丸くふれ

高槻市 芦 田 静 江

柳吹く風に仕込みの酒かおる
花好きに陽気が誘う裏の町
慣らされて刺激が欲しい橋わたる
十字架の自覚不倫の風に逢う

尼崎市 吉 永 伊三郎

屁理屈を覚えた孫が又可愛い
病み疲れ眩しくかざす指が透け
お人形と会話をしてる孫娘
絵ハガキに一句を添えてお茶の友

堺市 矢 倉 五 月

自画像が時折りくしゃみしています
逆ろうた子に贈られたフルムーン
正体を見せおうてから情が湧き

堺市 小西小雪

観梅もゴミも同時に見て帰り

水上バス乗れば都の裏ばかり

チャンスないテレホンカード持ち歩く

大阪市 島路太郎

酔いいつかぼつりぼつりと泣き上戸

自画像は若き日のもの髭の濃し

大阪の顔や庁舎にみをつくし

西宮市 秋元てる

寒いから雪の津軽が尚恋し

春一番うずうずし出す時刻表

これ以上小振りは無理な京料理

岡山市 千原理恵

安定の数から軍靴の音がする

愛憎のこころ鏡に見ぬかれる

愛という迷路に傷つくのは女

島根県 菅田かつ子

元気でねただそれだけが嬉しくて

想い出のお山は甘い風が吹く

合格の通知もらった日の自信

豊中市 小畑よし子

招待券渡した友の友が来る

実験用うさぎせっせと餌を食べ

亡妻の親が仲人してくれる

吹田市 栗谷春子

シャンパンや今年いくつの誕生日

遊ばねば損と今頃気がついて

神棚の梅が一輪咲いた朝

京都市 森川春子

手をぬくめぬくめ俳画を習うなり

パートより帰ればすぐに台所

広告で見る山菜の味気なし

愛媛県 石手武

風下で気楽に暮らす平和主義

水っぽい二合を炊いている独り

粗大ゴミなどと男を馬鹿にする

鳥取県 山根八重

失恋を知らない愛を編みはじめ

春なのねかごめかごめの手が温い

水仙の最後の花は画布に咲く

米子市 大田みさと

虹だから許してあげる冬の雨

おふくろのとぼけ上手でいなされる

湖にまりころがって沈まない

大阪市 藤森小雅子

蜜柑むく手に老いらくの詩がある

自分だけの視野で小さな鈴を振る

真相を訊かされている袋帯

大阪市 川原章久

京に春早や名物の花菜飯

玄関にカレーの臭い孫来る日

門前の小僧経は読まずに税対策

新発田市 上鈴木 春枝

目配りを忘れぬ母の静かなり

キッチンで嫁の料理が跳ねている

言い訳が済んで受話器を持ちかえる

伊丹市 山崎 君子

白い皿苺の自信におされてる

裏通り隣にきさくな嫁がくる

小正月商う人の薄化粧

静岡市 片平 静代

ちさい子が可愛く稼ぐコマージュ

這えば立つ孫に付き合う気の疲れ

娘の封書うっかり開けてどなられる

大阪市 山田 妙子

冴えすぎて勘ぐり深い冬木立

入試前新人類も神だのみ

歯ごたえがあり過ぎるほど娘が育ち

大阪市 亀井 円女

そして春薄い紅ひく六十五

亡母の眼が今も背中にある安堵

瞑想がしたくてひるから風呂に入る

和歌山市 田中 輝子

あれもしようこれもしようと春になり

明日へのプラン考えている仕舞い風呂

身を守るシートベルトに疲れ切る

鳥取県 田村 きみ子

耳よりな話ヒロイン二人いる

パツと咲く花は力のありつつけ
自惚れの舌チヨロチヨロと本音吐く

和歌山市 森 茜

道草をしてる鳥に罪はない

かばってるつもり可愛い嘘ひとつ

耐えている肩のかぼそさいとおしむ

鳥取県 乾 隆風

夜桜へとぼけた話老いふたり

おんなはおんな桜は桜化粧せぬ

ひな壇でとぼける顔も持っている

大阪市 井上 白峰

躰糸切って行先考える

旅先でもう決めている次の旅

カタカナの意味が漢字で書いてある

尼崎市 木下 義嗣

新米の売子が包む開店日

向う岸渡れば皆んな飲み仲間

約束を果さず一人旅に出る

尼崎市 尾宮 弘治

赤ちようちん皆大阪の顔で飲み

退院に靴の踵が高すぎる

落選のピラが破れて風に鳴る

尼崎市 野瀬 昌子

何にでも醤油をかける祖母がおり

上天気屋根迄布団干している

星満天身震い一つして入る

豊中市 辻川慶子

街頭では熱弁国会では居眠り
何もかもほったらかしの子供部屋

広島県 藤解静風

初雪が舞うて絵になる御堂筋
白菜の茶漬けがうまい二日酔い
喜びも悲しみもある電話ベル

大阪市 稲本凡子

お茶の間のひそひそ声が眠らせぬ
お別れのドラマが好きな紙テープ
山茶花は満開乱心してみたい

豊中市 一瀬福一

姑になればツンポになりました
酔っている訳を聞かないレモンテイー
かすみ草いつも脇役で満ち足りる

鳥取県 西川和子

手のかかる主人ですよと嬉しそう
本題に入り団扇の手が止まる
正座して見ても議論はかどらぬ

吹田市 西岡豊

反論の出来ずに鍋の底みかく
もつれた糸をほどいてくれるのが老母さ
今日了えて今日が始まる二十四時

兵庫県 森脇和子

町内の恩人が逝く日の弔辞
館長のとんちんかんの唄がうけ
隅っこに居てもラッパは吹きますよ

藤井寺市 福元みのる

ほどほどの甘さもあって老夫婦
夕焼けはいいな童話が雲にのる
一日一善そつと空缶なと拾う

河内長野市 大西文次

どこのどの酒も気分が作る味
台所何してんのと妻が言い
単身赴任背広のままて台所

和歌山県 山田久子

留守ですかパチンコですかそうですか
出直してどうでも飲みに来るつもり
富士山に登って富士が見られない

岡山市 中嶋千恵子

ほろ酔いへ言いたいことが二つ三つ
物想う少女の日あり一ページ
その昔私と祖母の海がある

静岡市 柳沢たま

ひと言の好きが言えない白昼夢
ココロと笑う女で憎めない
初孫の出番待ちするランドセル

広島県 森川抜智

道草を覚えて春の散歩道
風邪の床夫婦仲良く寝て直し
二人してだんまり続く春炬燵

チューリップ開きすぎては醜いよ

開店休業雪だるまでも作ろうか
贈られしものみな温く冬を越す
立春を待っていました万歩計

島根県 森山英子

陸橋の段確かめて雪をふむ
冬の雨音をたてずに窓ぬらす
夢うつつ到着駅でうろたえる

泉南市 坂根流水

ああ接点孤独の愛が身に沁みる
不倫劇矯せば老いを嗤われる
単線の終着駅で仏書読む

佐賀市 古川一徳

耳うちをしてくる妻が嫌いになり
二番目のきざな帽子にそむかれる
血が通う地図をコピーして送る

益田市 里本たかし

十字路で夫の助言を聞いている
父さんも一緒にいたずら他愛なし
うすい髪なでて理髪屋まだ迷い

鳥取県 津村八重子

励ましも愚痴るも妻のテクニク
時計をば五分進めるママが居り
退屈な訳は財布が知っている

岡山県 池田半仙

非常口錆び付いている幸せか

唐津市 浜本ちよ

言い放題言える身分もやはり愚痴
入れ歯とり亡父の顔がそこにある

箕面市 椎江清芳

壁掛けの皿は料理を知らぬ皿
退院と聞いて羽搏く千羽鶴
雪降ろす屋根へ下からご飯です

伊丹市 小熊江美

家一つ守れず都会に出た不孝
波に乗る自信過剰の男の背
野菜まで新種がふえた料理法

竹原市 石原淑子

地球から戦追い出す豆をまく
少しでも和ませたくて花の鉢
誤魔かしのきかぬ自分に泣けてくる

大阪市 吐田純子

加速する五十路へ鉢巻締めなおす
着ぶくれに発車おくれる寒い朝
鉛筆の芯をとがらすつむじ風

西宮市 上嶋ふさ子

地図にない秘湯めぐりをしてみたい
チヨコレート亡夫に供え今も愛
日溜りで赤いほっぺの遊ぶ子ら

静岡市 大村美智恵

好き嫌い知らず明治は生きて来た
心打つ話やっぱり思案する
相槌を打つと味方と信じ切る

地吹雪の矢面に起つ泣きばくろ

弘前市 真喜内 實

いがぐりの頭を庇う春の雪

剪定をした父の居るりんごの樹

ロスアンゼルス市 加藤 明 美

おみくじの替りに買った宝くじ

海外で正月迎える味気なき

姫鏡台いつしかそこに母の顔

和歌山県 森 三枝子

カラオケの調子はずれもまた楽し

喧嘩した夜はむなししい風の音

南部梅林にて

甘酒が美味しい茶店の三分咲き

羽曳野市 吉川 寿 美

持ち替えても軽くはならぬ傘の雪

山茶花がとても多弁に雪の朝

孫入院岐阜にて

伊吹風にゆらぐ小さな生命の火

鳥取県 乾 喜与志

わたしの愚痴ネコ欠伸して聞いている

また一本歯を失って地獄かな

カメの子タワシで皮膚を鍛えている

大阪府 横山 為子

花の種飛んであの娘の庭に咲く

花時計雪が邪魔して廻れない

雪達磨宅急便の旅に出る

気安さがふと癖の出る新年会

大阪市 富岡 温子

窓越しの陽にだまされる冷たい日

悪しきこと聞こえぬ勝手な耳を持ち

今治市 渡 伊津志

ふるさとの山に抱かれて広く寝る(定年退職)

睨まれているエンジンは故障せず

不器用に生きて居ります爪を切る

和泉市 中川 楓

振込みで年玉くれと下宿生

クラス会だんだん幼な顔になり

水墨画しずかな音をもっている

十和田市 阿部 進

飾られた造花が見せる無表情

医者嫌い富山グスリの世話になり

大輪の花のまんまで居てよママ

青森県 荒田 つる

お茶お花たしなむらしい身のこなし

めし炊ける匂いに猫が先ず起きる

嫁と娘のお産がつづく農繁期

青森県 福士 トキ

除雪車の音で青森目がさめる

地吹雪の底からドラの音が聞え

茴香の花一輪の嬉しさよ

岡山県 後安 ふさえ

中流の顔でもてなす今日の客

靴を履く夫の背中に祈る無事

吹雪く夜は炬燵で無口老い二人

軽いのか医師は笑つて老化です

競い合う団地サイズの鯉のぼり

新築の文化にふえる乳母車

寿をさげたホテルの日本晴

暴力団葬儀警官まで並び

観光地白壁だけでは成り立たず

居酒屋で鎧を脱いだ背が軽い

ヤル気持酒の席では愚痴となる

冬いちご初夏の匂で喋らない

水車小屋米搗く音が画布を出る

絵葉書にゆさぶられてる旅心

トイレにも御指名受ける孫の愛

いにしへの春が匂つて青丹よし

たかが階段昇るに齢やなと思ひ

うぬぼれを意識しているハイヒール

一人前掛けて半人前の出来

塵捨ての底から春の芽が覗き

親切が仇花になる寂しい日

吹田市 山田里子

山口県 高崎雀声

福岡市 吉川一郎

豊中市 玉井房子

藤井寺市 高田美代子

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

岡山県 後安江山

ライバルに勝った勝ったゾやつこ風

大学生みんな社長になれますか

馬千騎峠をこえる旗なびく

顔を皆日差に向けて福寿草

月の出を待つて夜半の露天風呂

今佳境立読み妻に背を突かれ

ふり向かれ吾れもふり向く杖と杖

愛犬と同名の児が返事する

法善寺ぜんざい食べて誕生日

禁煙車降りて一ふく生き返る

強風警報我家はそよと風もなし

庶民にはかくす程には無い所得

沈丁花匂いの中に亡母を追う

末吉のみくじ信じる細い肩

いち早く春の音きく旅行好き

万歩計夫婦で一つ付けて出る

嫁に出した娘と嫁を見比べる

十二月八日を背負つて齢をとり

散る日まで心ゆらゆら揺れ止まぬ

岡山県 松本元江

岡山市 野村静雄

兵庫県 奥野テル

熊本市 鶴田謹爾

泉佐野市 大工静子

高松市 竹川憲一

島根県 岩田三和

岡山県 松本元江

岡山市 野村静雄

兵庫県 奥野テル

熊本市 鶴田謹爾

泉佐野市 大工静子

高松市 竹川憲一

岡山県 松本元江

岡山市 野村静雄

兵庫県 奥野テル

熊本市 鶴田謹爾

泉佐野市 大工静子

高松市 竹川憲一

岡山県 松本元江

岡山市 野村静雄

兵庫県 奥野テル

熊本市 鶴田謹爾

泉佐野市 大工静子

高松市 竹川憲一

岡山県 松本元江

岡山市 野村静雄

兵庫県 奥野テル

熊本市 鶴田謹爾

泉佐野市 大工静子

高松市 竹川憲一

岡山県 松本元江

切り終えて膝にしばらく花鉢

岡山県 土居 ひでの

色あせた菊を集めて暮の墓

指切りの指から逃げた罪ひとつ

河内長野市 植村 喜代

雨でよし家族平和が温かし

きげん良い時頼んでおく仕事

八尾市 鷺見 章

うっとこで又飲みいなどクラス会

酔醒めの水それからを寝損ない

静岡市 中川 みつ

心にも暖かそうな二重あご

落葉焚く散歩の人も輪に入る

静岡市 北村 かず

髪染めて祖母が逢いたい友があり

夕焼は明日の旅行を楽しませ

大阪市 榊本 落児

遺言状妻へ感謝の言葉のみ

父親の泪は一人になった時

豊中市 小林 一夫

嘘を書く手紙にも打つ句読点

冷蔵庫開けると怖いものがある

岡山県 伏見 すみれ

退屈な社長クラブを磨く午後

いい縁談進んでるらしい灯が明い

岡山県 福原 悦子

母の忌にセルの着物を懐かしむ
仕事すみ帽子をとれば父の顔

和歌山県 田中 隆積

本物のファッションを見る三宮

元町は少し気取って暖かい

田辺市 染道 佳明

ビール注ぐ女のいくさ始まりぬ

セスナ機に手を振る子等や風の中

藤井寺市 菊地 繁男

バレンタイン中二の息子を観察す

お帳場にデンと構えて揺ぎなし

豊中市 三宅 つえ子

冬日和電話も鳴らず句も出来ず

哀しみは布団の中につつみ込み

岡山県 戸田 種子

うそ一つつけぬ私のお人好し

振り向けば子供のいない核家族

大阪市 工藤 陽子

仏頂面もお世辞に弱い笑顔見せ

見合する娘の顔のよそよそし

樺原市 西本 保夫

心の中スケッチブックを妻が持つ

犬連れて入ると森の樹さわぎ出す

高知市 北川 竹萌

散歩道今朝の会釈が春をくれ

鎖解く顔を伺う散歩犬

唐津市 入江 喜久夫
太宰府の絵馬は受験の願ばかり
お早うと声かけて行く郵便夫

泉佐野市 真崎 浪速子
豪放な笑い天下が揺れ動く
奴風下におろうと肩に風

八戸市 島田 昭治
真面目さが過ぎればみんなに煙たがれ
宝くじ買う場所悪いと妻ふくれ

京都市 山脇 正之
按摩機に手加減頼む方が無理
玄関のドアに背中を押し出され

大阪市 堀口 欣一
春や春大阪城の梅林
大阪の空は晴れたり梅の花

青森県 波 ただお
波静か海も一日休暇とる
吹雪く日に窓から見える北の詩

岡山県 牧野 秀香
川柳塔枕に中国旅が出来
故郷のあの土堤七草あるかしら

静岡市 三浦 つね
物干に蔦の葉が干してある
珍客で一日喋りまだ足りぬ

西宮市 松尾 志保

顔立ちも歩く姿もうり二つ
灯芯の青き炎に物思う

大洲市 西山 えつ美
女性から見てもきれいなというヌード
四日分の葉で風邪も飛んで行き

大阪府 今西 静子
仲人も気づかなかったコンタクト
ソプラノが出てから宴会酔いがさめ

静岡市 久保 きぬ
巢立ちして都会の森に迷い込み
物忘れさがし廻って何だっけ

和歌山県 三宅 保
袴を脱ぐと構図が広がる
コーヒーに渦をつくって妥協する

島根県 小田川 智重子
誕生日同じで親しみわいてくる
葉書一枚すんなり落とせぬポストです

静岡市 安本 孝平
世渡りが下手で法被を裏に着る
平凡に生きる手立てに苦勞する

八尾市 椎尾 公子
親切な兎の如きバスガール
桜茶も歳暮に買うて実家訪う

岡山県 平田 たけよ
イヤリングゆれてうれしい話

白足袋に女のおきてきびしすぎ

和歌山市 青枝 鉄治

はしご酒さつき別れた友が居り

祝米寿どの子もお世話になりました
ゴム長を磨いてくれた今朝の雪

警察は免許切替えだけ訪ね

新潟県 高野 不二

笑い声聞こえるような屋根の下

静岡市 丹羽 定次

海もただ眺めるだけの年になり

米子市 木村 富美子

ほめられて煮物のこつを一つずつ

暖冬に蠅も病舎に住みついて
夕焼けの窓で明日の晴を待つ

佗助の白一輪が客を待つ

岡山県 杉本 伊久栄

円満な家庭の窓の灯は明い

登校の頬っぺ耳切る風が抜け
土守る生きる力の輪をかため

手さぐりで歩む道にも夢があり

寝屋川市 立床 晴風

飲む程にこぼれる酒に絡まれる

大安にサイレン街を走り去り
失敗も神の試練と耐えている

内職へ隣の暇が来てねばり

岸和田市 三輪 通彦

手術した猫は元気かと賀状うれし
初春に孫の生花清すがし

均等法生理休暇は女だけ

呉市 蔵重 成人

夢ばかり追っている間に売れ残り

共通の話題さがして年忘れ
糞度胸だけでは日々も過ぎれず

子のために振る白旗は持っている

NTT株一株だけの家宝とす

岡山県 江口 有一朗

妻の留守今日の余白を埋める酒

和歌山市 北山 凡太

宅急便柿の葉ずしは母の味

老いてから教育テレビ好きになり
一言を腹におさめて円満に

川西市 田中 喜俊
奈良市 米田 恭昌

島根県 園山 世似

斗酒辞せず饅頭も好き老社長
雪中のマラソン小旗振りに出る

鳥取県 鈴木ふみ子

無造作に活けた花籠とは見せず
バラ咲けどハウス畑に蝶がこぬ

久留米市 中垣米之

風見鶏三百四にあぐらかく
へボ将棋手より口がフル回転

出雲市 高橋きよし

見る度に呆けて行く気の同い齡
タレントの結婚話離婚劇

唐津市 野田旭恒

柴折戸を開けて未来の海に出る
傘白寿長生祝も掛るだろう

大阪市 宮下とし

石段もどうやらのぼれた初詣
一人居は餅のカビ取る小正月

唐津市 浜本治幸

子はコーヒー親はお茶にて場を濁す
立聞きは悪いがここを動けない

大阪市 喜多佐津乃

卒業の娘に帯結びりハ―サル
雪の散る庭に一輪梅も舞う

熊本県 立道善太郎

雪化粧明日はつららが見られそ

川柳で自分史だけはつづけたい

今治市 山田宝保

黒いのもネガのあいだは白く見え
すり傷にどうだ矢張り血は赤い

米子市 松尾勝子

吾が生涯ドラマ以上の歴史です
名木の木目が語る苦節の譜

豊中市 額田明吉

可憐にも乱れ咲いてる雪柳
シルバーグレー再びラッシュで通勤す

静岡市 大石たき

江戸育ち老いも変わらず一本気
飲めぬ酒飲んだ振りして聞くうわさ

岡山市 富坂志重

一枚のアルミ貨路傍で孤児になり
母さんの心をつつんだ宅急便

鳥取県 木下芙蓉

寝とぼけか年のせいかと息子いい
厳寒に耐えてマラソンひた走る

静岡市 滝花喜平

汗ばんで来たゲートボール終盤戦
売り切れの札をにらんで通り過ぎ

島根県 船津重信

悪党と呼べばふり向く売上税
民営化鉄道一家の紺のれん

和歌山市 三谷周三
のどからは手が出て来そう金がない
メルヘンの世界あるらし雪の空

大阪市 平井露芳
銭湯も負けじと露天風呂作り

二百円払ってきれいなトイレ借り
ツインベル
兵庫県 円増貞子

もの想う孤独を電話のベルが裂き
ゆるされし試歩ためらいの松葉杖
大阪市 松岡久留美

一串の団子の様な親子仲
旅の宿誰かの唄声身にしみる
奈良市 井上大

親も子も目が吊り上がる三学期
グアム島へ市長とんずら城下町
新宮市 船越正

ハウス物図鑑で旬を確かめる
弱視にも陽差しまぶしく海光る
東大阪市 大平太郎

亡き父母を介護した知恵受ける身に
クラス会互いの特技が花咲かせ
島根県 今川三津江

東風の対話に梅が笑み返えず
テレビから久し平和の銭が飛ぶ

島根県 坂本雪路
凍てつく夜星がきらきら夢を盛る
新人類好きな流行語をうたう

白銀の世界バックに朝の道
雪踏んで新聞配達身も細る
島根県 児玉幸子

収録を見て放映が待ち遠し
湯めぐりで水着のほしい女連れ
大阪市 渡部トキワ

大雪に節分の豆ゆっくり煎る
寒椿ぼたりと音を聞く寒さ
奈良県 山村有佳

巻ずしを丸かぶりして願いつ
大阪府 吹田市 木原絹

◆ジュニアの部
つまみ食い母と私の技くらべ
小さな子昔の私がそこにいる
大阪市 朝田晃世

宿題がたくさんあってつやだなあ
朝おきる父さん会社へ行っている
いわき市 新井朋子
(中二)

いやなことあるといたんでくるおなか
おかあさんのおへやはたべものいっぱいだ
桜井市 まえやまたかのぶ
(小二)

愛染帖

橘高薫風選

米子市 八木千代
 わたくしの葉に火がつくのが怖い
 少しむごい話も朝のコーヒート
 大阪市 小出智子
 身の上はなしほどよく電車空いている
 おばあちゃんを遊んでくれる竜の鳥
 鳥取県 新家完司
 階段をトントントンと春が来た
 杜子春が佇つていそいな春の宵
 鳥取県 土橋 螢
 大道無門無位無冠にて候
 一本の道は確かに村へ行く
 青森市 工藤 甲吉
 立春大吉は名のみ雪の雪地獄
 地吹雪は冬將軍も命懸け
 寝屋川市 堀江光子
 そつのない酌で万年靴持ち
 撫でられたことない犬か後ずさり
 富田林市 藤田 泰子
 嵯峨暮色鳥には鳥の古果あり
 去るものは去る化野に淡い月

堺市 高橋 千万子
 筋がよいと家元私をよく叱り
 スリッパを又はき忘れぬぎと忘れ
 米子市 川上 より子
 天井の高さにもある不安
 充たされた鬼の日記に書き忘れ
 鳥根県 堀江 正朗
 せつかくの味をさらつた長電話
 益を離すと理屈なく眠い
 岡山県 土居 耕花
 寒椿お前も首を洗うとけ
 寒月をもつ一度見て戸を閉める
 松原市 小池 しげお
 負け犬よ覚えておけと言いたかろ
 正論が少数意見となつてきた
 羽曳野市 田中 隆二
 女には見られたくない落椿
 人間が好きで川柳やめられず
 和歌山市 青枝 鉄治
 小瀬だが妻の言うこと筋通る
 胸にバラ着けて土下座のリハーサル
 折る
 千羽鶴最後は白い紙で折る
 春光をのみこみ猫の大欠伸
 茨木市 堀 良江
 退職後婦唱夫随となりけり
 差障りあつて甲乙つけがたい
 名古屋 藤井 高子
 蟹の足つついて嫁の話など
 花ゆらくように熟女の吹きだまり
 唐津市 浜本 義美

茜さす向う逢いたい人がいる
 計の報せ聞いて絶えない生欠伸
 大阪市 山田 妙子
 豆まきをする子も鬼も居なくなり
 お互いに尻にしかれていると言つ
 鳥取県 松下 たつみ
 雑音が突き刺さつてる胃の痛み
 休耕田スキンスリップがほしい土
 米子市 林 荒介
 切り岸かも知れぬ白い紙がある
 鳥取県 土橋 はるお
 いびつな器に触れた女の手が腐る
 寝屋川市 岸 野 あやめ
 死ににゆく舞台なればの銀世界
 今治市 月 原 宵明
 女みな籠を背負うて村貧し
 箕面市 椎江 清芳
 放浪の身は立ち飲み背を晒し
 笠岡市 木山 遠二
 寝たきりの茶碗を猫がじつと見る
 吹田市 後藤 火鳥
 楚々と立つ竹人形の雪景色
 尼崎市 春城 武庫坊
 竜巻きに家出娘がまい戻る
 和歌山市 西山 幸
 花だよりあの世この世の住所録
 平田市 久家 代仕男
 白昼夢無声映画の中の僕
 唐津市 桑原 掬水
 時代劇起承転結華やかに
 唐津市 相葉 あき

豆球も又それなりのショートする

唐津市

仁部 四郎

妻と子と同心円の影に居る

唐津市

原野 常善

節分の鬼がダンスをしておりぬ

唐津市

浜本 治幸

怒鳴るより笑った顔が恐い人

藤井寺市

福元 稔

マル優は廃止マル老が残る

西宮市

奥田 みつ子

身を責めるだけで終ってしまいそう

和歌山市

福本 英子

飽食の国の無芸を見ていよう

豊中市

辻川 慶子

還暦の自画像うすく紅をひく

竹原市

信本 博子

足の小指いつになっても無邪気です

島根県

小砂 白汀

わが胸に銀河かたむく戻ろうか

岡山市

井上 柳五郎

あこがれとかるい不安を未知抱かせ

今治市

渡辺 伊津志

雑草がすぐ伸びて来る借家人

羽曳野市

中村 優

アイラブユーしばし間のあるオルゴール

寝屋川市

江口 度

椿落ちて社長勇退考へる

宝塚市

丸山 よし津

キャンパスは芽吹き彩や合格す

米子市

青戸 田鶴

かけぬけた道がいまではみつからぬ

一パーセント破ったあとに建国祭

大阪市

塩田 新一郎

還暦のそれから朱おくものが好き

島根県

堀江 芳子

地獄へは遠いが門はずく近く

唐津市

入江 喜久夫

節分の鬼春雷に化けて来る

唐津市

野田 旭恒

味噌買うもカード打出の小槌めき

和歌山市

三谷 周三

じつくりと人間見える広い土地

富田市の片岡

智恵子

湯豆腐に妻をつついてもう一本

唐津市

久保 正敏

呵々大笑男の虚勢だと思つ

西宮市

松本 一郎

五十年生きた私の酔い加減

茨木市

井上 森生

ロボットも覚えはじめた裏表

米子市

小西 雄々

犬は犬の高さで見ている行き違い

大阪市

渡部 さと美

私のカセット幸せだけをに入れてます

大阪市

亀井 円女

呼ばれたら笑顔で話す草の花

米子市

金山 夕子

いつものところにおんなじ花が咲く平和

岡山県

松本 元江

クリスタルガラスですますふかし芋

寝屋川市

平松 かすみ

あかい玉子が愛しい冬の一曰

飯山市

斉藤 昌平

暖冬を枕に寒波眠つてる

米子市

政岡 日枝子

泥水に落ちれば泥に桜花

米子市

政岡 日枝子

庭の灯が届くあたりに椿咲く

尼崎市

春城 年代

雨の夜は女トランプ出したがる

唐津市

山口 高明

母だけに話したい事キツンで

新発田市

上鈴木 春枝

人形になって符売る福娘

川西市

野村 静雄

掘り下げる話はやさそう風は春

和歌山市

桜井 千秀

湖が光って辛くなる訣れ

米子市

小村 てい子

嘘ついて自責目に出る人のよさ

東大阪市

大平 太一郎

むなしさに或る日気付いたサインペン

高槻市

河瀬 芳子

終バスに遅れこたます靴の音

奈良市

米田 恭昌

春の絵を掛けると寒が戻りかけ

西条市

片上 明水

円満なはなし何処にも隙がない

岡山県

池田 半仙

約束の下手な女の年賀状

熊本市

立道 善太郎

遅咲きのバラです棘の無い女

和泉市

西岡 洛醉

岡山県 千原 理恵

大阪府 井上 白峰

均等法以来女のひげが伸び

唐津市 田口 虹汀

迷惑をかけずに好きな事をする

和歌山市 田中 隆積

好きやねんだけで大阪語れない

豊中市 田中正坊

連翹がほころび妻の忌がめぐる

箕面市 坪田 紅葉

人情に甘えなくなる冬の風

今治市 矢野 佳雲

私を励ます言葉考える

吹田市 栗谷 春子

貨車通過冬枯れじっくり見ていよう

守口市 結城 君子

独活蕨はるの足おと聞こえぞう

鳥根県 榑原 秀子

黄昏る空薄紫に春告げる

倉吉市 奥谷 弘朗

シベリアで弁証法も教えられ

和泉市 岡井 やすお

合議制鶴の一声にて決まる

岡山県 山本 玉恵

鬼の手に抱かれて山の唄をきく

米子市 寺沢 みどり

コーヒーの主張一気に飲まないで

米子市 木村 富美子

やがて来る終着駅は一人下車

弘前市 波多野 五楽庵

果てしない思索の旅の杖を買う

海南市 三宅 保

俺だけの一番星を見つけた

兵庫県 東浦 砥代

ちよっとした悔いを知ってるくすり指

和歌山県 北山 凡太

宮仕え漸く終えて日は水し

弘前市 相馬 銀波

雪溶けの濁りは母の仕舞風呂

倉敷市 藤井 春日

坐禪組む堂の庭には花と蝶

米子市 光井 玲子

春つらら赤字ランプの点滅よ

兵庫県 北川 とみ子

よい夢を一途に追っている炎

浜田市 佐々木 裕

一呼吸置けばパズルが解けた筈

愛媛県 石手 武

円高に背骨を抜かれ社をたたむ

鳥取県 さえき やえ

人情ののこり話を雪にきく

岡山市 石原 園子

主婦業になれて腹芸かくし芸

川西市 松本 ただし

陽光にステンドグラス花時計

豊中市 上田 登志実

パスポートなく往き来する渡り鳥

茅ヶ崎市 山上 元孝

バラ色の老後はどうぞ海外で

米子市 田中 亜弥

古傷が頭の中に巣を作り

岸和田市 古野 ひで

幻想の世界に浸る雪しんしん

和歌山市 木本文子

四捨五入切られた数字がわめきだす

八戸市 島田 昭治

国会のストで歳費はそのまんま

倉敷市 田辺 炎六

人のする所作が老いにはもの足りぬ

岡山県 川元 いさむ

ねぎらいの言葉聞いてからの揺れ

羽曳野市 吉川 寿美

湯が沸いて夫婦でお茶を啜る午後

豊中市 奥田 満女

無駄使いすなと諭吉がお札から

豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「窓」 選者 森中恵美子

締切 4月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 4月26日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

土居 耕花

す。猫と鱈の句もよく穿って面白い佳句。

行間へジョークも入れて友のふて

佐藤 美代子

こんな温かい友が欲しいです。末尾の「ふで」のひらかなが尚友情を深めています。

元朝は基本通りに歯をみがく

高野 宵草

この人、気急わしい人か多忙の人か、今朝だけはゆっくり縦にも磨いて爽かな気持ちでドッサリ来てます朝刊の文芸の欄まで残さず読みましょう。平素の職場がよく出てます。

妻でない人がからだを拭いてくれ

紀市 郁栄

妻なれば心ゆく迄拭ってくれるのに、遠慮し乍ら恥し乍ら気のゆかぬまま終る。知つてい乍ら郁栄さん何故ですかあんまりですよ。单身赴任鍵よお前も淋しいか

千原 理恵

こういう句の出来る奥さんを持つご主人、決して決して銃後？の心配は要りません。心おきなく赴任して下さい。

合板の天井何も語らない

黒田 緑

寝ころんでみると昔ながら杉桧の変化に富んだ木目の天井板がよく話しかけてくれましたが、方眼紙を並べたような合板は何も語ろうとせぬ。私の古い句に「天井よさよなら僕は退院す」というのがあります。

玄關の花に気付かぬ客と座し

小林 一夫

つかつかと座敷へ通って金の話から切りだ

し、コーヒーもすぐ空けてしまふ。台所へのサインの必要はありません。これ実感句。もらい泣きしたハンカチを洗つてる

土橋 はるお

こんな無駄な事ってありますか、世渡りにはこんな義理故のノルマが多いですね。いつわりの笑顔ばかりを持ち歩く

東浦 砥代

よく出来ています。こんな空虚な世渡りがいつまで続く事か、心身症に気を付けて。心のすみに母の手紙がおいである

門脇 晶子

どんな事が書いてあったか、母の便りというだけではのほのほとしてきます。誰かの句、「ポケットの中にまだある子の便り」ふとこんな句を思い出させる旨い心象句です。初恋の人ほのほのと古希となる

松本 一郎

女性の句かと思いきや男性の句、時に立場を換えて作句してみるのも一興です。どこまでが程ほどのか酔いつぶれ

大川 幸子

「分かつてるよ分かつてるよ」と言い乍ら分からなくなってしまう、天笑さんの句に「腹の虫治まる頃は酔いつぶれか」というのがある。正月に帰れと義姉がひらかなで

山田 保藏

ひらかなが一句の生命になっています。ちよつと具体的ですが体験の句はよく解ります。

許すことばかりになれた坐りだこ

吉川 寿美

母物を作ると必ず入選すると言いますが、こういう句に一番心が惹かれます。幾度か許し許してやっと女に戻った時足の座り胼胝に氣付く、十七文字に縮めた女性の哀史です。かわらけのようなあなたの頭蓋骨

河瀬 芳子

人生を共に歩いて来た配偶者も死ねば白骨に様がわりする現実是非常というほかはありません。かわらけ同然の頭蓋骨への思いを、淡淡とした表現に沈めておられます。

実年になつて尻尾を意識する

藤井 高子

よくぞ此処まで男の生態が判りきる。世の男性よ、心得て肌を許すべからず。

ルンペンが糖尿病を病む平和

鈴木 良征

飽食時代を痛烈に批判したユーモアの句で

尚香のむ

小出智子選

追伸を書き馴れてくるいやらしさ
艶出してリングの唄がもう聞けぬ

和歌山 福本 英子

悪口は聞くまいとする皮下脂肪

大阪 神夏磯道子

春の服買って訪ねるところが出来

和歌山 後藤 正子

オムレツにこだわる朝の雨になり

堺 小西 小雪

正直に言うて老母を悲しませ

富田林 片岡智恵子

影法師私とちがう振りをする

八尾 高杉 千歩

傷ついた翼休める故郷の風

四月馬鹿冥府へ贈る招待状

高槻 河瀬 芳子

過ぎし日をピアスの穴が悔いている

大阪 堀 いくの

夫婦箸捨ててわたしの喪が明ける

冬ごもり疎遠になった人想う

蝶より少し遠出をしてみよう

出雲 小白金房子

旅仕度小さな嘘を子に残す

米子 青戸 田鶴

繫がった沢庵今日も良しとする
荷車が転がるように嫁にゆき

大阪 鍛原 千里
和歌山 寺田 裕美

この娘にはまだ譲れない袋帯

寝屋川 稲葉 冬葉

ご先祖の墓も良いけど家がほし

茨木 吉川 悦子

しなやかな仏の指を想いそめ

大阪 渡部さと美

病床の膝に重たい辞書をのせ

島根 喜島 ノブ

親展のその裏側に闇がある

和歌山 松原 寿子

膝小僧だけが聞いてたお説教

和歌山 湯浅 由梨

自画像へこれから筆を足して行く

米子 石垣 花子

まな板の乾きをおんな許せない

大阪 清水 康恵

諦めてまたあきらめて無事に老い

岡山 土井八重子

遠くなる耳で幸せかも知れず

藤井寺 楠 昭子

招かざる客ぞくぞくと寒気団

吹田 栗谷 春子

空白のままの日記に花だより

島根 松本 文子

初恋は光って消えたシャボン玉

姫路 松浦よし子

筋書を少しはずれて地で生きる

岡山 山本 玉恵

健康が何よりですと言うお金

河内長野 植村 喜代

思わくのみんなはずれる今朝の雪

宝塚 吉田 笑女

数珠の房紫冴える日はさみし

大阪 町田 達子

貫禄をつけてきました向う傷

松原 佐藤 藤子

競争へお隣の子が出来すぎる

新発田 上鈴木春枝

もの言えば夢がすばんでゆきそうで

和歌山 小川百合子

尚香の香にさそわれし十七字

岡山 矢内寿恵子

しんどい日しんどい音で鳴る時計

大阪 西出 楓楽

花時計恋の噂を追いつづけ

今治 月原つくし

お守りのように亡母の櫛を持ち
溜息を消す三月のプログラム
ささやかな抵抗悪女ぶってみる
裏鬼門格挿して春を待つ
焦げつかぬ鍋に女は気を許す
つばつてみても淋しい影法師
草むしる姑の足跡踏んでいる
本当に卵が立った春立つ日
一生は川の流れる如く過ぎ
キッチンに入ると妻は活気づく
母さんがボク大好きとはげまれ
さりげなく支える妻の座が重い
バーバリのコートに裏にある野心
立ち止り風に押されて歩き出す
夕やけにわたしの降りる駅がある
いつ見ても隣のバラが美しい
自販器が春のジョークをふと漏らす
任地へのおやすみコール今日終る
さくらさくら狂いやすきは女かな
即答でさらけ出してる浅はかさ
一徹な背なが少うし瘦せている
きりきり舞いさせる男を待っています
コーヒー館出たらパズルがとけそう
株買うてうらみつらみの株式欄
夕焼けがみごとにきまる終着駅

和歌山 内芝登志代
大阪 津守 柳伸
和歌山 山川 克子
富田林 松本今日子
大阪 上江洸勝子
堺 桜沢あかり
岡山 嘉数兆代賀
大阪 板東 倫子
大阪 杉本智慧子
守口 結城 君子
埼玉 根岸 方子
島根 堀江 芳子
貝塚 池田寿美子
大阪 本間満津子
西宮 林 はつ絵
米子 光井 玲子
米子 林 瑞枝
羽曳野 福田満洲子
藤井寺 赤木 和子
和歌山 桜井 千秀
広島 藤解 小菊
富山 舟渡 杏花
米子 澤田 千春
大阪 稲本 凡子
和歌山 木本 文子

仲間から誘いが来たよ春一番
立ち止まる度に積荷が重くなる
種袋小さい春の音がする
虚栄心あるから女生きられる
栄転にもれ人課を批判する
按摩機に手加減頼む方が無理
牛の瞳の優しさに逢う春の午後
他人事と思つた老いに攻められる
おたやんの鼻に企みなどはない
外孫へ見栄も入った段飾り
素晴しい夕日よ今日をありがとう
岸和田 清野 こう
和歌山 山田 久子
大阪 黒田 真砂
和歌山 西山 幸
唐津 浜本 ちよ
堺 高橋千万子
京都 山脇 タネ
出雲 小玉 満江
高石 浅野 房子
羽曳野 吉川 寿美
寝屋川 太田 藍子
素晴しい夕日よ今日をありがとう

今月は女性らしいやさしい句が目立ちました。何でも
言えるのが川柳なので、思い切つたものを作句し
ていただきたいと感じました。

ゴシツクの「二人いて」の句は、子供を巣立たせた後
の夫婦像を見る思いがします。「繋がつた沢庵」には作
者の人間性がよく表現されて。「荷車が転がる」はおも
しろい擬人法で、どんなに大騒ぎであつたことか。「こ
の娘には」は母としての袋帯の重みをずつしりと感じて
「ご先祖の墓」には生きてゆく子孫の正直な声を聞くこ
とが出来ました。

ハガキに雑詠3句。毎月10日締切

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子

■ 同人アンケート

わたしが川柳を 始めた理由と契機

担当・榎谷 寿馬

それが二十三年の秋で、その句会が後日知ったものの、黒田紅樹、本田藤人、竹田芦穂、浪玲之介、松平溪路朗氏等との出会いでもあり、又そこで川柳を勧められたのが、契機と言えは言えるでしょう。

そして川柳らしきものが解りかけ、興味を持ちはじめた頃、前記の人達で『川柳三十石』が誕生し、書店で『番傘』を入手したり、あたりかまわず、がむしゃらに各句会に出ては末席を汚していたものだ。面白いことに、その頃未だ『川柳雑誌』なるものの存在すら知らずにいたのも事実である。

今は愚かれて

米子市 林 荒介

去る十二月六日に二十二回目の「きやらはく」忘年句会を終ったばかり。ごく、身近い処で仲好しグループから発展した「きやらはく」を横目で見ていたのが、仲間になって四年経った。四年前、八木千代さんが毎日新聞鳥取版柳壇の選者になられた折「川柳を考えて見てくれ」の一言と、家内(瑞枝)の勧めもあり、川柳って何だろう、と初めて考えた。

川柳に魅力を感じた事もなく、まして川柳を作る側になろうとは、一月余り経って、ひ

とつの結論が出て「萬天に萬の屋根ある浄土かな」そして「元地ごちちごちちと影法師と歩く」が生れた。自分を煮詰め、自分を詠めばよいではないか、と。その時その時の自分をはっきり視ることが出来るではなからうかと。爾来、本音で話せる仲間にも出会え、すっかり川柳に愚かれています。一晩泊りで日曜の夜を家で眠れる半径内の大会にはつとめて出掛け、新しい出合いを求めている。

弘前市 田 中 叶

目の前にぶらさがっているオシメ。生まれてまもない長男はよくもこう眠り、家系どおりに肥えた妻はまた間食をしている。

たよりないその児の父は、ねころびながら川柳を考えている。

私が川柳を始めたのは十九歳の時、工藤甲吉選の新聞世相川柳であった。いろいろ甲吉先生にご指導いただいたが、なんとなく始めたせいか飽きがきて二年程で川柳から離れてしまった。

再び川柳を始めたのは本屋で短歌俳句にまじって川柳の本が隅っこにポツンと置かれてあったからである。妙になつかしくあわれで

寝屋川市 里 小路

私には川柳をはじめたのに理由などはない。ただ漠然と隣人に突然誘われるままに、近所で開かれていた当時『番傘東々会』の小集句会へ顔を出したのであるが、それまで一度だつて柳誌すら目を通したことのない者には、全くの未知の世界で、句会なる姿を初めて見せて貰ったものだ。勿論作句どころか発表句を五里霧中で聞いていたのが事実である。

あった。また始めようと思った。長く続けていけそうな気がした。以後、川柳塔へも投句させていただき六年になろうとする。

長男の祐有が泣き始めた。妻よ、私にだっ
こさせても困る。

父さんはゐないよと子が二人ゐる(三太郎)
平明な忘れがたい句が作れたらと思つて。

八尾市 内海 幸生

親の瞞齷る息子の歯の白さ

諺辞典を繙いていて見付けた古川柳である。昭和48年頃のこと。当時大学生だった息子の歯を見て思わずニヤツとしたのを覚えていて。早速本屋へ走って川柳の本を探していたら、近江砂人著「実作川柳入門」を教えられた。

その頃、八尾市公民館の通信講座に川柳の講座があるのを知り、早速申し込んだ。

講師が西尾栗先生であった。先生との初めての出会いである。

以来、今日まで公私共に先生の並々ならぬご薫陶を受けているが、自分の才能の無さに我れながら呆れ、半分匙を投じている。

然し自分の才能を自分で判定するが如きは(良きにつけ、悪しきにつけ)不遜であるし

思いあがりも甚しいと思ひ直し、有るか無いか分からぬ才能を磨く旅に、蝸牛の歩みを進めてみようと思つている。

高知県 小澤 幸泉

川柳が多忙な日々の仲間入り

これが川柳を始めた理由です。そのきっかけを与えて下さったのが、二年間職場を共にした「ふあうすと」の大先輩である榎谷桂緑先生でした。不惑の年齢を過ぎて未だ迷い多く、公私共に多忙の毎日の中で、一面の充実感とともに他面の空しさを身にしみて味わされる日々でした。新約聖書には、イエスをお客さまに迎えて、あれこれと忙しく立ち働いているマルタが、座してイエスの話に耳を傾けているマリアを批判する場面がでてきます。そのマルタに「汝、なお、ひとつを欠く」とやさしく語りかけられた。

多忙な日々からこれからのものがれることはできませんが、そんな中に、川柳をとおしてその生きる証しを見つめ、刻みつけてゆきたい。そのことが、よりよく生きる豊かな深まりを与えられる毎日ではないでしょうか。

この道に生きて明日の虹をかけ

チラシと川柳

八尾市 大路 美幸

「どうして山に登るんだ」と問われ、「そこに山があるからだ」と答えた有名な話がある。川柳もその例で言えば、「そこに川柳があった」と言えるが、それでは身も蓋もない。

わたしは、総合衣料品店を経営している。

チラシを毎月数回入れること、そしてそのチラシへ簡単な挨拶文を入れることにしている。ご承知のように、チラシはタイトルが生命であり、挨拶も毎月数回となると、気のきいたことばにゆきづまる。そこで近所の博学のパン屋さんに、客をひきつける短いことばにつ

近畿文字放送作品募集

題「咲く」 森中恵美子選

3句 締切 4月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

いて聞いたところ、川柳をやつてはと教えられた。

「よみうり川柳」片山雲雀選や、天守閣に投句していた頃、散髪屋の縁で、高杉鬼遊ぎんに「菜の花」へ来ないかと誘われたのが、川柳ヤミツキの最初だった。初期作品三句。

満月がいま山脈を突き放す

美幸

菜の花をわけて汽笛が母を恋い

美幸

日月を除き物価みな上がり

美幸

大阪市 神谷 凡九郎

当時の私は、川柳って何かどころか、興味すら持っていなかった。僅かに頭の片隅に、当時の講談社の大衆雑誌の中に素文の漫画がそえてあったのがそれらしい、トニカク漫才や落語とは違うが面白いものらしい、という位の認識しかなかった。

そんな話が、当時はまだ走っていた市電で見たビラに、大阪市成人講座と頭書し列記された中があった。川柳という文字、今でもそうだが当時も余裕のない私にとって、映画（活動写真？）や奇席より安上り（電車賃だけ）で面白おかしく時間を過せというてくれたいように思もて申込みという本当にふざけた

次第で、戸田古方先生の御指導を受けるようになった天王寺の学校（大江小学校？）。その第一日目、先生の口からノツケに聞いた。川柳は人間陶冶の詩」という言葉、何やむつかしい事、ソナナラやろか、それが出発点だった。もしこの言葉に会わなんだら……と思つてる。

和歌山市 神平 狂虎

川柳との出会い、それは耳からでした。

つまりラジオ川柳です。地元の放送でしたが、力の入った入選句の発表に、思わず引き込まれたものでした。それからというもの、あちこちのラジオ、新聞、柳誌へと投句を続け、自分の名前が句がラジオから流れたり、活字になったり、反対に没になったりする事に一喜一憂した頃でした。そして入選を果たすための見付け川柳に躍起となりました。そんな時、一冊の本が私を変えました。自分の川柳への姿勢を変えました。それは時実新子著「花の結び目」でした。

この一冊の本が、それまでよりずっと川柳の奥へ自分を導いてくれたような気がします。それが又、自分と川柳との新たな関いであつ

たかも知れません。そしてそれが現在も、これから先も続いてゆくことと思います。

豊中市 田中正坊

川柳とは縁のない私に、毎年きまつて一句を添えて送ってくる賀状があった。差出人は故郷の大原町で教師をしている、かつての学友の白岩文衛君で、その後、彼から句集『川柳バス』と「ひまわり日記」が送られてきた。もう十数年も前のことで、日々の仕事に追われて心のゆとりもないまま、パラパラとページをめくって本棚にしまいこんでいた。

昭和五十七年春、彼が定年退職を記念して句集「出会い」を出版することとなり、そんな私に協力を求めてきた。預かった原稿を読みすすむうち、あなたかい人柄がそのままにじみ出た句を通じて、川柳に魅せられてしまった。こうして、彼を師とする私の川柳生活が始まった。まこと「出会い」とは、不思議なものである。その白岩君は、昨年、この世を去った。残された私は、いつまでも「出会い」を大切に、彼が心から愛した川柳を友とするばかりである。

岩田美代追悼吟行句会 / 田形美緒



好天に恵まれた二月十三日、サークル樺楼の人達と豊中の上田登志美さんもお誘いして故美代さんの供養の写経に、京の大覚寺へ行きました。

大沢池の畔、荘厳な雰囲気に包まれた堂内、
文机に正座して墨の香りに心を落ち着ける。
般若心経二百七十八文字に祈りをこめて書く。
事毎に亡き人偲び大覚寺 泰子
嵯峨野路に乱れ咲く花待つ仏 智恵子
門前の食事処『良風』の一室で、ひととき
を句会に移る。美代さんの句集『縞かすり』

から題を戴いた「過去」に、それぞれの過去が窺える佳句が詠まれました。

過去の事にしてはならぬ原爆忌 三四子
熱烈な愛もさめれば過去の人 千代女

過去よりも未来みつめて恋さがす 雅子
嵯峨野の早春を楽しみつつ、化野念仏寺へ足を運ぶ。人影少なく静かな佇まいでした。

嵯峨しくれみんやさしい視線です 美代
故人にはこのような句がありますが、誰と往かれた時の句でしょうか。

奥嵯峨よせめても欲しい静と寂 登志美
化野の椿の紅のただならず 薫風

途中『左へ寂庵』の道しるべに惹かれるように山門を潜りました。運よく庵主尼がおられ、薫風先生を招かれた数人が従って上った。思いがけぬ出逢いでした。寂庵にも写経の日があるので来るように言われました。私の息子が寂聴さんの著書『幸福と不安のカクテル』の装丁をさせて頂いた御縁があり、よく覚えていて下さったのです。

嵯峨野路に仏縁がありサンガ塾 美緒
やがて化野念仏寺へ着く。千灯供養の小さな小さな仏様はすっかり風化して、お顔もはつきり分らない。歲月とは悲しみも風化させるのでしょね。桜の頃には「嵐山へ吟行しようね」と、美代さんとの約束も果せぬまま。もっともっと御一緒したかったのに……
冬木立肩を寄せあう地蔵さま 美子
竹をゆするはあの世の風か念仏寺 今日子

仏縁に触れた一日というのか心満ちる思いの帰り道、車窓には十五夜の淡い満月が昇り、まるで美代さんの笑顔のように思われました。これからも、私達の胸の中には美代さんの句が、美代さんが、生き続けるでしょう。

川柳文学社30周年

記念川柳大会

日時 昭和62年6月28日(日)11時開場
場所 吹田市立千里市民センター

阪急千里線南千里駅下車進行方向に
向って右側すぐ

あいさつ 永田 帆船
講話 磯野いさむ氏
席題 友田茶の子選
宿題 幸福 西田柳安子選
鶴 西尾 栞選
達磨 久保田以兆選
愛 山本 翠公選
希望 山田 良行選
泉 広瀬 反省選
寿 清水 斗升選

会費 二、〇〇〇円(昼食、飲み物、記
念品、発表誌共)

各題2句 締切午後1時



弘生先生の想い出

——私の川柳との出逢い——

吐 田 公 一

川口弘生先生と私との出逢いは、私が阪神百貨店の外商部（昭和五十四年頃）に勤務しておりました時で、先生がご家族の方々とお買物に見えられた折のことです。先生が私の名刺を見られて「寶石教室」の本を書かれた方ですね。私も読んでます」とおっしゃられた事から、宝石好きの先生とのお付き合いが始まったのです。

それから間もなくのことです。先生の医院へ訪問いたしました折、テーブルの上に石ころが置いてあり何気なく見ますと、「俺に似よ俺に似るなと子を思ひく」という句が彫ってありましたので「これは先生の俳句ですか」とお尋ねしたところ「これは川柳で麻生路郎と

いう方の句です」と教えていただき、その句のすばらしさに感動したのが、私の川柳を始めるきっかけとなったのです。

ご承知のように、先生は本当に川柳のお好きな方で時・場所を問わず、また、凡九郎さんの弔吟「出来た句のメモにされてた本だった」とありますように、川柳塔誌や句報にせつせと書き込まれておられたお姿は、多くの方々の印象に残っていることと思います。

先生は後進の指導に当たっても、できるだけ句は直さぬように心掛けておられました。と申しますのは、作句はその人の感性から生れるものであり、表現の乏しさの問題はさることながら、人それぞれに持ち味があるのであって、これを下手に直すことによって技巧だけが先走り、その人の感性が損なわれるだけでなく、その人自身も川柳というものは技巧次第だと勘違いされるようになりほしくないかと心配するからです。また技巧はよし拙くとも、一生懸命にうたい上げた句には「いのち」がある。だからそういう人の句の中に、時としてすばらしく「光る」ものがあるのです。これを大切にしなければ——。私はこの言葉

を肝に銘じております。

句の選についても先生は先生なりのお考えがあったようです。折節選に当っては言葉に迷わされたり、ひっかかりたりしてはいけません。句の中にある真実の姿を見るように務めなければいい選者とはいえないし、選をする

時間が短いだけに、その辺をどう捌くかがその選者の器量となる——うまく表現はできませんが、そのような趣旨のことを耳にいたしました。まだまだ先生には教えていただきたいことがあり残念でなりません。

教えて欲しい知識を持ったまま逝かれ

（公一弔吟）

子煩悩な先生は、三人のお嬢さんのことをいつも気にしておられたようで、

適齢期たった一人にまだ会えず

嫁き遅れもつ釣書も書馴れる

と詠んでおられましたが、その三人のお嬢さんも立派に片づけられ、いいお孫さんもお出来になって、やつとこれからという時に病魔の侵すところとなり、ご遺族の方々をお慰めする言葉もございません。また奥様思ひだつた先生のお姿が作句の上でも多々見られます。雨もよし洗濯好きの妻と出る

半分ずつ食べて夫婦の気が足りる

枚挙すればとどまるところを知らぬ先生の想い出は、長く川柳に励んでおられただけに柳友の方々の脳裏にも深く残されたものがあると思えます。それだけに私のような者が、このような借越筆をとること自体厚顔の至りですが、今一度先生の想い出の一部を確かなものにしたくて述べさせていただきます。

きさらぎの寒さへひとり旅に出る 公一

合 掌

さようなら弘生先生

本間満津子

点滴の正体怖し女神像

苦しみが減ると哀しみ増すベッド
仰臥して長くは書けぬボールペン
病む身には妻の力の有難し

昨年の三月二十七日(奇しくも春巢先生の
月命日)に突然吐血してたおられました。
十カ月余りの闘病空しく、このような句を遺
され還らぬ人となりました。

耳鼻科医の春は鼻血の患者から
善人と見たか赤ちゃんやつと笑み
役立って生きているとの自負があり

二月の祝日の或る夜、子供さんがノドに骨
をたてて何軒かのお医者さんに断られた末、
先生宅へ電話をかけて来られました。お休み
にも拘らず先生は快く診察所へお出で下さ
り手当を受けたと患者のお母さんからお聞き
しました。

絶景に妻を連れざることを悔い
雨もよし洗濯好きの妻と出る

見えぬとこ結ばれている夫婦若

御家庭では大変奥様と仲がよろしくて道で
お会いする時はいつでも奥様と御一緒でした。

此の母が居らずはこの世にないわたし
かかり子の病 長寿をあわてさせ

お父様を早く亡くされ、お齡を召したお母
様の事を本当に大切に思っただけらしいま
した。

花嫁の父の涙は許される

安産の無事がうれしい娘親

三人のお嬢様も、ここ二、三年の間に次々
と御良縁があり、三人のお孫さんもお出来に
なりました。

四分の一は自分に似てる孫

また来てね 二歳の孫が愛らしい

近頃はいいおじいちゃんぶりでした。
二度目の御入院の時お見舞いに何うと「こ
ない瘦せてんねや」と私に腕の皮をつまんで

さわらせたりなさいました。元々瘦身の先生
が益々お瘦せになってゆくのが痛々しく、気
休めの白々しい言葉は出て来ませんでした。

私は弘生先生のお顔を存じません。美男子で
優しいお顔とお聞きしておりましたので、私
の頭の中には映像が出来ていました。いつも

そのお顔とお話をしているのですが、本当のお
顔は見る事が出来ませんでした。去年の十
月半頃、三度目の入院をなさってしばらくし

て「満津子さん心配かけたけどなあ今日廊下
へ出たし、電話もかけられるようになったさ
かい安心して」とお電話がありました。そ
れだけの短い電話でしたので御無理なさった

のではないかと案じておりましたが、私には
それが最後のお言葉になりました。今もその
お声は耳に残っております。終生忘れること

はございません。もう一度、本当にもう一度
お会いしたかったのに残念でなりません。
今でも道を歩いているとひょっこりと先生が
出て来られたり電話のベルが鳴ると「弘生で
す」とお声が聞こえて来そうな気が致しま
す。

城北の空に優しい星一つ 満津子

あちらから電話下さい待ってます

私達を見守って下さい

神夏磯道子

私が同人にならせて頂き住所が分ってから
先生の郵便屋さんが始まりました。すぐ近く
にお住まいがあつたのです。郵便屋さんなど
と言うと失礼なんですけど、本当に毎日のよ
うにポストへあちこちの句報、同人の方々の
動向など書いた手紙を入れて下さるんです。

「今日も入ってる。ありがとうございます。」
思わずひとり言のお礼を言ったものです。
そのうち城北川柳会へ入らせて頂き私だけで

はないのを知りました。遠い所の方々にはお
手紙で、近くの方々には私と同じようにポス
トへ。分けへだてなく四十数人もの会員を愛
して下さいました。誤字も随分直していただ
きました。先生の川柳への情熱はすごく、ま

だ燃えつきてはいないと思います。先生、天
国でも川柳を続けて下さい。そして私達を見

守って下さい。最後に先生の別の一面を見る
句をあげさせて頂きます。

あじさいの今日咲く色も嘘でなし

自分から刺しには来ないバラのとげ

水葦の跡美しく振られたり

小さな旅 私の見つけた仏さま

弘生先生の手紙

前川千賀子

弘生先生と手紙を交わすようになったのは
五十八年十一月の城北川柳会近江八幡吟行で、
一泊された休暇村のフロントの手違いから二
時間もつろうろして、とうとうお会いできず、
そのお詫び状を載せてよりました。以来三年
余の間に百数十通もの、しかも、お忙しいの
に、いつ求められるのか、いつも美しい記念
切手でお便りです。お互い、B型同士とい
う妙な親近感もあって、川柳だけでなく、趣
味、家族のこと、若い頃の思い出など、又、
すっかり気を許した私は、他の人に言えぬ相
談事を持ちかけたりしていました。そのご
返事のいずれも、おやさしく、思慮に満ちて
謙虚な文面に、私の手紙の如何に思慮に欠け
ていたことか、と取り返しのつかぬ反省を、
今、しみじみと感じています。そんなお手紙
の中から弘生先生らしい文を少し拾ってみた
と思います。

〈60・8・21付〉

大阪の阪神百貨店で化石の展覽即売会があ
り、岐阜大垣、金生山の海百合の綺麗な化石
を手に入れましたが、近くの中学校の女の理
科の先生が、両耳管閉塞で通院していますの
で、新学期が始まると、学校へ寄附と言って
持って帰られそう、それ迄外来診察室で他
の患者さんにみせて楽しんでます。(その
後の便りで、化石はやはりその先生に寄贈さ
れたそうです)

〈60・11・10付〉

逃げ出したインコも、尾が短くなれば生き
られるでしょうね。(逃げ出したインコが
雀の群れで、尾も短く野生化して生きている
話について)以前、改良もミカンにとれば受
難の記の句を作って採ってくれなかった経
験があります。出目金とかランチュウ
の金魚をみていると哀しい気がするのです。
嫌です。種なし西瓜やブドウにも抵抗を感じ
ます。が、甘い柿が好きなのは、矢張り人間
の勝手ですね。

〈60・12・25付〉

(お孫さん)ひとり位は男の子ができて、
何か仕事をするかと、男はそんな事を楽しみ
にしています。

〈60・4・8付〉

良転中ですのでご安心を。病氣も、他の病
気の方の生懸命のぞけて、医者には勉強にな
ります。

匿名氏より

金一封拝受いたしました

川柳塔社

〈61・6・16付〉

6月5日の京都市(塔の会)が崇って、そ
の後の、喘息を再発させ再入院、今尚、咳嗽発
作で帰るに帰られぬ状態。本便書いていても
寒気あり。冷汗して自分でもどうしていいか
見えわめつかず、弱っています。

〈61・7・12付〉

拙母が私の死んだ時の事を、妻との話題に
のせたらしく、親不孝だとは思っています。母
親には母親のあせりがあるのでしよう。(中
略)喘息で死ぬ人は殆んどなく、幸い今の処
肺炎ではなく、又、心不全も肺性心も出てま
せんので、生命の心配はなさそうです。しか
し、何で治り難いのか不明です。

〈61・9・9付〉

喘息発作で再入院、静かになった時、死
んだのかと思つたと他病室の患者さんに言われ
た現状。退院できたなら知らせます。

61・9・17付の川柳誌「みどり」に同封さ
れたメモ、当分文字が書けそうにありませ
ん」の文面が最後でした。お会いしたのは、

栗先生の大会と、お見舞に伺つた時のみです

が、沢山の温いお便りに、多くの事を教えて戴きました。もっと生きて欲しかった、そんな月並みな言葉では言い表わせぬ無念さで、今、胸がつまります。

〈弔吟〉

ささん花のなに思ひしや散り急ぎ
 医につくし雲の峰から招かれる
 花だより待たずに何故に急がれし
 あちらから電話下さい待つてます
 あたにかい句に惚ばれるお人柄
 遺影から披露の声が漏れてくる
 またお逢いする約束が反古となり
 二月十四日の月へ旅立たれ
 暖冬というに冷たき君の計よ
 思ひ出を辿れば優しさだけ残り
 川柳談皆の耳深く惜しまれて
 早春の空へ柳星ひとり旅
 悲しみの曲を奏でる二月の雨
 悲しさはやさしさかける二乗なり
 影一つ失い春の月も冬 米子きやらばく
 春風優しい人を連れてゆき
 温顔に在りし日悲しい雲を追う 正朗・芳子
 ひろおさんああ早やすきる早やすきる
 遺影との対話涙の走馬燈
 慈愛満つ師の顔永遠に忘れ得ず
 待ちわびし句会待たずに逝き給う
 出来た句のメモにされてた本だった
 今頃は葵水と句座の雲の峰

合掌

鬼遊 三十四 静子 満津子 倫子 白峰 純子 天笑 柳太 道子 悟郎 達子 夕花 美幸 大輪 柳伸 十郎 久留美 仙吉郎 凡九郎 千寿子

春浅し悲しき煙たち昇る
 面影が嗚呼枳殻亭に未だ残る
 ノーブルな面影しのぶ梅白し
 雲の峰誰かを呼んでいるような
 花咲くを待ち給わずに雲の上
 弘生逝く今日の訃報に泣く同志
 梅が香に逝きませし日を忘れ得ず
 惜しまれて逝くにんがつの風の中
 極楽へ直つすぐ向いて極出る
 また一人路郎の句座に参加する
 訃報きく面影おつて柳誌繰る

射月芳 杜的 みつ子 吸江 いわゑ 喜風 年代 笑女 白溪子 敏 登志代

堺番傘川柳会創立60年
 梶川雄次郎句集「友情」発刊
 記念川柳大会

とき 昭和62年6月21日(日) 12時開場
 ところ 高石市羽衣2-15 ホテル新東洋
 南海本線羽衣駅下車西へ徒歩5分
 電話 0722(61)8181

(昼食はすませてご出席下さい)

講演
 句集鑑賞
 宿題

直木賞作家 灘波 利三氏
 男 亀山 恭太
 浜 古川 一高選
 紋 玉野可川人選
 淑女 田向 秀史選
 森中恵美子選

こみあげる訃報桜を待たずして
 ただ無情二月の星に訴える
 惜しまれて梅の便りも聞かぬまま
 葵水さんとかたい握手が出来たらうか
 城北の星消えこの日雲疾し
 ああ悲し君の笑顔触れぬまま
 雲淡く流れて二月の人を恋う
 もの足りぬ物を残して寒椿
 天国でおはげみ下さい十七字
 教えて欲しい知識を持ったまま逝かれ
 (公一清記)

故郷 公園 榎本 聡夢選
 昔 橋高 薫風選
 奥田 白虎選

事前投句 「友情」 梶川雄次郎選
 ★事前投句及び記念パ一テイ申込み
 締切 5月31日

〈申込先〉 〒590 堺市櫛屋町東1丁2-2

会費 三千元(句集・記念品・発表誌呈)
 記念パ一テイ 四千元(同所にて17時)

主催 堺番傘川柳会

初歩教室

題一地図

阿萬萬的

今月の課題「地図」には世界地図、山の地図、出湯の地図、そして独り歩きのアラストマップ等々と楽しいものです。

炬燵一ぱい揚げた地図と春を待つ
地図揚げ桜前線とのあたり
太 郎
桜前線の夢も咲きはじめ
円 女

(桜前線の地図テーブルには春の花)
ともあれこの句が活字になる頃には桜前線
はどの辺りにいるのかな。

京の地図花に紅葉に古都の寺
正 之
春はよし古都を訪ねる名所地図
慶 子
案内図一度に咲かせた四季の花
志 重

(四季の花一度に咲かせた京の絵図)
若い頃の感傷はとかく独り旅がたくて。
地図にない道で落葉の私語を聞く
実 男

地図にない小路ひとりの散歩道
春 枝
地図にない過疎の村にも春が来る
輝 月

(地図にない道で見つけた猫柳)
地図頼りさびれた寺を一人訪う
倫 子
地図片手気儘にひとり旅の宿
久留美

地図を見る目も肥えて来た一人旅
鉛筆と地図だけ持って旅に出る
房 子

(鉛筆と地図だけ詩人旅が好き)

地図にない道を好んではぐれ鳥
遊 光

落魄の指が海岸線辿る

たかし
温 子

(傷心は地図に頼らぬ北の旅) かと思うと

若いころは食べ歩きなど……楽しいね。

サイコロに委せて歩くグルメ地図
美恵子

地図を手に老舗訪ねる繁華街
ただし

(絵図を手に老舗訪ねる小京都)

案内の地図を頼りに旅に出る
種 子

地図にない穴場の出湯に身を沈め

静 子
昭 治

(地図にない穴場の出湯で秋に逢う)

地図を見て子等この辺に行きたいと
山菜採り子等の地図には子等の夢

さて山登りとなると地図がつきものでして
地図揚げ顔が寄つてハイキング
兼治郎

(三角点揚げた地図に顔を寄せ)

山小屋の地図に明日の夢を描く
静 歩

赤線の地図は明日のぼる山

静 子
遊 峰

(地図に引く赤線明日のぼる道)

過ぎし日や脳裏の地図は信州路

遊 峰
静 歩

(若き日の夢信州の山の地図)

だがこんな地図もあるのですね
集金の地図を見ている牡丹雪
保 夫

満潮に消える釣場の島の地図
繁 夫

獲物追う猟師は猟師の地図を持ち
克 子

中年の浮気にも地図ちゃんとなり
周 三

此の頃は大阪の地図も段々と変つて来て
地下鉄の乗換え地図で首かしげ
明 吉

裏街の地図は変らぬ袋小路地
章 久

合理化に昔の地名が泣いてはる
千日前心の地図に寺二つ
小 鹿

地図にある風呂屋が今はやめている
悦 子

(地図ここの角に風呂屋があった筈)

そして新空港の話が……

泉州の地図を交えるか新空港
勝 美

泉州の地図に国際色が溶け
千鶴子

新空港線だけ引いて地図にのせ
露 芳

新空港経済地図を塗り変える
直 子

変わるのはまだまだありました。

故郷の地図湖底に消える印を押す
方 子

こんなにも増えて変つた里の地図
豊 太

森消えて団地の地図が書いてあり
三 千 子

(森も山も消えて団地の地図となり)

減反に耕地の地図が狭くなる
三 津 江

過疎の地図思えば母の顔となる
志 重

この地図に亡母のお山は見当らず
八 重 子

新地図に二人で通つた道がない
遊 光

(新地図に思い出の道消えていた)

知らぬ間に地図喰い違つ境石
吟 平

都市計画の地図に我家も削られて
兼 治 郎

地価暴騰東京の地図狂い出す
一 郎

道路地図名もなき駅が消えてゆく
小 鹿

(道路地図に消えてたローカル線の駅)
変つて行くのにもこんなのはいやですね。

世界地図ボタン一つで塗り変える
世界地図抜けて核の捨て処
核戦争になれば世界地図変わるだろ
温子

(世界地図どう変える気か核武装)
返還の日待つ島もある日本地図
倫子

国色が日ソで変わる北の島
公一

(地図の色が日ソで違う北の島)
戦争孤児の地図はまだまた破れない
喜与志

地図を買う度に新しい国を知る
やすお

(子の地図を借りれば知らない国があり)
淡い彩に悲劇をかくす世界地図
よし津

そこかしこ硝煙臭う世界地図
白峰

煩わしかろうお互い陸つづき
しんじ

一寸趣向を変えて未来地図や父の地図など
久子

クレヨンが描いた未来地図
久子

(地球全体みどりで描こう未来地図)
豊か過ぎる子等の進路の地図が病む
一郎

亡父の地図真ん中辺が消えている
はるお

父の描いた地図を少し書き替える
喜与志

納得の上描いてる夫婦地図
凡太

自己本位に女は地図を塗り替える
房子

橋のない地図だが私の道一つ
重信

掌の地図に不運な過去をみる
千鶴子

人生は地図にない道拓く途
太郎

(男の地図はやるっきゃないと拓く道)
それも年老いてくるとちと淋しいですね
遊峰

余生路は他人の地図がよく見えて
八重子

地図にない檜山道へ種を蒔く
芳水

(橋山へつづく地図とは淋し過ぎ)
だが希望は捨てないで
喜代子

まだまだと余生楽しむ地図
ふさ子

地図抜け旅をしようよフルムーン
正敏

老夫婦地図を抜けて旅プラン
照子

世界地図抜けて老後考える
サワ子

円高が大きく変えた老いの地図
周三

極楽へ行く地図欲しい金は出す
サワ子

地図にない楽園探す千羽鶴
博子

地図にない島に楽園作る夢
山久

郷愁というものは年と共に募るものらしく
明美

一跨ぎ出来る地図だが遠い故郷
陽子

地図を見て離別の思慕が深くなり
保夫

方言で説明聞いた村の地図
保夫

ではここで若い旅立ちといきますか。
てる

新婚の二人に贈る白い地図
兎世

呼んでいる地図が教えた青い路
千代子

世界地図抜けて大きな夢を持つ
慶子

(世界地図抜けて二人のでかい夢)
ハナムーンの思い出たど世界地図
純子

ドライブの地図を抜ける春の風
純子

世界を股にかけるとこんな匂も生まれて
ふさ子

地球儀を廻せばロスに妊の顔
純子

ロスの世界地図抜けて孫の住むあたり
純子

出張のババを地図で追う坊や
ツヤ子

(出張のババを坊やは地図で追い)
地図出して確かめている旅日記
達子

地図抜け旅の話に花咲かせ
正之

(猥談も少し飛び出す世界地図)
方向音痴には地図があってもなかなか
ただし

方向音痴同士が見てる案内図
照子

振り出しに戻り地図見る迷い道
照子

では最後にもろもろの地図を…
みのある

町内の地図に見つけた僕の家
春枝

引越の通知に地図が添えてあり
みのある

案内の地図は駅から近く見え
みのある

(分譲地の地図は駅から近く見え)
板の地図ご迷惑だと回り道
吟平

(ご迷惑をかけます工事中の地図)
事故あれば附近の地図に詳しくない
東雲

(事故現場附近の地図に強くなり)
地図持って早々動く選挙戦
悦子

地図にない小島に散った戦友徳ふ
金吾

行きもせずガイドブックがたまる棚
東雲

地図にない島が出たり沈んだり
久子

ひまわりが写す地図です荒模様
久子

シルクロード地図にも載らぬとも撮り露
芳

地図面に胸を張ってる昭和基地
鉄治

(南極大陸の地図には平和な国ばかり)
結局地図は見れば見るほど楽しくなるもの
です。私の雑言をお許し下さい。

◇ 題「土」 4月10日締切(6月号発表)
ハガキに5句以内
宛先 「太陽」5月10日締切(7月号発表)
千598 泉佐野市中庄一〇八一—九九
阿萬 萬的

旗

高田博泉選

白旗も赤旗もなしフルムーン 章久
 白旗赤旗ああ人生の綱渡り 雀踊子
 小春日の今日は平和の旗なびく 洛酔
 情報過多先頭の端迷うのみ 軒太楼
 逢いに行く旗は誰にも見せられぬ 玉恵
 二十一世紀へ女性上位の旗上る 一徳
 二泊三日気楽な旗について行く よし津
 海の唄忘れて眠る大漁旗 ちかし
 最後まで旗振る妻がそばにいる 木魚
 旗振っていたのが入院して仕舞い しげお
 ゴム長で働く母にない旗日 兼治郎
 旗持ちにするには線が弱すぎる 弘朗
 私のため生きて残った旗の色 春子
 いずれかに揚げねばならぬ白い旗 たず子
 日の丸を振る海外で旅装解く 朴竜
 旗持ったガイドと走る俄雨 高明
 白と赤旗はやっぱり二つ持つ 優
 日の丸に捧げた足が還らない 悟郎
 晩年を振る旗の色染めて居る あやめ
 反応が知りたい旗を振ってみる 暁明
 寒風切る旗に豊漁の意気が乗り 雅風
 白旗はまだまだ上げぬ亀である 荔

紫の女になびく旗がある 寿恵子
 同居して子供に合わず旗の彩 京子
 お互いの意地を知ってる白い旗 千恵子
 盛り場で地獄の旗を振るおんな だだし
 どの旗を持ってても父に追いつけぬ 佳雲
 多数決で貧者の旗は降ろされる 弧秀
 旗色を読みつつ飛べぬ竹とんぼ 文平
 道連れがほわしくて旗が手放せず たつみ
 悪口を言われて旗が騒い 繁男
 えそ曲り旗を振っても踊らない 進
 廻り椅子からは反旗の見えぬ位置 宵明
 どの風も小さい旗へとなびき出す 久子
 旗振れば日本列島動き出す 夢酔
 あつさりと負けてきれいな旗しまつ 鮫虎狼
 敗けた日の旗玄関でおろす父 妻子
 佳
 均等法妻白旗を折りたたむ 公乃
 日の丸が狂った過去に責められる 一郎
 白旗は揚げぬ男の瘦せた頬 虹汀
 小さくとも胸を張ってる父の旗 さと美
 閉山を知らない旗が揺れている はるお
 人
 風に破れぬ無冠の旗を父は持つ 奈美子
 地
 道拓く旗にはきつい風当り 重人
 天
 なびかない旗にとんぼが来てとまる 三五島
 軸
 白旗を揚げて税務署待っている

顔

山本規不風選

してやったりサンマくすねた猫の顔 明美
 着ぶくれの顔が小さく冬を抜け 洛酔
 能面の裏に女の性を秘め あき
 破顔一笑苦勞は水に流されて 悟郎
 指名犯似顔気になる髯を刺り 朴竜
 母の顔懸命に描く施設の子 正敏
 何くわぬ顔で私を迷わせる 玉恵
 顔色を変えて意気込む第三者 裕
 ヘルメット取れば優しい母の顔 豊
 戎さん無欲な顔が見とうなる 柳影
 膳本へ顔の似ぬわけ見て仕舞い 京子
 本心は語らぬ顔に書いてある よし津
 披露宴のビデオは顔を順に撮る 白溪子
 句碑によい顔をしている石がある はるお
 立つ立たぬ鏡を見てはならぬ顔 四郎
 実印を押す時妻の顔が出る 伊津志
 入れ窗外すと私の顔がずつこける 枯梢
 顔二つ持って女の強く生き ちよ
 お地蔵の顔に不満を溶かされる 鉄治
 この顔でよかつたらと世話が好き 綾珠
 炎えている顔と炎えない顔並び 義美
 良心の痛む笑顔で包む嘘 三枝子

画用紙のママをピカソが褒めるだろ

吉相で手元不如意のまままで老ゆ

顔役の顔になったとそりかえる

盛り場が素顔にかえる朝の街

憂患へ共に過した花の顔

正直で喜怒哀楽が顔に出る

振り向いたとたんに知らん顔をされ

輪の外に自分の顔がもう一つ

何事もなかった顔で顔を出す

顔よりも男に欲しい肝っ玉

知らぬ顔して居酒屋で独り飲む

円満な顔して悪魔と握手する

空財布拾ってくれた顔見知り

平然と政治家の顔になりはった

欲望の顔に冷たい血が流れ

相好をくずして財布堅く締め

ええ顔をして赤ちゃんの知恵がつき

目配せも手真似も効かぬ鈍い顔

平凡な顔で自叙伝書けばよい

仏と夜叉と二つの顔を住まわせる

三百六十五日女の顔色よく変る

愛を得て女の顔が冴えて来る

ものすごい度胸持ってた細面

あの顔に逢えば希望が湧いて来る

優

章久

弘朗

輝月

菜月

虹月

山久

白峰

理恵

サワ子

弧秀

純子

佳雲

可住

三五島

千秀

重人

雄云児

誰々

たず子

雀踊子

文平

さと美

芯

浜本義美選

芯のあるごはんは父が食べてやる

平和の芯折れないように鶴を折る

蝶々のペーゼが欲しい花の芯

明日の夢信じて回る独楽の芯

辛うじて芯が支えていた棟木

ラツキヨむき芯はどこか聞く子供

あきらめの中で火となる胸の芯

愛し子を抱く如花はめしへ抱く

水車 芯快調に水を吐き

芯がない女で皆が寄ってくる

ふりむかぬ芯の強さを寡婦は持つ

直視する世へ鉛筆の芯を研ぐ

鉛筆の芯が明かした悪企み

悪戯な眼に耐えている花の芯

花芯みな曝して花の命閉じ

咲く花の芯喰う虫はしあわせか

土壇場であの温顔が見せた芯

鉛筆の芯にわびてる電算機

芯のないまるでちくわのような人

鉛筆の芯折れたよう計報来る

裏切りが出て芯棒が鳴りはじめ

帯芯がキュツとなじむしめ心地

規不風

繁男

よし津

諷云児

代仕男

万亀子

三枝子

ちよ

紀一

虹江

輝月

大柏

枯梢

優

宵明

螢

本蔭棒

和子

みひの

暁明

明水

みどり

ぬるま湯で育った子供の芯のなき

曲ってる芯が生きてるお家流

帯芯に詰めた女の修羅いくつ

徒長する芯人間のエゴが摘む

鉛筆の芯に本音が聴けそうで

ローソクの芯も故人へしかと燃え

糸巻きの芯に隠した嘘一つ

真っ芯でとらえた球の大逆転

核芯にふれそう話題向きを変え

くずれかける姿勢を正す襟の芯

子の芯は親の過保護が削り取り

芯だけは隠し通した妥協案

芯のある奴が黙って隅で飲み

無欲にはなれぬ花芯の朱に染まる

金鑿を支え帯芯陽の目見ず

一本の芯を通して無位無冠

芯朽ちて明日はわが身の二度童子

職人に金で動かぬ芯がある

寒ボタンの芯を口説いている時雨

芯のある他人のめしにある修業

み仏の道へ女の芯を消す

土の芽のやがては芯となる双葉

地に還る花芯へ神が朱をくれる

鉛筆の芯が怖がる白い紙

明美

千秀

奈美子

多賀子

一郎

兼治郎

智恵子

公一

軒太楼

満津子

木魚

鮫虎狼

素身郎

三五島

道子

正坊

雄々

正敏

たつみ

雀踊子

可住

久仁於

文平

柳界展望

集録・板尾岳人

柳大会

日・4月26日(日)AM10時

所・五條市中央公民館

宿題「よろこび・鏡・国宝」

溺れる・指・絵

席題1題 各2句

締切 12時30分

会費二千元

欠席投句五百円(郵券可)

4月20日締切

投句先〒637五條市須恵1丁目10-2 平井綾女宛

主催 奈良県川柳連盟

担当 五條あかね川柳会

後援 五條市教育委員会

★京都番傘婦人部20周年記念のつどい・婦人部合同句集「桂川」出版

日・5月4日(日)正午

所・京都バストラール

市バス金閣寺道下車

お話 磯野いさむ氏

句集鑑賞 田頭 良子氏

宿題と選者 各題2句

鏡 伊藤 好江選

舞 う 杉森 節子選

逢 う 丹波三千子選

光 る 中野美智子選

葉子(事前投句) 中村 小弓選

髪 森中恵美子選

銀河 安井 久子選

はたち 藪内千代子選

事前投句3月31日着ハガキに2句連句

投句先〒615京都市右京区西院春栄町27京都番傘婦人部(出席者に限る)

主催 京都番傘川柳会

★第18回北日本川柳大会

日・4月19日(日)AM11時

所・富山県社会福祉会館

(北日本新聞社裏)

兼題 妖怪・小枝・神話・ほくろ・ポイント・双子 席題2題

会費二千元

投句料千円(切手可)

投句先〒930-03上市町稗田6

柳瀬あき緒方北日本川柳大会係宛

主催 北日本新聞社

川柳えんぴつ社

★第一回川柳愛吟コンテス

ト誌上全国大会

テーマ「愛」

一次選 岩田 三和選

二次選 藤島 茶六選

柴田 午朗選

川柳創立30周年記念川柳大会

◇小松原爽介句集「草根」発刊記念

日時 昭和62年5月10日(日)10時30分開場

会場 神戸市立福祉センター5階婦人会館

神戸市中央区橋通3丁目4-1(湊川神社西前)国鉄神戸駅、地下鉄高速神戸駅下車北へ徒歩5分

兼題 「切り捨ての文化」 大野 風柳

講演 (各題2句)

語る 中田たつお選

指 前川千津子選

勇氣 天根 夢草選

歳月 片山 巷雨選

蕊 橘高 薫風選

待つ 大森風来子選

草(事前投句) 小松原爽介謝選

◎爽介選の兼題「草」のみハガキで

事前投句。締切4月20日左記へ

〒652神戸市兵庫区大同町2-13-18

ト部方 時の川柳編集室

特別課題(1句) 深日白光子選

酒 欠席投句拝辞 各題締切12時

表彰 知事賞 市長賞ほか(合点12位迄)

会費 一五〇〇円(記念品・昼食・発表誌呈)

懇親宴 三、〇〇〇円(当日受付)

◇当日、61年度時の川柳作家賞並びに第7

回とときせん賞入賞者の表彰を行います。

主催 時の川柳社

森中恵美子選

大木 俊秀選

句数・口数制限なし

会費千円

最優秀句 一万円・優秀句

五千元・優句 二千元・

秀句 千円相当の記念品

投句先 下関 島根県能義

郡広瀬町広瀬 639 広瀬川柳

愛吟事務局

★「小説宝石」川柳雑詠

はがきに一句。川柳と朱書

締切 毎月20日。

投句先・東京都文京区音羽

2-12 光文社「小説宝石」

川柳係。尾藤三柳選

★「大法輪」川柳雑詠はが

きに3句。締切 毎日20日

投句先・東京都渋谷区恵比

寿1-29-25 大法輪閣 編

集部川柳係 尾藤三柳選

▽同人及び誌友消息△

■川口弘生氏(本社常任理

事)は2月14日入院先の病

院で死去された。62歳。告

別式が16日中宮老人憩の家

で営まれ、栗主幹以下多数

参列、お別れをした。

■金泉萬樂氏(番傘川柳本

社参与、番傘折鶴川柳会会

長)は1月15日胃癌のため

死去。87歳 謹悼。

■鳥取県川柳作家協会賞

〈日満賞〉 森山 盛桜

真つ先に冬を知ってる母の

指

〈準賞〉 江原とみお

ふれあいの広場で人の字を

拾う

〈準賞〉 木村まさ子

どん底にまだ明日がある五

指がある。

■川柳高知黒潮賞

肩書を捨てて世間が見えて

くる。 安岡晴一郎

母子手帳ここから母と子の

絆 上鈴木春枝

■田中好啓氏1月12日手術

その後経過よく食事も美味

しく順調の由。

■紀市郁栄氏動脈瘤で兵庫

医大付属病院に入院、快方

に向かつておられる。

▽訂正

2月号90P下段「ムニエル

の鱈がヒットした夕餉」

满洲子

御 礼

このたび「中尾漢介川

柳自選句集」を刊行いた

しましたところ、大方の

ご支援により完売いたし

ました。

茲に、紙面をお借りし

て、厚く御礼申し上げます。

す。

漢介句集刊行会

御 礼

千歩の絵個展お蔭さまで盛会裡に終了いたしました。皆様方の多大のご支援、厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

高杉千歩

—朝日新聞和歌山川柳壇の14年—

「はまゆう」刊行

野村太茂津選による朝日新聞和歌山川柳壇の14年が一冊の本になりました。

定価一、五〇〇円

〈申込先〉 和歌山市美園町2-21

西山

幸

高杉千歩さん(八尾市)より

個展開催記念として

金一封ご寄贈いただきました

川柳塔社

本社 三月句会

三月七日(土) 午後六時

メンズフアッションセンター

霰が登前から雪になる。地下鉄をあがった目の前が会場の入口というのは、こんなときありがたい。

今日のおはなしは板尾岳人氏。売上税、防衛費、日米貿易問題など政治の話をマクラに後半は、氏がマスターをしている洋菓子店の商売から見たお客の生態あれこれ。子どものかっぱらいもあるが、そんな、世間から悪ガキと言われる子の方が友情があり、連帯感が強い、というの考えさせられる。

呼名賞は内芝登志代、志水浩一郎、吉川寿美。今月の月間賞は西山幸さんが獲得。

(進行)柳宏子 (受付)月子
(記録)金太・射月芳・隆二

出席者―笛生・太茂津・栞・柳宏子・芳子
武庫坊・年代・幸・佳秋・白浜子・颯云児・杜の作・二郎・紫香・池田寿美子・重人・春蘭・雀踊子・月子・狸村・薫風・隆二・三男

登志代・萬的・英子・千代三・凡九郎・庸佑
満津子・道子・喜風・白峰・勝美・鬼遊・敏
柳影・頂留子・英王子・東雲・勝晴・楓葉・
柳伸・浩一郎・寿美・正坊・金太・吐来・三
十四・幹斎・ただし・いわゑ・みつ子・はつ
絵・洋敏・和子・章久・文秋・岳人・二三
射月芳・白洋・度・小路・淳一・眉水・久子
藤子・律子・美代子・吸江・規不風・寿子・
冬葉・智子・史好・美房

席題「迫る」

墨作二郎選

ダム建設先祖の土地へ迫り来る
迫られて軽く握手で逃げて来る
メ切が迫る作家は居留守です
じりじりとわたしに迫る発車ベル
迫られて大事なことを聞きもらす
哲学の道で女に迫られる
楢山へ行く日が迫り地図を買う
迫力の欠けた男のループタイ
ジャスマンの匂いにそっと迫られる
締切りが迫って粗い原稿紙
セールスマンの迫る演技がおもしろい
決断を迫られている花時計
締切りが迫る胃散をのんでいる
迫る人ないのて化粧濃くする
迫ったら許す気持ちに通じない
申告日迫り私の偏頭痛
雑兵が迫る水際まで迫る
白い巨塔の男に迫るものがある

萬的
芳子
幸
月子
規不風
颯云児
小路
紫香
千代三
幸
冬葉
一二三
東雲
白浜子
芳子
射月芳
幹斎

ライバルが迫るまでには縄を縛う
神経痛がおきて鴉の絵が迫る
日が迫るあせりに髭を剃ってみる
滅亡の日が来る方舟を作る
毎日が日曜となる日が迫る
絶壁が迫ると男穴を掘る
確定申告へ一枚足らぬ領収書
締切りが迫るときつくり腰になる
それでよいのかと良心へ迫るもの
挑んで見よと山好きへ山迫る
誠実な男おんなに迫られる
迫られて煙草ばかりをふかしてる
珍客が来る市議選が迫ってる
落書き寺の絵馬に受験の日が迫る
溜めといて一度に迫る母の愚痴
余生とはなんにも迫るものがない
サーカスの象は男を迫らせる
窓際の椅子へ迫ってくるはなし
回答を迫ると旗を塗り変える
母さんが悪い悪いと迫られる
街の花屋に私に迫るものがない
老い迫るからコーヒーを飲んで
流し難流して迫るものがある

席題「インテリ」

小西幹斎選

インテリの鍍金がはげる縄のれん
インテリをからかうチョコレートを買おう
インテリ風吹かせて女にはもてぬ
大卒が皆インテリと限らない

武庫坊
和子
寿美
冬葉

インテリとは知らなかったな三枚目
 インテリが日替りランチ食べている
 画廊から出てインテリの貌になる
 インテリぶってちよいちよいボロを出し
 先生もインテリらしい過疎の村
 インテリの妻が時々ヒス起こす
 インテリも頭あがらぬ妻がいる
 インテリはいやな噂もきかされる
 インテリを上手におだて使つてる
 インテリのジョークときどき通じない
 インテリの先生ネクタイ赤が好き
 インテリの自負がヒエロになり切れず
 インテリに似合うダブルの服がある
 東太を出たのに山谷の風が好き
 インテリの中途半端な外来語
 インテリに洒落が通じぬ春の酒
 インテリのB面に持つ赤い旗
 インテリの話がくどい繩のれん
 インテリは思いもよらぬ恐妻家
 インテリの弱味ジョークがわからない
 インテリの内ポケットにある辞表
 インテリと地下足袋仲良く路地を出る
 インテリの本音コップ酒が好き
 インテリが躡く春の雪が降る
 インテリが又もめがねを変えている
 インテリをインテリの子が嫌う
 インテリに見える眼鏡が売っている
 インテリも鴉も冬の虹を見る
 インテリでなかった父の太い眉

文秋 幸 智子 月子 三男 美代子 白峰 雀踊子 登志代 楓 樂 三十四 諷云児 笛生 美代子 紫香 浩一郎 小路 金太 登志代 三男 英子 度 杜的 作一郎 道子 杜的 智子 作一郎 正坊

インテリに牽制球をかかわされる
 たこやきとパチンコ好きなインテリで
 インテリの靴ストレスためている
 つまずいたインテリ神の鈴を振る
 インテリの科目に鷓むくなる
 インテリが優待席で読む漫画
 インテリは素直に言えぬ有難う
 インテリは自分の立場を考える
 インテリのジャンパー少しある気品

兼題「雀」 福本英子選

うっかりと雀に噂盗まれる
 焼き鳥になる身のんびり群れ雀
 言い訳の下手な雀で憎めない
 国鉄の雀改札口を出る
 よう喋る雀寝るまで喧しい
 鳥籠のインコ羨む寒雀
 小雀が居るのよその戸開けないで
 雀白まで艶っぽい噂好き
 高く飛ぶ夢捨てきれぬ雀です
 案山子などちっとも怖くない雀
 飽食の雀が昼寝する天守
 竹藪の地図に雀の宿がない
 雀が一羽仲間はずれの更衣室
 踊り忘れた雀が一羽病んでいる
 雀いつか鴻となる夢を抱く
 横着な雀へ案山子意地になる
 それからは糊を供える雀達
 仲間を裁くことに疲れた雀たち

和子 藤子 度 作一郎 鬼遊 章久 雀踊子 幹 齊 智子 吸江 浩一郎 作一郎 柳宏子 芳子 杜的 年代 三男 寿美子 柳影 白峰 律子 いわゑ 正坊 文秋 耕花 千代

雀の涙ほどのポーナスあてにする
 哲学の道で雀の独り言
 井戸端の雀も株価追っている
 日照権騒ぎは知らぬ雀たち
 天からの使者小雀の笑い声
 舌切りの話を雀ももう知らぬ
 主義のない雀で踊つてばかり居る
 山門に人間嫌いな雀たち
 かしわ屋の軒で雀の子が生まれ

柳影 律子 冬葉 吸江 凡九郎 正坊 岳人 度

川柳わかやま

一二百号記念川柳大会

とき 昭和62年4月5日・11時開場
 ところ 紀の国会館 2F
 兼題 「愛」

- 「星」 小出 智子選
- 「花」 中田たつお選
- 「男」 黒川 紫香選
- 「女」 森中恵美子選
- 「面」 田中 好啓選
- 「橘高」 橘高 薫風選

特別課題 (事前投句・締切済み)
 「これから」 野村太茂津選
 出句締切 一時(各題2句)
 席題 なし・投句拝辞
 主催 川柳わかやま吟社

バイブルを大事に少女の眼がきれいなよりも大事な指輪がひとつあるペン先を変えて大事なことを書く大事な命と思う反戦歌

嫁はんをとて大事にしています

開業医ハイお大事におだいじに

土曜日の夜は大事に空けておく

刑務所で大事にされている不安

一大事ネクタイの無いことを知る

大事な話になって窓を開け

もう逢わぬ人からだをお大事に

大事が起きて男が飯を炊く

人間のこんな大事に春うらら

定年まで夫を大事にしておこう

税務署に大事なお金もぎ取られ

兼題「明日」

橘高薫風選

出発は明日星空が美しい

この道で明日また会いましょう蟻達よ

夕焼けに明日が嬉しく声あげる

あすなるの話は何時もう忘れない

巢立つ子へ明日の天気をきいて寝る

さびだんご明日はもらえるかも知れぬ

明日の白今日の醜さ持ち込めず

難民も明日を信じて生きている

また明日お会いしましょう散歩道

明日もまだ愛を信じているだろう

条件が揃うと明日訣れよう

明日という文字には夢が詰まってる

萬の 重人 幸

雀踊子

美代子

白峰

律子

杏花

市雄

紫香

和子

耕花

満津子

幹斎

敏

兼選

正坊

繁男

重信

荒介

藤子

はつ絵

道子

洋敏

三男

博子

英子

洋敏

平凡な一日明日のパン買いに三月の雪にふたりの明日があるゆつくりと明日を思っている枕無になれば明日の灯りが見えてくる明日という甘えにきょうも生きている恋成れり明日はきつと晴れるだろうあした着くことを信じて出す手紙

熔鉱炉明日のことは分らない

明日ならもつと丸い輪きつと描く

明日のため夕陽静かに落ちて行く

またしても夫の明日に騙されて行く

明日は明日財布に小銭残ってる

うどんつるつる明日のことを考える

野次馬が明日を心配してくれる

明日へつづくテレビドラマの軽い曲

明日のこと想うと急ぎ足になる

病院の窓は明日を待っている

落日の彩に明日があると云う

信念の人に明日はきつとくる

年輪の千年杉にも明日がある

道祖神にも明日があります夕焼ける

どの岸も明日の朝日を待ち詫びる

晩節は汚さず明日も靴磨く

怠け者あしたばかりを考える

サヨナラを明日迄延ばすのは男

魔法瓶明日まで冷めませぬように

満開の桜に明日がこわくなる

明日また同じ時計を持つて出る

藤子 幹斎 智子 狸村 年代 敏 幸

史好

智子

はつ絵

白峰

鬼遊

英子

鬼遊

和子

萬の

楓楽

荒介

寿美

射月芳

春蘭

萬的

浩一郎

芳子

射月芳

佳秋

千代

幸

薫風

奥谷弘朗句碑建立10周年
打吹川柳大会

日時 昭和62年4月29日(祝)

開場午前10時

会場 大山観光会観

電話 0859(52)2121

祝辞

西尾 栗・橘高薫風

お話し

小林 由多香

兼題と選者

絆 出会い 江原とみお選

意気 松下たつみ選

あこがれ 政岡日枝子選

誓い 恒松 町紅選

各題2句 小西 雄々選

席題

2題

各題2句

会費

千円

投句料五百円

投句は4月20日迄

▽投句先 〒682 倉吉市上灘町一二二

打吹川柳会 奥谷弘朗宛

主催 打吹川柳会

老地柳會

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

打吹川柳會

奥谷 弘朗報

舞い降りる鶴に千代田の森の青
孝行な議論親を奪い合い
大黃河自然の力見せつける
童心にもどる夕陽が美しい
白兎根が正直で皮はすげえ
溜息と一緒に落とす屋根の雪
砂時計もてあそんでる長電話
久しぶり話ひろげて茶の点前
青春を奪われたまま征ったまま
雪深く芸術写真との適地
祝言に呼ばれ礼服借りに来る
霜降りて月が運んで来た民話
幸せは金で買えない妻と老い
逆らって見たけどやっぱり年の暮
年一度柏手打てば神笑う
客つなく為の処方を書き続け
激論が一夜でなごむ親子です
職奪うなどとロポット考えぬ
一言が意外に深い溝を掘り

城北川柳會

神夏磯道子報

初春に孫の生花すがすがし
夫の目盗んでキッチンドリンク
行革はうみも芯にも手をつけず
玄関のドアに背中押し出され
暖冬に蓄ふくらむ沈丁花
ローソクの灯に過去の走馬燈
再婚へローソク芯の赤々
未来因へまだ燃える色の落椿
洞門と和尚を偲ぶるの跡
双生児愛を半分ずつもらっ
冠雪の富士見る美保の今日ぬくし
豌豆の時季が早いとふるえてる
年越のお化け目にはつかなんだ
孫が来て出番がふえる老いの席
夜なべする妻の笑顔へすしを買っ
暖冬で痛しかゆしの電気店
御仏も泣いて居ります京の寺
大雪に節分の豆ゆっくり煎る
邪魔になる非常袋にある頼り
地図にない秘湯めぐりをしてみたく
節分に揃った客は七福神
地図めくる楽しい旅のプラン立て
出初式代議士さんも顔を出し
国会がどうであらうと水戸黄門
石頭波にけすられ丸くかまり
福豆の中に一粒わだかまり
年下とばかり思ったアデランス
お隣の時計は五分進んでる
早春の陽さしの芯迄寒椿
受験生持つ親同士天満宮
仲人も気づかなかったコンタクト

寿美礼 夫み 秀夫 正之 正之 純子 山久 達子 トキワ 悟郎 節子 文子 綾珠 温子 登志代 龜男 敏佳 有佳 頼一 ふさ子 晃世 テルミ 午郎 正美 明美 佐津乃 公一 道子 志保 市郎 静子

病む人を思えば春陽の長閑すぎ
野犬にも友達が居た空っ風
帯芯に母の生き方教えられ
ひと串の団子の様な親子です
マラソンに筋書の無いドラマ見る
義理一つ済ませてどっと出た疲れ
本当のピエロを知ってるシャボン玉
嫉糸切つて行先考える
川柳塔まつえ二月例会 恒松 叮紅報
口八丁手八丁女房口を出し
口出しをすれば女房が袖を引く
口出しはよそう傷つく人もいる
口出しのうまさへ口下手貝になり
末席で口出しをして認められ
一言が多い口出し波紋投げ
教育ママ合格すれば天狗さん
合格点つけぬ師匠のきびしい目
水二升呑み新弟子に合格す
合格を届けてくれた春の風
合格で絵馬へお礼に逢いに行く
合格の願いへ神も苦笑する
いいことをきくととき耳が動きだす
耳病んで仏の音が聞こえない
ある時の耳は聞こえぬ振りをする
倅せの聞こえる耳を持つて老い
退屈な耳はマイクのような耳
耳よりな話は深い落とし穴
東風の春の近づき耳にふれ
特ダネを耳にする井戸端会議
耳朶のように粘土が捏ねられる
酒呑んで寝れば耳鳴り注意報

満津子 新一郎 陽子 久留美 倫子 右近 白峰 巡歩 多賀子 鶴丸 芳枝 笑三 長円 静江 舞吉 壯樹 蒼流 与根一 風子 きみえ 弘円 登美也 正朗 三男 美治 静翁 育子 三和

亡母の傘ひらけば温い風が吹く
一本の傘で迎えに行く心算
しつとりと雨の叙情に濡れる傘
国鉄のいの一番に忘れ傘
想い出の道相傘が胸に生き
貧傘は返らぬままに雨の駅
相傘の蛇の目不倫に見えますか
傘寿まで両手の虹は離さない
傘一つ思案は二つ濡れるまま
傘貸した善意がもろく崩される
二日酔い忘れ傘でまた梯子
蕎麦を打つ音へじつくり待たされる

昭二 桂子 静恵 独仙 芳子 代仕男 貢範 文子 寿美子 市雄 友人 鳳人

61年度各地柳壇賞

永田俊子さんに決る

選者 児島与呂志

▽秀句
そろばんに合わぬ律儀が捨てられず

本場の律儀も嘘の律儀もあることはある
と思うが、表の律儀が正しくて裏の律儀が
嘘であるとは限らない。けれどもそろばん
に合わない、帳尻合わせを考えない善人が
居ても不思議ではない。後で帳尻合わせに
悩んでも仕方無い事である。律儀者は本
質に律儀を捨てられない。律儀という言葉
だけでなくそろばん勘定が出来ないのだと
思う。もつともつとそろばんに合わない律

亡父の忌がめぐると揺れる蕎麦の花
年越しの蕎麦一年の締括り
幸せな寝息聞いている蕎麦まくら
食べ方を出雲で習う割子蕎麦
都会住み蕎麦で田舎の情緒知る
民営化立ち食い蕎麦も不安顔
自家産の蕎麦を吸った囲炉裏端
大阪でひょっこり見つけた出雲蕎麦
蕎麦枕それ程頭さえて来ず
裏町の隅で蕎麦屋が生きている
レモン切る今日を明るくするために
中川 滋程報 楓 栗

儀を大事にしましょう。
（佳句十句）

黙認のかたちで敬遠されている
もう一つ下さい最後の石を積む
プライドを捨てぬるま湯につかりすぎ

筋道を通せば煙たい人にされ
遺言を書かねばならぬ事もなし
美人薄命お前丈夫でよかつたなあ
口止めをされて次へも口止めし
失言のテープは容赦なく廻り

損の無い足並だけがよく廻る
菜の花のそこだけ音の無き世界

▽各地柳壇賞の表彰は、4月本社句会で行
います。

悪友が明るい話をしてくれる
本音ではない明るさがそこにある
トンネルを抜けて明るい視野に合い
明るくてそして寂しいピエロの詩
人生を生き抜く明るい妻である
空白のページ明るく塗りつぶす
ああ我が家五黄の寅が二人いる
真先に進軍軍ヲッ吹く勝気
朝市に勝気娘がついて往き
こいさんの勝気損得考えず
過疎守る母に勝気な東ね髪
ある時は野次馬になっている勝気
勝気でも人の情は身に沁みる
泣くなよと勝気な弟兄叱る
賛成でかえす小さな借りがあ
賛成にゆれる心の生返事
賛成も付き合いでする手の低さ
根廻しがきき賛成の手が多い
賛成をしてからへそくり惜しくなる
賛成も痛し痒しの義理があり
賛成をしてから妻に愚痴を言う
賛成の声にはっとする会議場
妬きもちな蛸で好いたら離れない
安住の場所でなかった蛸の壺
磔の形で蛸が干してある
総入歯それから蛸と縁が切れ
サアなんぼとれとれの蛸からませて
蛸の足一本で済むコップ酒
浜風へ蛸が主役という夜市
仲直りさせて我が家がもめている
おたがいに大人笑って仲直り

美幸 芙左女 春蘭 寿美 山久 滋雀 恒明 覚然坊 柳伸 喜風 千梢 三重子 雀踊子 章久 新造 久子 曲ん手 雅風 綾珠 浩一郎 文佑 善信 頂留子 晴風 勝美 千里 信治

仲直りはたをやきもきさせている
仲直り犬の鼻にも陽があたり

駒つなぎ川柳会

里

小路報

度

悪友の温い叱咤に出た元氣
ほつべたを真赤にさせた三輪車

国鉄にあるもの忘れぬ名を叫ぶ
恍惚がひとつ忘れぬ名を叫ぶ

心寒い弁解聞いた萩の道
女三人推理だんだん暗くなる

暗い道月に教わる水たまり
生傷の絶えない程子は元氣

お互いに年賀で元氣を確かめる
行く秋へボタンを一つ掛け忘れ

古傷も時効と共に忘れられ
弁解は眼鏡の奥でうけとめる

暗い顔するから不幸がついて来る
盲点は都会の朝にあった聞

すっぱんも元氣良いいのは残される
痛い程胎児元氣に話しかけ

一年をひと夜で流す忘年会
面白く忘れの喜劇だつてある

弁解の頬は真赤に染めている
弁解を四駒マンガに描いてみる

暗い過去を見せぬ少女の輝く瞳
職安の隅で元氣を持って余し

宅急便あける伊勢えびはね回る
忘れては戦友に済まない蟬時雨

忘れたい時のお酒は嘘ですよ
出来心でしたと弁解憤れてくる

智子

度

甘平

博子

春蘭

規不風

新造

真砂

美代

覚然坊

文秋

凡子

隆二

好子

柳右子

国公

頂留子

美津枝

幸治

東雲

悟郎

曲手

勝美

翠公

克己

邦晴

度

善信

幹齊

千代三

弁解は決してしない爪楊枝
暗がりの花は情を待っている

暗転そして女は一人残される
ライバルに弱味見せたくない元氣

寒中に裸祭りの湯気の上
七十五日噂が消える風の街

妻いつか僕の存在忘れてる
冬の画廊忘れたひとの顔がある

弁解がかなしい嘘になりはじめ
暗い森ここにも巣箱かけておく

まあまあ元氣ばちばちやってます
プロポーズのことは妻は忘れぬ

弁解をしたので首が寒くなる
暗い顔やがて明るくなるポルノ

勝算はないが元氣に朝を出る
久し振り夫忘れて旅に酔う

島に置き去りの犬弁解は可哀そう
人事課へ暗い話をとき放つ

輪廻転生暗い心をとぎ放つ
友が居て暗い話に灯をもらう

川柳ねやがわ

高田

博泉報

柳伸

冬葉

作二郎

月子

信治

美幸

あい

浩一郎

壯之助

育園

花仔

恒明

雀踊子

庸佑

素灯

射月芳

麗水

絹子

鴨野

勇太

一芳

君子

春子

速水

藍子

明代

良三

波留吉

一途

勝一

あやめ

かすみ

光子

静江

まさお

頂留子

佳風

晴風

てまり

冬葉

博泉

亜成

吉之助

三郎

英子

満足はほしたシーツの白さから
ひよつとことおかめで綴る愛の詩

このチャンス代打の腕の見せどころ
親方の腕前超えても弟子は弟子

満足に馴れて明日を見失ない
四季すべてに満足そうな月仰ぐ

目覚めても用事がないと起きてこそ
春らしい目覚め素直になれそう

八十で恋に目覚めるひともある
腕前が上がった頃にブーム去り

まあまあ売上げですとゆるむ頼
満足をするまで旗は振りません

若すぎる妻で満足させかねる
腕前が決め手となって婚養子

満足がいっぱい浮いて露天風呂
愛の糸切れて目覚めた曲り角

白旗を揚げて満足しておこう
腕前が知れて多忙な役が来る

一族の真ん中満足そうに父
ある自尊心を風が吹き抜ける

腕前をほめる苦心談をする
目覚めたらそんな約束してたかな

目覚めの悪い朝を男は誰ももつ
目覚めが苛酷に響く二日酔

満足に箸使えぬがピアノ弾き
母性の目覚め乳房が張ってくる

板前の包丁さばきを食いにゆく
目覚めの悪い相手に勝つてくる

満足な事なにもなし樹にのぼる
目覚めても目覚し時計とめるだけ

満足な敬語はむりな河内弁

満足がほしくて神さままさま
木の香り目覚め爽やかマイホーム
腕前をあげる目的が近くなる
さわやかな目覚め仏間に灯を点す
目覚めたのでびっくりにする三ヶ日
昏が来たのでびっくりにした目覚め
日蔭にも満足しきつた花が咲く
目覚めると熱いコーヒが欲しくなる

川柳壁

河内

月子報

N T T 株に後光がさしている
春雷が光るやっぱり逢いに行く
一年生太陽の下皆光り
孤児がなし顔に刻む母の像
奥さんが強くても出来ぬ鬼
素晴らしい話を鬼が聞いていた
振り向けば鬼がうちらに立っている
ありがとう友の情けに湧く勇氣
街路樹を抜けた光が縞になり
時差呆けの顔に刻んである旅愁
ありがとう聞く嬉しさと淋しさと
病む母の目から聞こえるありがとう
献血をしたためしにうまいこと
血を分けた仲だのままに目をつむる
採用の決め手になつた目の光
臨終の姑がひとことありがとう
献血の出来る幸せよろこぼう
絵ごころにほうれん草が光つてる
反抗は血筋ですよとにが笑い
隙間から光が漏れて母が居る
音のない時を刻んでいる夫婦
血液はO型一人も敵持たぬ

磯山 敬度 女 亜鈍 小宏 柳宏子 紫香 幸子 外吉 紀美女 素灯 天笑 草痴 美代子 東雲 寿美子 あかり 楓 かりん 千万子 五月 月子 南天 半銭 雪梢 小雪 美房 眉水

輸血受け人の情けに手を合わす
愛つめた手紙をいつもありがとう
血糖を気にする割によく食べる
流人の血沁みてる佐渡は霧の中
ありがとう言うたら妻がつけあがる
弁解はしない確かな多七光
血のじむ思ひ出多き作業服
よその子が光つて見える參觀日
焼酎の光まぶしい回復期
贅沢を買って光らず労が増え
血脈を辿ると菊の香りする
待ち呆け時計の針はいとわな
バイテクに花の血筋も狂わされ
母にまだ一度も言わぬありがとう
稲光 愛のモールズだよきつと
鬼の面仏に見えるまで見つめ
ありがとう言える政治にしてほしい
落ち込めば落ち込む程に血が騒ぎ
木の間もる光に神を信じきる
高槻川柳卯の花 辻 白溪子報

芳水 博子 新造 妻子 耕花 山久 道女 てるよ 市雄 雅風 金三郎 曲ん手 萬的 千代三 頂留子 凡九郎 金太 真柳 柳影 白李 森生 山久 曲ん手 散歩 房云児 諷云児 越子 信子 俊作

応対が済んで見合いと知らされる
応対に手こずりベテラン呼んで来る
応対は妻が一手に引き受ける
応対に出る口紅をうすくさす
下心ある応対へ酒が出る
丁寧な応対する九官鳥
丁寧な応対も知らず入社式
応対のイロハも流行つてるふぐの店
ぶつきらばうだが流行つてるふぐの店
応対に出た少年の赤い頬
支店長さんも出て来て借りる金
兔二匹似た者夫婦は争わぬ
田舎から戻りつくづく兎小屋
噂好き兎の耳の長い訳
餅搗きの甚平が可愛い玉兎

佳句地10選

中原諷人選

人間に生まれ笑いがとまらない
狭き門だからくぐつてみたくなる
足跡はふたりで明日の灯をさがす
それから聞きたい膝が前に出る
ちいさめの幸せでよい鐘を撞く
歳の暮 男は死んだふりを
いつからのことにしようかさて余生
優しさに討たれて酒を酌ぎこぼす
だいどこでうたつてるのは青い鳥
順がくるまで補助椅子で待っている

勢鬼 よ志子 彰一 百合子 白溪子 佐秋 佳代子 景子 紫香 藻介 和友 さと美 武庫坊 花代子

王様に兎の耳がうらやまし
兎なら僕でも描けた年賀状
満月に里ごころつく白兎

いやな噂に両耳折っているうさぎ
それからの兎寝不足しています
少し耳が汚れ兎も寒に入ります

山眠るされどあはれる山もあり
参観日子が見直した母の紅
初釜に青春覗く老いの華

一寸だけ覗いてみたい愛の淵
冬火花それから長い闇に入る
水際立つた応対に敵帰る

逢えなくて足袋も心も白いまま
大正の生まれ損じたままで古い
トップにはならなくてよい春の靴

生きていることが下手な財布を持っている
山に木を川に水ある絵を遺す

Y・F・C柳柳会

丸山よし津報

二階の人それからこりともさせぬ
二階から下りると他人になる二人
人情に甘えなくなる冬の風

雲行きを察して二階へ消えて行く
貝割れ菜花の咲く日は夢になり
クラス会別れた後は主婦の顔

ビルが建ち陽の入りは主二階です
東大阪川柳同好会 斉藤三十四報

子はなれがすむと危険なおんな坂
盛装の女が噂連れてくる
盛装にあなたの嘘が盛つてある
盛装の正座へスピーチ長すぎる
盛装の女が浴びている視線

杜的 とおる 年代 八重野 柳影 頂留子 雀踊子 晋吾 金太

盛装のローンが払えなくなつて
盛装の妻よあんまり翔ばないで
盛装へちよつと気になる河内弁

たまにしたい盛装やはいり落着きまじ
盛装を着たい脱ぎたい二十歳の娘
美しく装うた妻にある野心

途中からあきらめさされた急な坂
切株の訴状を読んでいる木樫
年輪が若手とやかく言わさない

坂越した父母の鏡の厳しすぎ
口笛も快晴という板の道
目の前に二階が見える坂の町

無医村に吹雪が強く強くなる
寒あけば春になればと見舞い客
敵となり味方にもなる祝い酒

寒あける明日の構図はでかく描く
均等法タンスの位置をかえさせる
亡き母の臭いの残る古タンス

生きざまを値引きしてから軽い風
イヤリング全て値引きのコレクション
青春の秘密箆の底にふせ

強引に値引かせ顔を覚えられ
とちつてはならぬ祝詞をまちがえる
私も神も宿る箆のナフタリン

三月になればと猫に言い聞かす
値引きしてもらつて先祖の墓を買う
はったりも利かなくなつた洋箆

桐箆女の業も詰めこまれ

倉吉川柳会

渡辺

苦句報

恒明 曲ん手 勝美 美九郎 章久 喜一郎 綾珠 度 春蘭 喜風 愛論 覺然坊 湖風

値引きせぬ店でノレンを守り抜く
当選おめでとつと万歳五喝
戦争ごっこ寒い話を聞かされる

車買つて前引き交渉妻がする
値引きの値に掛け値しかりつけてある
米びつを開けると寒い風にあう

箆の奥で息を殺している喪服
恥じらいの青春を隠した桐箆
祝盃へ一番酔つてなるダルマの眼

値引き幅崩してならぬ線がある
総入れ歯入れた祝いに牛蒡食う
ふたありが寝ると箆が邪魔になる

凍てるよりましでしばらく繭の中
火事現場箆に雪が降っている
古箆出征兵士の旗がある

知事さんが祝つてくれるまで生きる
値引きされてるのが気に入らぬ赤いバラ
カルテ見てわからぬ波長心電図

傘寿だといふのに習い事初め
権力で編んだ梯子にないポルト
慰め要らぬ酒席の泣き上戸

修業には耐えねばならぬ道がある
宮司の子合格天神ホツとする
振り廻す女の業へ心疲れ

スニーカー今日を終りの朝に履く
沈む箸浮く箸もあり大家族
差別なく昇る朝陽に恥じないか

花道はなかつた過疎の雪だるま
今日の苦勞今日受けてやる朝の靴

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

かつみ 観洋 みさ子 春ゆり子 はお 完司 瑞枝 御前 荒介 明 蝋 千代 石花菜 碧水 独歩 苦句 旭恒 虹汀 高四郎 高明 掬水 あき 朴竜 多駄子 正敏 凡九郎 悦郎 シマ子

菜の花句会(前月分) 高杉

鬼遊報

信心の指に一・五カラット

朝飯も食わずに何が出来ますか

雪見酒無駄な話はせぬが良い

大病も癒え信心も忘れられ

数は力でもまた悪法を一つ生む

月まいりして安心の灯をもらう

出稼ぎの父思ふこと雪のこと

お隣の目覚ましなかなか鳴りやまぬ

偶然のシャッター手柄になる紙面

とけるから眠っておれぬ雪うさぎ

祝い膳追加うれしい日の仲間

無欲だと言ふ信心に嘘を見る

男と別れて一層強い雪が降る

皿の数かぞえて食べる味気なき

金持も貧乏人にも朝が来る

初恋は淡雪に似てほろにがし

ひいふつみいよ明治が近くて数えて

甘酒を飲む信心のひと休み

頼りない味方も数に入れてある

菜の花句会

高杉

気がつけば向うの列に妻がいる

火の匂い鳩は方向見失う

万博から行列をずる癖が付き

三面鏡方角変えて見るけれど

荒縄でしぼる或る日のわだかまり

チョコよりもいいものあなたにはあける

近道をして方角を見失う

ライバルに絶対勝ちたいチョコレート

ブランコの縄を信じてゆれている

こんな時方角なんて言うとれぬ

寝にかえる巣箱に揃えた男下駄

章

柳宏子

糸葉

喜風

信治

柳伸

春蘭

度

頂留子

美幸

浩一郎

恒明

弥生

勝美

蕉露

射月芳

冬葉

鬼遊

雀踊子

鬼遊報

シマ子

英一

壮之助

冬葉

悦郎

律子

雀踊子

糸葉

鬼遊

凡九郎

弥生

板チョコを友は昔の顔で割る

民宿に心くばりの縄梯子

如月はうその上手なチョコレート

菓作りに余念ないのがうとまれる

松茸山繩一本に気をとがめ

チョコレートおしん一人を手なづける

菓ごもりの島へあしたの陽があたる

母さんが誰かに贈るチョコレート

訳知らぬまま野次馬の列にいろ

菓に帰る前にマッチは捨てて来る

整列が一つおぼえのフラミンゴ

方角がどうあろうとも富士の山

肩書がとれて気楽に並ぶ列

無人駅がつづく日暮の縄電車

川柳化粧檯

植村客遊子報

コーヒーに誘い下心聞きたがり

無口でも言うて下さい好きですと

足を組む女が増えた終電車

若草に恋が腹ばう温かさ

郵便受けに今日も何かを期待する

梅林を妻と歩けば春匂う

生け作り頭に鯛の誇り見る

獅子舞いの頭に息の合った芸

セールスへ思案などない棒グラフ

思案して思案して赤いシャツを買う

年賀状待てないひとと添えておく

祝い膳揃い元氣な新春迎え

本厄の背に一はいの神だのみ

娘も孫も来て盛り上がる歌留多取り

屠蘇祝う来年の幸思ふまい

正論の屁理屈はっかり文句つけ

白兎

喜風

度

柳伸

勝美

信治

美幸

章

射月芳

糸葉

頂留子

みつる

柳宏子

栗

岳詩

大鷹

秋月

越山

葉香

紅月

礎石

白李

実男

悲子

みつこ

サワ子

遊峰

遊光

輝月

とし

添書きの賀状うれしい事を言う

初詣で鈴を大きく振り鳴らす

景品のテレホンカード恋の声

スナックの又来てくれと年賀状

サークル檯檯

松本今日子報

草木染め色の神祕を追い求め

これからは甘え上手に余生なり

老後などに吹く風と西東

すれ違ひ夫婦気づかぬすきま風

つっぱりも甘えて泣きたい事もあろう

お陽様に甘えてしまふ雪だるま

紅色遠慮してと皺が言う

冬ばらの白にさびしい風がよる

春の風吹いてかえらぬ人がいる

大原川柳社

土居

思い出を綴り合わすと亡母がいる

書き初めへ母も一緒に筆はこぶ

味噌汁がほしいと思つ三ヶ日

初めてのパート身に沁む四十路坂

振りだしに戻り今年の計を練る

紅葉敷く瑠璃寺に来て師を徳ぶ

還暦の夫と交す祝い酒

読んですぐ忘れて読んで又忘れ

人並に歩調合わせて老いの春

幸せは家族が揃う初詣

老松に寒梅そえて新春の床

新しい日記に希望書いておく

山盛りにスケジュール立て新春暦

この僕もやっぱり父の癖を持つ

人の世はどうあれ卯年の暮があき

みね子

永楽

和子

客遊子

智恵子

美緒

美子

千代女

泰子

三四子

今日子

薫風

あすなろ

正子

ひでの

みさえ

睦子

こふゆ

敏子

幸子

美代子

正己

巴子

たけよ

悦子

辰江

理恵

元江

ふつくらと梅の蕾が春を抱く
ぬくもりを座席に置いて発車ベル
初春の笑い袋を孫が開け
だまされてやろうか孫は兎年
真空中でせめて居りたい三ヶ日
宅抜いくにの正月連れてくる
最高の幸せ孫と書き初める
お弁当にお節を詰めて初仕事
新し一年だとしてのメのうち
思案して祝儀袋に入れ直す
坊さんに水子水子と威かさ
三幸川柳教室 桜井 千秀報

朝代 智泉 玉恵 宮子 やよい きしこ みずえ 直二 妻子 いさむ 耕花 千秀報 玉枝 忠昭 百合子 和子 智水庵 みね 敬子 保子 育子 文子 三千子 正好 かなめ 邦郎 計四郎 鉄治 千秀 愛子 芳三

渦潮の中に自分の影を見る
渦が巻く世相にいつか背を向ける
渦を巻く不信へ妥協迫られる
大橋を見上げて渦が目を廻し
渦潮に吸い込まれそう身を廻し
渦の中どちら向いても敵がいらす
信じ切ると海の蒼さに消える渦
隠川柳 稲田 豊作報

無袖を振れとはストも無理を言う
手土産を出したが無心言いきり
百八つ取りたくもない年をとり
無理すなと努力無理をさせる子よ
歳の市よそ見はすまい空財布
啫家が酒は無いのになれる石もある
南無阿弥陀仏ほとけにまける石もある
ああ無情列車を飛ばす狂い風
ほどほどの無欲で通すさわやかさ
無事なれと煙丸出しの孫祈る
人生は罪無き日々を送りたし
老いぬれば最早や余生も長くなし
見栄をはり車に家に無理をする
柳わかやま 堀端 三男報

可笑 高夫 靖子 文夫 美代子 重次 桂香 豊作報 文古 和江 柳香 承平 たみ 三香 八恵子 一眺 行江 健太郎 進一 裕美 萬的 寿子 幸子 登志代 信子 武雄 緑良

叱られる時の時計は進まない
弱音吐く貴方を叱る鬨闘記
放置自転車叱られている投書欄
叱られて愛の絆を受けとめる
まっとうに生きろと叱る鬼である
叱られても僕はやっぱり遊びたい
尊大な男が叱る尊大に
買物に惚れた女と行かぬよう
自画像を飾る勲章買っている
買物と言えぬものにはまだ逢えぬ
バーゲンでもう来年の冬を買っ
お隣と出合い鯛を買いきり
釣り上げた魚に餌を買ってくる
紀の川を新空港が買いに来る
買物ごっこでも売れ残っている団子
買物はあなた任せの共稼ぎ
買物籠と一緒に海を見に行こう
豊かさに慣れて自分を見通せぬ
見通しがついて夫の独楽になる
見通した嘘を黙って母は聞き
見通しへ鶴の祈りもかりている
見通しがついたところでヨイドン
男児出生から見通しが弾み出す
冷え切った鉄の見通し待つ家族
見通しの暗さに耐えている背骨
見通しがきかぬ遺言状を書く
見通しのついた兎でひと眠り
見通しが良くて絵筆が弾み出す
他人には見通しが利く占い師
お見通しらしい柔和な恩師の瞳
川柳高知 川竹 松風報

歩実幸 輝子 天彦 光代 繁忠 太茂津 正博 雀踊子 凡九郎 精子 忠雄 克子 道夫 照子 狂虎 信秋 紀美女 久子 凡太 凡光子 紀久子 正子 千寿子 桂香 愛子 佳明 三男

カラオケは要らぬ男の唄がある
 愛想の良い奥さんでいる仮面
 東京の電話へ変えるアクセント
 ビヤガーデン拍手であるおの一気飲み
 誕生日妻の熱燗飲む美味さ
 円高で夢が破れた青写真
 箸拳にまた負けたいる飲んでる
 助け舟思わぬ味方が隅に居り
 絶対の味方に何時も母が居る
 旗色を見てから味方増えてくる
 薬にも毒にもならぬのが味方
 渡り鳥曆を知ってるように来る
 相性がいいと曆に教えられ
 二三杯ひっかけたらしい夫の鼻
 早寝して明日に備えた卵酒

むらくも川柳会2月旬会 藤井明朗報
 愛の手に应えて咲いた花の艶
 遊園地うれし春の声がとぶ
 愛という字がふくらんでいる青春
 愛の糸はくして巻いて夫婦老い
 うれしくてそそと初孫抱きにゆく
 母の愛命かけても子に注ぐ
 菜園へ愛の一途で通うみち
 祝盃へ母の笑顔のこぼれ愛もう
 愛ゆえに耐えねばならぬ愛もある
 夫婦愛子供素直に丸く住む
 教養も地位も名誉も捨てた愛
 うれしい日めでためてたの祝歌
 年一度ひな様うれしうご対面
 愛憎を踏み越え世渡り古稀の坂
 冗談にませて愛情ついでみる

孜郎 春枝 かず子 幸泉 竹萌 菊野 松風 嘉代 千鳥 草風 功 佳風 稔夫 節坊 朱坊
 富子 吉野 明朗 一昌之 小二裕次郎 小四由博 小三晶美 小三晴美 小六純平 小三視幸 中一亜貴子 中三恵子 高二紀 善居 房子 静火 静水 シゲヨ 笑俳 山久 臣子 博子 康子 のぼら 一路 淑子 笑子 貞子 蘭幸

母の愛こぼれ落ちそな宅急便
 春風がうれしい話連れて来る
 人間の幸せ愛するひとがいる
 川柳たけはら 森井 善居報

正月のおもちをついてもあかるいよ
 プラモテルつくるとなるとむつきしい
 お年玉母ちゃんとお金しい
 ちよ金箱雑しのふろくで作ります
 僕のタコ上がれ天まで上がり
 お正月とても大変おあちやん
 行かれないところをテレビ見せてくれ
 体操の模範演技にただ見とれ
 人間関係すこし学んでバイト済む
 グラス手に感慨深きはたちの瞳
 人間つて弱気でしたらもうしまい
 飽食になれて七草粥うまし
 気弱にはなれぬ年毎増す賀状
 光よ光もどれと祈る目薬よ
 思いきりシヤネルを振つてもう泣かぬ
 星古い信じてみたい時もある
 母という重みかさねる歳ひとつ
 涙したきのうを入れる白封筒
 神妙に拍手を打つ受験の子
 ぶり返るばかり貧しいボールペン
 わだかまり取れないのに酒が攻めてくる
 もう欲しくないのに酒が攻めてくる
 あすなろのまんま年輪また一つ
 子供等のねばりに負けたショッピンダ
 六十路の夫にきびしい北の海
 さて二月机の上の広さかな

死ぬまでに書き替えますか遺言書
 子が笑うのんきな私を子が笑う
 小吉でいいです拍手しかと打つ
 新春の街みな美しきひとばかり
 湯豆腐も京で食べれば京の味
 やがて地に還る余生に種をまく
 完全看護地女神のまよした方ばかり
 確実に効いてきまよした副作用
 Uターンに縁無い二人の差し向い
 カズノコも少うしふたりきりの酒
 美智子妃に似てるといわれ悪くなし
 働いているからこそ金を掛け
 青い鳥春の扉を開けにくる
 静岡市川柳同好会 永倉 僕川報
 堅物が居て相談が纏まらず
 重宝をする時ばかり呼び出され
 寄り添うて越えて来ましたが八十路坂
 世渡りが下手で法被を裏に着る
 喫煙はこれが最後と今日も吸い
 差別なく育てる乳房二つ持つ
 古稀を越えまだ恥じらいがある女
 ゆずられてハツと気付いた老いの坂
 巣立ちして都会の森に迷い込み
 エイズ禍を何処の話と聞く甘き
 江戸育ち老いも変らず一本気
 幼子が可愛く様ごコマージュナル
 心打つ話やっぱり思案する
 明日知らぬ身はゴールまで薬吞み
 歳明けの手締め不況の風を消す
 立話無謀な爆音声を消す
 たわいない怒りへ短気首締める

清水 清子 比呂子 こうじ 房枝 静江 静佳 栄恵 カツエ 輝恵 みつ穂 庚子郎 やす郎 たま 孝平 喜平 つね きん かず みき たき みつ 静代 美智恵 弧秀 金吾 紀代志 定次

大仏の胎内にて雨宿り

わかあゆ川柳会

小砂

ウインドーの晴れ着高嶺の花ばかり

覗きたい隣のために塀がある

日溜りの窓辺へ再起の身を運ぶ

おさな児の憎めぬ笑顔抱いてやり

笑顔にもヒジネス用と個人用

給料日妻の笑顔が嬉しくて

いい夢の続き見たくて目を閉じる

先頭が笑顔見せては絵にならぬ

晴れ着きて成人式に並ぶ猿

日溜りがそろそろ欲しい北の島

その人を慕って続く葬列や

この続き番茶一口飲んでから

さんざんさん銀杏夕陽と仲が良い

「おい、こら」で続くこの道まだ続く

日溜りは落武者たちを慰ませる

川柳泉尾

吉川

小吉を引いてめでたいおらが春

一週間男になりたいお正月

神さんの団体に願ひごと

正直も時と場合で馬鹿に見え

御神火も正月遠慮あそばして

南海の姿色どる国便り

新型税それでも女はおしゃれする

買うまいぞ男はだかのコマージュ

もっ少しもすこし辛を欲しがると

世渡りの上手な鬼が舌を出す

成人式母のへそくり軽くなり

禁酒禁煙今日から外してやる鎖

成人の汗は他人の痛み知る

白汀報

僕川

悦良

翠星

世似

聖子

英子

笑子

かつ子

歳栄

清泉

鈴江

民子

天痴人

はるみ

白汀

寿美報

広子

和子

はつ子

シマ子

淑子

清子

恭子

満州子

美子

美代子

三世

シメ子

弘子

成人の写真それから忙しい

石投げた波紋がもろに跳ね返る

おぼはんの片手の中で跳ねただけ

無人駅スタルマストロブ火が消えて

暖冬のストロブ部屋せまやかな

ストロブの余熱染しむ細目猫

ストロブの芯も女も燃えつきる

ストロブを囲めば男飲む話

うみなり川柳会

森田

集まれば時間忘れて歌に酔い

柔らかな嫁で姑の角が折れ

ふくらんだ梅に光の柔らかさ

しずしずつゆるんだ籬に気がつかぬ

鶴折っている女の指柔らかい

寄り添って夫婦はでかい輪を描く

柔らかい口調に乗って騙される

ファミコンが孫の友達皆集め

柔らかい掌の中硬貨汗をかき

柔らかい手編みの愛に負けました

ガラスでも愛の指輪がよく光り

どなるけど夫の心柔らかい

初めの顔も集まる契り酒

反抗期論す言葉が柔らかい

柔らかい陽差しに試す杖弾む

無雑作に掛けた輪ゴムに背かれる

精一杯園児は小さい輪を作る

今日も又張切る朝陽柔らかい

柔らかい手に堅い城崩される

木の陰でねむる兎の運不運

柔らかい言葉核心ついでくる

初東風の空に早起きつつがなし

熊生報

昭子

トミ子

敏一

義一

光子

光一

伴子

寿美

白水

幸子

唯津子

美佐子

久子

はるお

蛭

茂登子

吐詩男

重芳

日枝子

一止

正

黙光

よし子

雅女

富美湖

希満子

華子

草人

雄人

残り物集めてママの膳がすみ

甘酒の輪にいてなごむ花吹雪

柔らかな愛を少女の皿に盛る

合格の頬に春風柔らかい

わらべ唄少年の夢柔らかい

川柳藤井寺

赤木

不景気になって風邪ひく隙が出来

改まる年に何でも初の文字

仲間だと見せて腹ではさぐり合い

添寝して素顔で乳房ふくませる

置く霜に恋という字を書いてみる

人数の足らん時だけ仲間入り

風邪に寝る上司と出会うパチンコ屋

喜寿過ぎて星も神籤も気にならず

カタカナのお菓よりも玉子酒

有り過ぎて心が風邪を引いている

世渡りへ忘れ上手な耳となる

大学を落ちた理由を風邪にする

人込みを選んで娘の初詣

釣り仲間妻の機嫌もとって行き

一票を頼む賀状の二、三枚

因幡の旅平家の末路雪を掻く

好きやねん笹持つ仲間と恵比須さん

逝く友が逝くとむなしい反戦歌

老人会一人で隅にマスクして

誘われる憎い仲間美女もいる

来る人も行く当ても無き三ヶ日

老境にいれば冬木も仲間うち

海鳴りを挽歌に造船消えてゆく

静生

貞山

豊生

葉土人

熊生

和子報

美房

つや

須美

きよし

ときお

志洋

治江

吸江

重樹

昭子

美代子

作秀

伴子

ふみ

正人

秋園

とめ

与呂志

祐二

末一

麻雄

和美

雅美

初枝

よみかえる一様の酒仲間たち
マネキンのくしやみ一つで首がとび
ライバルのボトルも並ぶ棚の上
風邪ぐらいと言いつつ悩むわが齡
棒はずし重抜匂う防衛費
風邪はずきが酒の話に起きてくる
風邪で寝た一日の長いこと
弱肉強食 仲間背中狙われる

川柳 ささやま

脇田 脇田

米朝報

テ

とみ子

きしゑ

愛子

越山

美智子

和子

文平

米朝

エキオ

孝

久恵

雅二

素水

可住

山下みつる報

本蔭棒

雅果

希久志

比呂志

重人

凡九郎

糸切れた風になりたい日の男
又一年老いて解約する定期
着飾った女が嘘を持ち歩く
風上れしあわせ高う風上れ
人間ドック出て青空の美しさ
文字までも冷やし三面こんな記事

喜道 かな女 正枝 清心 みの郎 三郎 和子 米朝報 越山 美智子 和子 文平 米朝 エキオ 孝 久恵 雅二 素水 可住

東京へ一本杉も憧れる
眠い朝東の空が憎らしい
東西で引算合わぬ核の数
喜びは東の噂を連れてくる
怪しいとあの娘の仲を噂され
サスペンス怪しい女の影がゆれ
ハナムーン今は外国あたりにまゑ
移転先不明で淋しい年賀状
鉄と船国の柱も今昔
数の子の味は変らぬ今昔
移転した日は大も落ちつかず
古い二人旅の神を怪します
今昔浪速名所の法善寺
壁越しのカラオケ移転考える
七草をバックで知った若夫婦
名匠の能面怪しい彩放つ
謎めいた移転に深い訳があり
核さけて月へ移転も考える
タイムイング良過ぎて逆に怪しまれ

川柳後楽

井上柳五郎報

金太 金吾 浄美 玉水 桃風 中建 鮫虎狼 博友 健一 照路 英泉 哲流 虎醉吟 しげお 鉄心 醉舟 柳弘 洛醉 天平 敏 みつる

利息より沢山持って来た律儀
ちいさな親切大きな利子で返される
利子などはいらぬと恐い金を貸し
俸せも知らず女が金利追う
手袋に母のぬくもり忘れぬ
ぎつちょうの手袋ひだりよく忘れ
赤のスーツ黒い手袋で翔ぶ女
耕耘機軍手が持てばうなり出し
手袋へ悪の指紋が隙を見せ

岸和田川柳会

植山

武助報

秋月 草風 孝柳 美智子 拓治 柳五郎 哲郎 吟平 武助報 実 通彦 さよ子 ダン吉 希久志 富志子 浪速子 白光子 佳生 ゆづる 寿美子 圭一 こう 狸村 加代子 春栄 漁波 武助 勝晴 一弥

茶の間席汲茶が旨い尉と姥
忘れずに帰っておいでと鮭の稚魚

京都塔の会

松川

杜的報

あかぎれをいたわる妻のしまい風呂
目で食べるやはり食器が物を言い
野良猫の意地まるまると肥えている
来る年へ兎も出番耳を立て
湯豆腐へ今日の寒さをねぎらわれ
日記帳繰れば感謝の二字多く
木枯しが遠い記憶を持って来る
忘年会演歌が街を千鳥足
アザ一つ孤児の涙へ親が知れ
落ちるまで落ちて泥沼這い上り
ニュートンに林檎が一つ落ちて見せ
落ちそうで落ちぬピエロの綱渡り
円満に解決済み持ち帰り
何事も円満主義でよく纏め
三世代暮して円満羨まれ
円満な家庭の窓の灯が明かい
円満な夫婦で傷をかばい合
高齡化進んで趣味の手をつなぎ
進む過疎燃えろと知事の知恵あつめ
文珠菩薩孫の進学護摩木添え
いがみなりに進んだ人生かくし味
いくびつた知恵が進んでいた一歩
進学に祖母の貯金もあてにされ
円高が進んで財布風邪を引き
心だけ焦って足が進まない
進級試験見事パスして金がいり
進む世に歩調を合わすむすかしさ

甘平 操子 白李 敏正 達友 和年 芳子 杜的 求芽 風云児 花代子 明代 水客 紅陽 巨詩 陽露子 紫香 麗水 孝江 美穂 飛鳥 英子 白漢子 武庫坊

お茶の間に今年グルメのカレンダー
千年の樹齡も拝む初詣で
女子マラソンの熱気に京の雪ぬくし
新年の期待は一つ鳩時計
積立の話へ金利冷水をかけ
電話では言えぬ相談身がまえる
ストープの餅が気になる長電話
貸農園の大地に触れてネギをさす
帯しめる時はほんとに身もしまる
難病の足をいたわる手のちから
照りかえし達者な口も休んでる
冬ざれのまなうらにおく春曆
父さんもまじめな顔で愚痴も言っ
豆噛んでいのちのことを考える
年賀状も一度読む十五日
初めてのキスは忘れたフルムーン
雑煮碗夫婦の味もしみついて
芸能人離婚が続くおもしろさ
单身赴任睡魔追いつ猫の恋
幸せの地図描いたまま老ゆる
節分の鬼も懐炉を買いくる
若鬼にまだまだ負けぬ意地を持つ
顔出す日相談したつめくしの子
アリバイの相談でまた着らされ
税金の相談に来て色っぽい
鍵っ子の相談ブランク聞いてくれ
加減した筈でしたのに子沢山
手加減の狂った編物ネコに着せ
湯加減を年寄りがしてきらわれる石橋義

繁男 昇子 白水 憲太郎 美代子 志洋 徳子 喜代子 忠宏 寿美 末来 吐来 トミ子 敏 ケイ子 隅谷義一 満洲子 胡村 一屯 みつる 伴子 ガン吉 美子 重樹 蛙声 清子

サボテンを妻が大事に年を越す
遮断機はなまけ谷敷もなく降りる
のんきそうに師走の橋から舟覗く
セピア色の土堤寅さんは旅にいる
柚子湯して抗らうことは何もない
懐かしい人の喪を知る十二月
鯉じつと動かず山茶花咲いて散り
冥冥でてむなししい灯りの大広間
温め合う味方が欲しい独り酒
マルチース一度は吠えと顔見知り
火をつけて愛たしかめている愚か
噂はこんでくる風なら両の手に
少年の目に傾いた独楽の芯
同情が愛へ恋へと芽をのばす
男のポイントを教えてくれた思いやり
あたたかいなまけ受話器を置いてから
人情がある下町で焼くサンマ
母と子にぬくもりがあるかくれんぼ
ロボットのようになアイドル握手する
お使いの子の掌の百円汗をかき
心ブラで妻が私の手を握り
手を握り返して女くどくなり
福財布縁起の五円玉一つ
躓いてからは縁起をすくつかつき
茶柱が立っただけでも上機嫌

久世川柳クラブ 二宗 吟平報 静香

義理ひとつ犬の散歩が持ち帰る
美人妻持つて倅せ不倅せ
ご馳走のつづいたあとの粥がよい

隆二 昭子

川柳はびきの 田中 隆二 昭子

田中 隆二 昭子

スタートへ並べばみんなVサイン
美しい鬼なら角も柔かい

富柳会

池

森子報

見届けにやつて来ました出生地
手土産は地たまご十に決めている
焼きちくわちぎって料理いらぬ酒
節分のいわし焼くのも料理です

綾子
登志実
いつを
鬼遊

ひよどりか南天の実がへってゆく
母いつも甘栗をむく役である
尼崎をはま川柳会 上田

つえ子
寿美子
寅之助
武庫坊
よしづく

黒梓の中に入ると惜しい人
子に尽す惜しいと思う愛はない
争いも笑いも鍋は知らぬふり
嫁姑土鍋のひびを裏返えす
鍋一つあれば間に合う老夫婦
早よ帰る言って二次会三次会
秀才を小卒だけで働かせ
紅葉がロマンを秘めて地に帰る
焼け跡は蔵ばかりなり敗け戦
明日が不安で女は深い鍋を買う
一秒が惜しくも敗れテープ切る
結婚の指輪がいつか消えていた
父と母小さな鍋を大切に

母の日の料理やっぱり母がする
卵酒薬はいらぬと医者が言い
幸せな家庭庖丁研げている
母者人心の中に住む美人
穴あけてのむ卵にも父の顔
スパイスをずらり並べて何もせず
美人とは深水夢二が描くなり
もんしろ蝶飛んできそうな玉子焼
おふくろの味もいつしか私流
田のあぜで春眠さます美人の尻
受験する子の料理には願ひこめ
料理人変れば常連客も減り
新世紀見る眼鏡をば磨いてる
美しい人うつくしい嘘をつく

翠洋会
中西兼治郎報

兼治郎
萬里
さと美
美津枝
文子
君子
飛鳥
春江
良子
為子
照子
仙吉郎
光子
みつ子

一絃琴遙かな海に聞かせよう
自信あつてはるかな的へ勝負する
持統の昔唄んで立つや芋峠
秘密もつことは楽しい夢を生む
秘密でもないのに何故か声ひそめ
おこげ出来むすびの好きな子に残し
風紋が残す昨日の愛の唄
一本の髪から犯人割り出され
残雪に赤一輪は淋し過ぎ
仕来りに明治を残し母元氣
引つ越しにボツンと猫が残される
貸衣装ですとは言わぬ七五三
節分の豆をついはむ鳩一羽
均等法女らし夜でしきは失わず
あたたかい夜でしきは猫の声
茶柱に合格電話ありそうな
うれしい日山の絵をかく春の彩
床柱磨けば老父が声をかけ
梅の花観てよし香り食べてよし

正坊報
千歩
きく子
登代子
博史
典子
隆
萬的
眉水
房子
登志実
春子
喜代子
メ女
明
美祢子
武庫坊
よし子
福一
山久
曲ん手
英子
富子
慶子
佳秋
洋子

北だより屋根に雪載せ列車着く
芽萐きの屋根が嵯峨野の秋飾る
小銭入れ万札同居させてやり
銭持っているの酒の話せぬ
一銭五厘酔えは始まる父の癖
約束が後悔となる軽はずみ
約束をまじめに受けて馬鹿でした
からませて小指約束聞いている
左手の指は約束覚えてる
約束はとうに過ぎたよ花時計
薬にもなると丹波の寒の水
新人類も最後の頼みは天神さん
憂きはらし同類の寄る赤ノレン
一言居士の黙っている日の不思議
キラキラと水かけ地藏に銭が浮く
鬼は外豆まく声は口の内
暖房のある警察で叱られる
尼崎いくしま川柳会 上田

正月の装いが娘株をあげ
装いを変えればやさしい女の子
気どらずに装う妻の薄化粧
装って客席にいきる星の初春
腹帯のたしかな命に励ませ
高つかむたしにしぶとなる命
限りある命と知って無為の日々
哺育器の命見守るナースの腫
鞭打って命をつなぐ闘病期
亡き妻の命貫って生き伸びる

佳秋報
ときお
玉子
諷云児
山久
文夫
一久
かすみ
園歩
紫香

夢の助
向西
貞吉
貞男
すみ
昌子
十四郎
江美
文人
牧郎
よしづく
武庫坊
寅之助

紫香

豊かさの中で余命が案じられ
命綱のばし続けて海女の旅
底冷えの街で年賀の札を言う
卒業式礼一つして別れ行く
祝福のお札にキスをし見せる
妻へ礼すなおに言えぬ喉仏
度の過ぎた礼には何かいわくある
いんぎん無礼な男の靴をそつと踏む
札などは要らんと世話が行届く
生れ変つたら妻には礼言おう
黙礼を交して古い傷に遭つ
紙ヒコキ少年の丘風があり
駅前前の煙草屋がありふるさとよ
保険屋が命の計算してくる
空想のロマンスだから育たない
髭面に海の男の肩ぐるま
無礼講それから旨い酒になる
挑戦をなймаせてある招待状
虚しさを拾つただけの繁華街
譲られた席だ居眠りできません
札を言う老婆の言葉愚痴になり

西宮北口川柳会

奥田みつ子報

美代子 伊升 良征 定人 春子 保蔵 いわゑ 白浜子 伊三郎 歌子 曲ん手 はつ絵 みち子 静江 正一 年代 佳秋 杜的 君子 静子 かすみ 萬代 嘉矩 正一 園歩 青珠 光代

火の車がとつてもすこい見栄を張り
家を恋う病室の窓冬日和
逢いに行くブーツが痛い風の街
天井の節目数えていた孤独
子に頼るつもりはないというものの
正攻法だけではアカンと無口言う
映像がモノクロとなる雪景色
天井のない吹抜けを誉めてくる
寒椿旧い女の過去を秘め
妙案がひよいと浮かんだ耳掃除
頼る子にたらい廻しの核家族
水子地藏胸の痛さがつきまとう
大丈夫だろうか神戸に住んでいる
痛いところ突かれて穴を掘りかえす
補聴器の痛い言葉は聞き流す
春が来る迄古い疼きを耐え忍ぶ
寝ころんで天井にまた顔を描く
人並に育てて恩を売りががり
駄目でいい一度は頼る神ほとけ
わらべ唄餅がふくれて笑つてる
父さんの分まで喋る子に育ち
生きて行くきまの痛みを流す風呂
見栄捨てた茶の間へ明るい笑い声
重たくてまだまだ持てぬ亡父の筆
頼られて八十爺さん息が切れ
人よりも盲導犬を頼る杖
大声をあげたくなった絵馬の山
アンタも人間彼も人間そんなものなんだ
税金を納めゆつくり写経する
かすみ草どんな花とも添寝する
見栄張らぬ暮らし小さな旅ができ

米朝 一郎 春子 陽露子 伊三郎 伊三郎 正坊 よ志子 千世子 白浜子 紀雄 江美 みち子 惠美子 杜的 武庫坊 はつ絵 てる 颯云児 眉水 芳子 よし津 笑女 佳秋 保蔵 英子 いわゑ 凡九郎 美幸 隆子

冬のバラ頼まれごとを抱いている
外人墓地を歩いて孤独だと思つ
まごころと見栄にはつきり線を引く
足踏んだ痛さが続くおつき合ひ
バーゲンへ見栄を忘れた手がつれ
痛恨の至りと故人を惜しむ人
セレモニー精一杯の見栄をはり
表皮一枚剥いて気を許す
ふくらんだ餅を見つめている夫婦
空想の夢老兵は目をつむり
見栄切つた後のみぞれが身に沁みる
喪の痛み耐えて女は強くなる
社宅とは口が裂けても言わんとこ
かねたきお前も夜が痛いのか
ストレスのたまつた犬が夜鳴きする
その前夜和解の言葉投げに来る
バーゲンで買ったと言わぬのは指輪
ユーモアを知らない狼が手を叩く
隣よりでかいピアノを弾いている
嘘一つためて枕を裏返す
若やいで見よる男のアテランス
なめくじより見栄はつている蝸牛
粉雪のヴェールで消えた罪の色
注射針母も痛みの顔となる
へその緒で母ちゃんの歌聞きました
不合理な世の中だから胃が痛む
積雪が都市騒音を消しており
どん底で他人の痛みが今わかる
嫁がもう白髪を染める年になり
見栄だけを残り人間灰になる
痛そうな顔で傷口見てあげる

美智子 郁栄 幽香 白宗 定人 伊升 散歩 千秀 みつ子 文夫 曲ん手 三枝子 百合子 高子 良征 市雄 枯梢 俊子 山久 房生 麗水 博子 文平 善太郎 柳影 六郎太 保 芳仙 紫香

4 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3日(金) 午後1時半より 泉・笑う・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
川 柳 わかやま	5日(日) 午前11時開場 愛・星・花・男・面・女	紀の国会館201号室 (県民文化会館西隣) 4月は大会にて投句拝辞 (各題2句) 参加費 3,000円(句集あおい海、記念品、発表誌、昼食呈)
菜 の 花	10日(金) 夕6時より 布団・景色・歩く・ハガキ	八尾神社境内西郷会館2階 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	11日(土) 午後1時半より 鍵・袴・ひとすじ	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	11日(土) 午後1時半より 東の間・冷たい・粒・追加	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
西宮北口	13日(月) 午後1時より 支度・気まま・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木) 午後1時より 制服・紙コップ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電鉄高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南海電鉄 川 柳 会	16日(木) 夕6時より 秀・袋・爪	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
富 柳 会	16日(木) 午後1時より 挨拶・欠伸・甘酒	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南 大 阪 川 柳 会	19日(日) 夕6時より 疲労・身軽・一徹・リッチ	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	19日(日) 午後1時より 記憶・習性・学校・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	20日(月) 午後1時より 入学・封筒・おろおろ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1-3,5-801 田中正坊
川 柳 東 大 阪	25日(土) 夕6時より 芽・めがね・面接・めし	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 斉藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	27日(月) 夕6時より 敗北・ポスター・平等・慌てる	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

本社4月句会

日時 四月七日(火) 午後六時
 会場 メンズファッションセンター3階
 東区内本町一丁目 電話06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角
 おはなし
 兼題 「両方」 橘 高 薫 風
 「焼く」 榎 本 吐 来 選
 「細胞」 大 路 美 幸 選
 「気合」 松 川 杜 的 選
 高 杉 鬼 遊 選
 席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
 会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

5月の兼題 「注 文」 「傾 く」
 「海 峡」 「光」

本社5月句会は7日(木)

「夜市川柳」募集

第11回 「ドレス」 中尾藻介選
 3句・締切 4月末日
 最終回 「盃」 西尾 菜選
 3句・締切 5月末日
 投句先 〒593 堺市場上緑町二一九一
 河内天笑方
 堺川柳会

● 募 集 ●

六月号発表(4月15日締切)
 川柳塔(10句)西尾 栞 選
 水煙抄(10句)黒川 紫 香 選
 愛染帖(3句)橘 高 薫 風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「海」 土 橋 螢 選
 「脈」 二 宮 山 久 選
 「笛」 中 内 朱 坊 選

七月号発表(5月15日締切)
 川柳塔(10句)西尾 栞 選
 水煙抄(10句)黒川 紫 香 選
 愛染帖(3句)橘 高 薫 風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「現 実」 森 山 盛 桜 選
 「仕 事」 保 西 岳 詩 選
 「グループ」 小 池 しげお 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

4月の常任理事会は1日(水)

定 価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十二年三月二十五日印刷

昭和六十二年四月一日発行

編集兼 西 尾 巖

印刷所 藤 原 童 心 社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話 三〇六元一六九一四番

振替口座大阪81三三三六八番

編集後記

☆今月も川口弘生さんの追悼記事を掲載する羽目になる。ここ三ヶ月連続の計には気が滅入るばかりだ。常任理事弘生さんの川柳歴はその生い立ちと同じに由緒正しい。阪大川柳会で麻生路郎先生の指導を受けられた内海貞三博士に奈良医大の教室時代引きを受けた弘生さんの新人を育てる熱心さは、地元だけのことでなく、意外な人が投句の世話までして頂いたと述懐される。作句の軌道に乗るまで、まさに手とり足をとっての労を惜しまれなかった。冥福をお祈りする。

☆三月八日、「同期の桜」三人が神戸で会を待った。寺尾俊平・時実新子と私がそれぞれの出版記念をかねて、そのような会を一度はしておいても楽しかろうと催したのである。四国山陰はじめ京阪神その他各地から他社の方が賑やかに参会して下さりありがたかった。当日の俊平さんと私の選の

天位を獲得された方から便りあり、「数年前の最初のよめやうたえや川柳天国のテレビ放映に、投句をしたところ没であったが、その時、没になった句の寸評をNHKから知らされ、選者の心遣いに感銘して川柳を続ける気になった。」

という内容である。そういえば、尅大な数の没句に逐一評を書き込んだ記憶が甦る。歳月はこのように人材を育てるのかとうれしく、初心者養成の基本を思った。☆二月は寒暖相定まらず、風邪を二度も引いた。風邪を引くと読書がはかどる。二日ほど徹夜に近い状態で読んだのは、田辺聖子著の「花衣ぬぐや、田辺聖子著のいう俳人杉田久女の生涯を書いたものである。久しぶりに、一気に読んだの感を味わった。短歌や俳句の世界はたしかに川柳より厳しう道を歩んでいる。一読をお奨めする。

☆高野山普賢院での追悼川柳大会の詳細を掲載した。今から段取りをして盛会に

して頂きたく、特に地方の同人諸氏のご参加を切にお願い申し上げます。(薫)

▼趙容弼(チョウ・ヨンピル)氏のことが天声人語に載った。彼は「釜山港へ帰れ」を歌って有名になった韓国の歌手である。テレビで歌っているのを聴いただけだが、上手だと思いきな歌手の一人である。

▼「自分の体全体を声にしてしまう。その声に思いがすべてを託して、心と体が自然と融け合ってしまうような、そういう発声のことを『ソリ』と言う」そうだが、私の小学生時代に学芸会で、学校一といわれる歌の上手な同級生が独唱したことを思い出した。歌っているうちに、彼の目から涙が溢れ、ほほをつたって流れるのがライトに光って異様な感を味わったことがある。そんな状態の歌い方を『ソリ』と言うらしい。

▼永いこと音痴であった私は、カラオケを軽べつするほどで、知性派らしくふるまっていたが、歌うことを

覚えてから、歌のよきやむつかしきを知るようになった。俗語に、食わず嫌いと言うのがあり、川柳も同じようであったものでないことが出来ないうようである

▼川柳塔三四月号にアンケート。わたしは川柳を始めた理由と契機が載っている。年齢、環境、また動機もいろいろだが、川柳にかかわったことを一様によしとしておられる。知らなかつた頃よりも、知ったことにおける精神生活の豊かさは事実のようである(き)

☆四月プロ野球いよいよ開幕。毎年のことながら胸ワクワクの季節である。☆黒川紫香さんと私は共に阪急ブレーブスの火のファンで、シーズン中、顔を合わせると「やあ、頑張ってますナ」とか、「あきまへんナ」とか言っていてニヤリとする。それだけ通じるものもある野球のほなしである。考えてみると紫香さんとは川柳の話はあまり、いや殆んどしたことがない。

☆長年、阪急電鉄に勤められた紫香さんが阪急ファンなのは至極当然、不思議でも何でもないが、私の場合なぜ阪急が好きなのか、自分でもよく分らない。阪急沿線に住んだこともなく、身内や知人に阪急ファンがいたわけでもない。何となく、気がついていたら阪急が好きで好きで、ということになってしまった。

☆しいて理屈をつければ、弱いチームだったから、ということか。その頃はリーグ時代で、万年Bクラスだった阪急は、チームカラーも灰色と言われ人気がなかった。メジャーやマイナーという分け方をするようになって急はマイナーということになるのか。要するに、箭も杓子もが嫌い、だから、その反動で少数派に親近感を持つというわけ。

☆その後、川柳に惹きこまれたこととい、昔も今も私は本質的にマイナー指向が強いようだ。(史)

☆長年、阪急電鉄に勤められた紫香さんが阪急ファンなのは至極当然、不思議でも何でもないが、私の場合なぜ阪急が好きなのか、自分でもよく分らない。阪急沿線に住んだこともなく、身内や知人に阪急ファンがいたわけでもない。何となく、気がついていたら阪急が好きで好きで、ということになってしまった。

高橋操子 喜寿

句碑建立十周年

句集『万年青』刊行

記念川柳大会

日時 昭和62年5月17日(日) 12時半開場
 会場 高石市羽衣 新東洋 宝の間

南海本線羽衣駅下車西へ徒歩5分
 司会 板尾岳人・河内天笑

お話し

展示

十指

過去

少女

空港

八起

万年

賞

秀句

呈賞

締切

1時半

各題

2句

発表誌共

三、〇〇〇円(宴会費・句集・記念品)

★会場準備の都合がありますので出席ご希望の方はハガキ

で左記へ4月4日までにお申し込み下さい。

〒595岸和田市土生町一九八九—八

高橋操子

主催

岸和田川柳会

四月号

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイナップル・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
 なんば高島屋百貨店
 泉北高島屋百貨店
 京都高島屋百貨店
 阪神百貨店
 松坂屋百貨店
 そごう百貨店
 京阪モール店

サンストア中之島店
 サンストア淀屋橋店
 アベノ近鉄百貨店
 上本町近鉄百貨店
 東大阪近鉄百貨店
 奈良近鉄百貨店
 京都近鉄百貨店

なんば新川店
 虹のまち店
 ドーナチカ店
 南海難波駅店
 国鉄大阪駅店
 梅田大丸百貨店
 堺東店



大阪・なんば



TEL 641-0551